ㅋ2N86
178-3

文學士笹川種郎著

支那文學史

東京 博文館藏版

例言

一　悠々上下四千載を通じたる支那文學の歴史を叙でゝ之を三百有餘頁の間に收めんとす。業固より易きに非ず。乃ち僅に其要を摭み、其綱を擧げて總て大略に從ふ。要讀者をして支那文學の概觀を知了せしめんとするにあり。

一　册子の小なるは獨り評論に於て叙事に於て吝ならしむるのみならず、又自在に文例を引證ッる能はず。然れども一代の文學の風氣を知らしめんとするに於ては悉く文例を省略する能はず。乃ち能ふべき範圍に於て之を收拾して在り。讀者それ一を以て他を推して可ならんか。

一　先秦(秦朝以前)の文學を詳論するもの知友藤田劍峯氏の先秦文學あり。支那文學を史的に叙述したるもの古城貞吉氏の支那文學

史あり。各朝卓出したる文士の傳記は同人等合著の支那文學大綱ありて之を詳にす。今や支那文學の研鑽漸く盛ならんとす。又學界の慶事に非すや。余か此小著の如きは要するに其入門の指導たるに過ぎざるのみ。

一 此書引用參照する所の諸書尠しとせず。古書新刊一々歴擧し難し。然れとも余の淺學なる猶五車の書其百が一を窺はざるを憾とす。幸に異日の校訂を期せんかな。

一 經あり、史あり、詩あり、賦あり、古文辭あり、小說戲曲あり。篇短なりと雖とも盡く之を網羅せざるを得ず。但余かオの非にして余が識の淺なる、旣に縮地の術を會得せず。又縮景の妙なし。然れども此書若し支那文學に意あるの士に多少の資するものありとせば是れ豈望外の幸ならずや。

明治戊戌歲首夏窓外の新綠滴らんとする時

袖ヶ浦のほとりに於て

著者識

支那文學史目次

總說……一

支那の文明。支那の人種。南北兩人種の差異。邦自然の習俗。家長制度の發達。生存競爭の激烈。自尊自大の風。支那文學の特質。支那の文字。時代の區分。

第一期　春秋以前の文學

總說……一八

三皇。五帝。

一、書……二四

書の由來。今文尚書。古文尚書。尚書の價値。其文辭。

二、詩……三〇

詩の起源。詩の變遷。詩の六義。刪詩。支那の詩。詩の句。

三、易……三九

易の由來。連山歸藏周易。易の性質及其文辭。

第二期　春秋戰國時代の文學

總說……四三

周の末。春秋戰國時代の概觀。當時の思想界。

一、孔子と老子……四六
孔子の傳。其教義。論語。老子の傳。老子の書。其教義。其文辭。
二、孟子と莊子……五七
孟子の傳。孟子の書。其文辭。莊子の傳。莊子の書。其教義。其文辭。
三、屈原……六四
賦。本傳。其作。其性質。其文辭。
四　韓非子……六九
荀卿。韓非の傳。其書。其文辭。

第三期　兩漢文學

總說……七四
秦始皇。秦代文學。四漢文學。東漢文學。東漢の末。
一、賈誼と楊雄……八二
賈誼の傳。其思想及文章。楊雄の傳。其著書。其文章。
二、司馬遷と班固……八八
歷史の由來。司馬遷の傳。其著書。史に對する見解。司馬遷の晚年。史記の價値。其文辭。班固の傳。史記と漢書。

三、司馬相如……一〇六
漢代の辭賦。本傳。其文辭。風原と相如。漢代の作賦家。
四、詩と樂府……一一五
武帝時代の文學。四言。五言。七言。樂府。

第四期　魏晉及南北朝の文學

總說……一三一
六朝。魏晉以後思想に及ぼしたる勢力。其影響。
一、建安の詞人……一三九
魏武帝。文帝。曹子建。鄴下の七子。
二、陶淵明……一四七
阮籍。太康體。淵明の傳。其性格。其詩。其文章。
三、南北朝……一五五
謝靈運。顏延之。永明の體。梁。陳隋。

第五期　唐朝文學

總說……一七七

文學の盛運。唐朝の詩。詩の發達せる因。
一、初唐の詩……一六七
魏徵。四傑。陳子昂。沈宋體。張若虛。
二、李白と杜甫……一七四
李白の傳。其人物。其詩。杜甫の傳。其人物。其詩。李と杜。盛唐の詩。
三、韓と柳……一九八
韓の傳。其爲人。其文。其詩。柳の傳。韓柳の比較。柳の文。其詩。孟東野。
四、白樂天……二一五
本傳。其詩。元微之。中唐の詩人。
五、晚唐の詩……二二九
其詩風。其詩人。

第六期　宋朝文學

總說……二三二
新研究。性理說。文學。
一、蘇東坡と其前後……二三四
歐陽傳。蘇老泉。東坡の傳。其爲人と文章。其詩。蘇轍。曾王二家。黃庭堅。
二、陸放翁……二五〇
南宋の文學。放翁の傳。其詩。

第七期　金元の文學

總說……二五三
遼の文學。金の文學。元の文學。
一、元遺山……二五五
金の文士。本傳。其詩。遺山以後の元詩人。
二、小說と戲曲の發展……二五九
小說戲曲發達遲々の所因。支那小說戲曲の特質。其起源及發達。水滸傳。三國志。雜劇。四廂記。琵琶記。

第八期　明朝文學

總說……二七一
八股文。唐傳。明の文章。明詩。
一、高青邱……二七五
高啓。青邱の傳。其詩。其他の詩家。
二、李何七子と李王七子……二八〇
永樂以後。李東陽。李夢陽。何景明。李攀龍。王世貞。其他の諸子。明末。

三、小說と戲曲……二八八
西遊記。金瓶梅。渦若士。
第九期　清朝文學
總說……二九一
清朝の學風。考證學。性理學。現時の清。
一、詩人と文章家……二九五
侯方域。魏僧。汪琬。譚業舟。鍾牧齋。吳梅村。南施北宋。王漁洋。朱竹垞。
其他の文士。
二、小說と戲曲及批評……三一〇
紅樓夢。李笠翁。桃花扇。金聖歎。

支那文學史目次終

支那文學史

文學士　笹川種郎著

總說

支那の文明。支那の人種。南北兩人種の差異。拜自然の習俗。家長制度の發達。生存競爭の激烈。自尊自大の風。支那文學の特質。支那の文字。時代の區分。

支那の文明

洋々たる江河の流域に發生したる文華は燦として既に四千載の古に花咲き、獨り四億萬の大衆に光被したるのみに非ず、更に朝鮮に入り、更に絕東の島國に及ぼし、印度及び歐洲の文明に對して特殊に東亞の文明なるものを形づくりぬ。

支那の人種

坤輿の上概ね猶昏々として搖籃裡に眠れるの時に當て一道の烹光は既に此間に迸り文明の源泉は混々として流れ出でにき。若し世界文明の最も古きものを求むれば支那は即ち其一たるを誤らじ。

支那の國たるもと廣且つ大なり。從て其生息したる人種は單純なるものに非

南北兩人種の差異

ず。之を概別するも猶漢、滿州、印度契丹、西藏、土其古、蒙古等の大種族あり。若し之に加ふるに幾多の諸小種族を算せんか、恐くは倦を更ゆるも盡きざらん。然れども支那古代の文華を開導したるものは實に黄河々畔に居を占めたる漢人種にありとす。漢人種は北方に居し、文化先づ此に起り、古代歴史の中心を作り、自ら古代の歴史的人民となりぬ。南方の人種は文化觀るべきものなきに非りしが如しと雖とも北方の優且つ盛に若かず、終に古代歴史中心の外に委ねられ、其歴史壇上に活動したるあるは僅に春秋の終に於てす。若し北方と南方とを取て其差異を較せんか、兩者種族の全然異るあるを知るあらん。其相貌に於て、其骨格に於て、其言語に於て、外樣既に異れり。去て其性質を見んか、南方の人種は自から想像的也。北方人種の實際的なると異る。燕趙古來悲歌慷慨の士多しと稱せらる、彼等は時事に哭する也。筑を擊て不平の鳴をなし、匕首を挾で秦人を脅かす、皆時事の爲に盡す也。老子の太虛を說き、莊生の人世を觀たる、殆ど實際に遊かる。與に南方人種に屬する者。楚に怪力亂神を說くの多き、辭賦の南方に起りたる、皆以て南方人種の想像に富めるを知るべきに非ずや。此は詩

邪自然の習俗

趣に深く、彼は世間に長ず。皆て支那に遊びたる人、南北兩人種の風俗の差異を述べて曰く、南方の民は概して鬼神を信じ、北方の民は多く狐狸の妖を談ず、南方の民は跣足にして、北方の民は襪を著す、南方の民は秀氣多く、其俗粗ならざれども北方の民は多く妍麗にして其俗甚だ野なり、南方は犢を用ひ、併せて獸力を利用し、北方は車馬驅驅を用ふれども多く人力を恃む、南方は床を用ひ、北方は炕を用ひ、南方は多く鮮果を嗜み、鷄魚を食ひ、且つ淹猪膇を嗜み、肉湯には清を尊むの風あれども北方は肉湯に渾を尚び、鮮猪肉を嗜み、輕果を食ひ、鴨羊を嗜む、且つ夫れ南方は概して蟹を食ひ、北方は多く蒜を食ふ、南方は辨味を喜び、北方は鹹味を嗜み、衣服飲食日常必須の要品より風俗動作皆異れりと。

北方の地たる、山岳崔嵬として風光落寞に、眼界廣大にして、山大に野廣く、大陸的光景は自ら雄偉なるものあり。然れども地の北方なるは其氣候を寒からしめ、天然に衣食の裕なるを得ず。斯くの如きは北方人種の性格に影響し、其民をして實際的たらしめぬ。即ち北方人種が理想的生産物に乏しきは地與て力あり。

且つ尖れ天然の偉大なると刻渤なるとは民をして天然を恐怖せしめ、拜天の習俗を養成し、山川の祭祀を執行するを風となさしめぬ。故に舜や上帝に類し、六宗に禋し、山川を望し、群神に徧す。周の制、冬の日至には天を南郊に祀りて長日の至るを迎へ、夏の日至には地祇を祭り、管樂舞を用ふ。古より命を受くるの帝王常に封禪を行はざるなし。世の隆なる毎には封禪し答し、衰ふるに至て息む。顏師古曰く、封禪とは山に封土し地に禪祭するなりと。通義に云ふ、姓を易て王たるとき太平を致せば必ず太山に封し、梁父に禪す、天命を以て王たり、群生を理し、太平を天に告げて群神の功を封ぜしむるなりと。要するに遍般拜自然の習俗になれるは自然を恐怖するに因するなり。拜自然の習俗は自から崇古の觀念を伴ひ、家長制度を胚胎するに至り、延て統治權の上に其勢力を有するに至れり。ランヒッテ(Laffitte)其の『支那開化の概觀』(A General View of Chinese Civilization)に於て論じて曰く、

家長制度の發達

是を要するに支那開化の心的基礎は拜天なる祭祀宗にあり。從て社會の醇素は孝行、親權及び祖先崇拜より成れる家族に在り。從て又純乎たる平和の統治起り、統治權は親權より起ると信じたる階級制度に非ざる人民を作るに至りたるは洵に自然の趨向なりとす。

生存競爭の激烈

と。此說略論じ得て當れるものあり。

且つ夫れ支那國土の大なると、領域の放開せられたると、從て人種の多く割據したるとは其間に生存競爭をして熾ならしめぬ。三皇五帝の間の如き、秩序井然として洋々美德を存し、禪讓の際謙遜推賢の觀をなせりと雖とも要するに是れ後人の推重と、歷史の不明と、史家の誇大とに依て、之を神人となし、之を至聖となしたるのみ。其位を承くる者も畢竟與奪與敗の圈子裡を脫し得ざるなり。昔し太古皆て君なし、其民聚生群處し、母を知て父を知らず、親戚兄弟夫妻男女の別なく、上下長幼の道なく、進退揖讓の禮なく、衣服履帶宮室蓄積の便なく、器械舟車城廓險阻の備なしと呂氏春秋に云へる古は措て問はず。三皇の如きも要ずるに部族の名に過ぎざるべし。此時代に在ては三皇を他にして共工氏の雄を一方に稱したるあり。五龍氏、燧人氏、大庭氏、柏皇氏、中央氏、卷須氏、栗陸氏、驪連氏、赫胥氏、尊盧氏、渾沌氏、昊英氏、有巢氏、朱襄氏、葛天氏、陰康氏、無懷氏、斯れ蓋し三皇已來

天下を有つ者の號なりと傳へられたるを見るも、容成氏、驩兜氏、祝融氏の名莊子に載せたるを見るも、太古北方支那に於て部族の多くして競爭の極めて盛なるを知るべき也。然れども此の如き競爭の激烈なるは存するが如く亡ぶか如き三皇の事に於てのみならず、覺むるが如き夢みるか如き五帝の事に於ても髣髴之を見るを得べく、獨り三皇五帝のみならず、是より以下幾千載猶今に於て嬴頻劉起革命更立の國たるなり。大戴禮に少典軒轅を產む、是を黃帝となす、黃帝玄器を產み、玄器蟜極を產み、蟜極高辛を產む、是を帝嚳となす、帝嚳放勳を產む、是を帝堯となす、黃帝昌意を產み、昌意高陽を產む、是を帝顓頊となす、顓頊窮蟬を產み、窮蟬敬康を產み、敬康句芒を產み、句芒蟜牛を產み、蟜牛瞽叟を產み、瞽叟重華を產む、是を帝舜となす、及び象敖を產む、顓頊鯀を產み、鯀文命を產む、是を禹となすとあるが如きは固より信ずるに足らず。呂氏春秋に五帝固より相與に爭ふ、遞に興廢し勝者事を用ふと云へるは能く其實を得たるものと云ふべきなり。其仁は天の如く、其知は神の如く、之に就けば日の如く、之を望めば雲の如く、富で驕らず、貴くして舒せずと稱へられたる帝堯放勳も亦是れ一個部族の長にして終に

商辛氏を倒して北方に雄視したる一豪傑たるに外ならざるなり。舜歷山に耕す、歷山の人皆畔を讓る、雷澤に漁す、雷澤上の人皆居を讓る、河濱に陶す、河濱の器皆苦窳せず、一年にして居る處聚を成し、二年にして邑を成し、三年にして都を成す、其人や至德の如しと雖とも是れ豈與望を收めたる人傑なるか故に非すや。汲冢書鈔に堯の德衰へ、舜の囚ふる所となる、舜堯を囚へ、復丹朱を偃塞して父子相見るを得さらしむと云ふものの或は個中の消息を解し得たるものに非るなきか。堯は丹朱に讓らざるに非ず、勢は丹朱をして陶唐氏の大業を承けしむる能はざりしなり。禹の父鯀は當時の有力者にして志を得すして羽山に殛せられ、夏后氏の强も雌伏の已を得さるに出でぬ。禹や乃ち鞠躬十三年、身を疏水の大業に委ね終に偉功を奏せり。一篇の禹貢は彼が功蹟の表に非すや。チャルメルスが疏水の大功を以て禹の業に非ずと云へるは未だ與に論ずるに足らざるなり。禹は斯くして威望を加えぬ。其人たる、猾智に富み權謀に巧に、遽く群雄に凌ぎたるものあり。淮南子原道訓に故に禹裸國に之く、衣を解て入り、衣帶して出づるは之に因るなりと。彼は能く與望を博する技倆に長せり。されば舜

が有苗氏を征するの後に起り、舜の子商均の爲すなきに乘じ、有虞氏を倒して北方人種間に覇を稱するに至りぬ。若し支那太古史を取て之に精細なる觀察をなせば又之れ與奪競爭の走馬燈に過ぎざるなり。夏殷周に至ては漸く鞏固なる團結を作り、統治權の領域も廣大なりきと雖も革命は終に已まざるなり。秦始皇出でゝ稀世の英資を以て大に中央集權の實を擧げたるも祖龍殂して又群雄の紛出を來たせり。生存競爭の激甚にして、革命の頻起するは自ら國民性格に影響せざるを得ず。排外の風となり刻薄の俗あるは是が爲めなり。

自尊自大の風

江河の間に侵入し、占居し、勃興し、競爭し、或は合ひ、或は離たる北方人種は支那古代に於ての歴史的人民なり。彼等が崇古の念熾なるは既に云ひき。然れども獨り崇古のみならず、其後漸く國土の大となれるや、既に自ら中國を以て居り、文化東亞に敵するなきに至ては種族の競爭は沈澱したる思想界を刺擊すると能はず。遼金の種族、突厥回紇の部族、或は蒙古、或は滿州の族中國を侵して命を制したるものありと雖とも文化はもと中國に敵すべくも非ず。其文明に心醉し、其文化に喰喝するに至ては、革命の氣運は短歲月にして睡眠の境域に陷て起たず。支那の中國を環て文化彼に敵すべきものなく、彼は獨り自ら中國と稱するのみに非ず、事實は彼をして中國たらしめ、他をして蠻夷たらしめたり。慢心するものは發達せず、沈澱したるものは腐敗す、之に加ふるに崇古の俗を以てす。支那の思想界は斯くして發達を妨げられ、文化又進む能はず。雄大なるものは絶えて纖微となり、深厚なるものは起らずして浮薄となり、國に活氣を失ひ、老耄となり、世界の大勢に通ぜずして自ら世界文化の中心を以て居り、舊夢に戀々として活眼を開て一轉化せしむる能はず。今に於て依然たる舊阿蒙たるなり。

支那文學の特質

余は略支那人民の特殊なる點を指摘したり。去て遷般特殊なる點が如何に支那文學に影響したるかを觀んか。反言すれば支那文學の特殊なる性質を擧げんとするにあり。

支那北方人種は古代に於ける歴史的人民なり。其影響する所は即ち廣且つ大なり。彼等は理想的傾向を有せずして實際的傾向を有せり。其生產したる所の儒教なるものは最も其好摸本に非ずや。南方思潮の傾瀉したる時代は即ち之れありと雖とも儒教は其根本に於て三千載に渉りて禹域の人心を繫縛して

道德の大本を誨へ、政治も、宗教も、文學も盡く、其模型裡に投ぜられぬ。斯の如く儒教を出したる北方人種の文學は實用的文學にして、斯くの如く儒教に繫縛せられたる支那人民所産の文學は自から實用的文學なりき。歴史、論策の如きは既に遠く古代に於て名篇大作を出したりと雖とも理想界の産物たる小説戯曲の如きは僅に元朝に至て其端を開きぬ。且つ夫れ歴史の如き、論策の如きものと雖とも猶儒教の模型裡物たるを免かれず。詩と云ひ、叙事文と云ひ、常に儒教の見地より打算せらる。支那に雄渾なる叙事詩のなきも是が爲めなり。小説戯曲の大作なきも是が爲めなり。崇高優美なる美術なきも是が爲めなり。幽玄深重なる宗教なきも是が爲めなり。

地の廣且大にして山川の雄偉なるは自ら其文學に影響して壯嚴崇高の風調を帶ばしめ、誇大の氣格を有せしめぬ。南方風物の熙々たるは纖麗の調を加味したるものなきに非ずと雖とも壯嚴誇大の風は支那文學の特色とする所たり。司馬遷の史記は史として重ぜらるゝもの、然も該下の一戰を叙するや、項羽一睨すれば赤泉侯の人馬俱に靡き避易數里と記するにあらずや、李白が秋浦歌の白髮三千丈の如き、北風行の燕山雪花大如席の如き、皆是れ一に誇大ならざるはなし。然れども其生産したる所のもの、叙事文と云ひ、議論文と云ひ、詩と云ひ、格調莊嚴にして雄大の氣風横溢するか如きものに富めるは洵に支那文學か異彩陸離たるの所なりとす。

崇古の風熾なるは典故の濫用となり、復古となり、擬古を尚ぶの風を養成したり。明の吳梅村の永和宮詞は唐の白樂天の長恨歌と相並で名作と稱せらるゝもの、然も一句盡く故事に據らざるはなく、首より尾に至る、擧げて典故ならざるはなし。獨り永和宮詞のみに非ず、典故の引用の多きは作者が以て誇る所となし、文士爭て力を此に用ひき。且つ夫れ古文崇尚の弊は擬古文を奬勵し、終に俗文學の發達を害せしめたり。後世元に至て戯曲作る。然も戯曲と雖とも猶典故を濫用するの傾あるに於てをや。

排外の性質は他に文學の影響を受くること少く、特立に支那文學なるものを發達せしめたり。支那文學は能く其附近の諸國に影響したりと雖とも他國文學か影響したるは甚だ稀少にして殆ど其痕跡を留めざるなり。

支那文明の遲々たるは思想界の發達を來たさず、從て文學なるものに大進歩なし。嘗て一たび異彩陸離たりし文學は獨り故書敝紙の中に光明赫灼たるのみ。先秦諸子の論、漢代史家の筆、唐宋詩人の作は後世之に追及するものなし。元代出せるの水滸傳に及ぶの名篇は明清に見得べからず。元代の雜劇出でゝより清に至るまで其間發達したるもの幾許ぞ、僅に李笠翁の俗耳に入り易からしめたるを以て之を進歩の稍大なるものと云はんのみ。

諸種の因は獨立に若くは種々に聯絡して支那文學の特色を作り出せり。而して支那文學の特色なるものは概ね上に云へるものゝ如し。然れども未だ猶之を以て足れりとなすべからず。姑く支那文字なるものを考覈するの要あるを見るなり。

支那の文字

支那文字の起源は遠し、世に傳へて黄帝の時蒼頡沮誦の作る所なりと云ふと雖とも信じ難し。且つ伏羲龍書を作り、神農穗書を作り、鳥跡は黄帝の時蒼頡之を作り、少昊の時鳳鳥あり、高辛の時、科斗あり、堯の時龜書あり、夏后氏の時に鐘鼎あり、殷の時務光薤葉を作り、文王は魚書を作り、周には象形あり、文王の時史佚は廻鸞書虎書を作り、周の媒氏は塤象塤書を作ると說くものあれども字躰も存せず、傳說も信ずべからず。伏羲の德上下に合し、天應ずるに鳥獸文章を以てし、地應ずるに河圖洛書を以てす、是に於て仰で象を天に觀、俯して法を地に觀、中万物の宜しきを觀て、始めて八卦を畫し、書契を造り、以て結繩の政に代ゆと傳へられたるも、要するに捕風捉影の談のみ。唯其起源の遠く古代に在りたるは斷として疑ふべからず。

周に至て六書あり。一に象形、二に指事、三に諧聲、四に會意、五に轉注、六に假借是れなり。

一、象形　是を其象に取り、畫形より轉じたるものを云ふ。例すれば日月の字は其形より來れるが如し。

二、指事　又處事とも云ふ。例すれば上下の如し、上下は古文 ⊥ ⊤ 物一の上に在るを上となし、一の下に在るを下となす。各其處を有し、事其宜きを得、故に處事と云ふ。

三、諧聲　又形聲とも云ふ。例すれば江河の類の如し、皆水を以て形となし、

工可は其聲なり。

四、會意　二三の躰あり各義を有し、合して字を成すと云ふ。武、信の類是れなり。武は止にして戈を止むるの義を有す。信は人と言とを合す。而して人の言の義なり。

五、轉注　一字を基として之に他字を加えて他意に轉用す。例すれば老考の如し。

六、假借　一字を數用し、其義を異にするを云ふ。例すれば令、長の如し。號令の令は縣令の令となり、長短の長は長者の長となれるが如し。

宋の鄭樵の通志には六書を細別せり。即ち象形には天文、山川、井邑、草木、人物、鳥獸、虫魚、鬼物、器用、服飾の形あるものと象形會意を兼ね、象形諧聲を兼ぬるもののありとなし、又別に象貌、象數、象位、象氣、象聲、象屬の目を列し、指事には正生と兼生とを分ち、兼生は事兼聲、事兼形、事兼意の別ありとなし、諧聲には正生と變生のものを分ち、變生には子母同聲、母生聲、主聲不主義、子母互爲聲、三躰諧聲、聲兼意の別をなし、會意には二躰會意、三躰會意の別をなし、轉注には述類主義轉注、述類主聲轉注、互聲別聲轉注、互聲別義轉注の目を分ち、假借には即ち曰く、六書唯假借のみ明にし難し、假借は本と已れ有するに非ず、他の授くる所なりと、分て同意借義、借同意不借義、協音借義、借協音不借義、因義借音、因借而借、語辭之借、五音之借(宮商角徵羽)三詩之借(風雅頌)十月之借、十二辰之借、方言之借と又別に双音並義不爲假音の除例を置けり。

蓋し文字發達の順序も亦象形より指事、而して諧聲、而して會意、轉注、假借と、漸くにして其足らざるを補へるなるべし。然れども要するに象形文字を基とした る支那文字は多く目に訴へ、同義にして幾多の字を有し、聲音外別に讀むものゝ感を起さしむ。其利や、双個の作用となり、美術的となる。其弊や、粗放となり、散漫となり、緻密ならず、正確ならず。又以て支那文字が支那文學に於ける偉大なる影響を知了するを得ん。

時代の區分

上古と云ひ、中古と云ひ、近代と云ふ。時期の分劃は唯其便宜に從ふのみ。依て以て標準となすべき所は即ち莫し。余は今支那文學史を敘述せんとするに當りて這般漠然たる時期の區劃を廢し、略各朝各時代に小分して唯に之を說かん

とす。春秋以前を第一期とし、春秋戰國を以て第二期となし、秦漢を併せて第三期となし、魏晉南北朝を第四期となし、唐を以て第五期に配し、宋を以て第六期となし、金元を第七期と定め、明清二朝を以て第八期第九期となすなり。即ち支那史を九期に小分して各期間の文學を連鎖的に叙述し、之を首尾一貫せしむるに在るなり。

蓋し支那文學發達の順序を概觀するに各時代に於て各多少の異色を有す。革命は又文學に多少の革新を鼓吹す。政治に於て前期の弊を矯むると與に文學の弊も亦矯正せらるゝものなくんばあらず。且つそれ政治の方針は又文學に影響するものなり。唐朝詩を以て士を取れば詩の發達を來し、宋代策問を以て人を試みれば論策の文最も盛なり。文學の消長是に於てか政治に伴て在り。支那文學は回顧的なりと云ふ。支那北方人種の保守的なるは自から其傾向なくんばあらず。時期の變遷と云ふと雖とも猶走馬燈と異らず。革新と云ふと雖とも實は復古に過ぎずと。蓋し多少此實なきに非ず。宋の思想界は春秋戰國時代の思想界を回顧したるか如し。清の考證學は漢唐の訓詁を回顧したるに似たり。然れども單に之を繰返すものに非ず。宋代の思想豈先秦に同じからんや。清の考證豈漢唐の訓詁と異るとなからんや。支那文學なるものも實は發達し、實は進歩せり。調和と折衷は常に時期の變遷に從て行はれき。其回顧と云ひ、復古と云ふものも全然たる回顧に非ず、純乎たる復古に非ず。調和し折衷し、而して其形迹に於て回顧たり、復古たるなり。而して實は反動なり。猶潮の一昂一低するが如きか。先秦の諸子横議縱說す。漢唐の章句訓詁は其反動なり。宋代の性理說は漢唐の反動なり。清朝の考證は宋代の反動なり。是を南北兩思潮に觀る。先秦は其末に於て多少會流したるものありきと雖とも實に南北兩思潮對立の時代なりき。漢代に至て稍混和し、六朝に至ては南方思潮は殆ど北方思潮を傾倒したるものありき。佛教の支那に注ぎ來りたるも實は其南方思潮と近きか爲めなり。唐以後に於て兩思潮は猶澎湃として時々處々各殊に流るゝものありと雖も其大躰に於ては兩者融和し、混同し、折衷す。其特殊なるものも亦多少の調和を免かれず。是を先秦の全然たるものに比すれば又別趣の觀なくんばあらざるなり。要は調和の多少にあり、折衷の仕樣に

あり。故に獨り學說に於てのみならず、時に於て文に於て又傾向を存せり。各期に分て支那文學を叙するの故は其時代的精神を示さんが爲めなり。其各特殊の異色あるが爲めなり。然れども物の起る其素なくんばあらず。物固より特立に發達するものに非ず。宋朝に於て性理の紛起したるものは獨り兀然として宋朝に崩芽し、發達したるには非ず。韓愈唐に出でゝ儒を唱へて釋を排けんとす。其說淺薄取るに足らずと雖とも是れ豈氣運の漸く萌せるものに非ずや。必ずしも時期に拘泥すべからず。然れども又各時期は各殊の時代的精神あり、又各殊の文學あるを忘るべからざるなり。支那文學史を各期に分て叙述するの所以は即ち此にあり。

第一期　春秋以前の文學

總說

三皇。五帝。

三皇

支那の太古を云ふもの先づ三皇の事を以て始となす。然れども三皇の事たる、もと邈として攷ふべきなし。故に司馬遷の史記を著す、筆を五帝に始む。且つ夫れ三皇の名たる、古書既に同じからず。尚書大傳、白虎通は燧人氏、伏羲氏、神農氏を以て三皇となし、春秋運斗樞は伏羲、女媧、神農に作る。史記司馬貞、補三皇本紀亦伏羲、女媧、神農を叙ず。孔安國序には伏羲、神農、黃帝を以て三皇となす。又天皇、地皇、人皇を以て三皇となすものあり。其順序に就ても亦異說を存す。三五歷記には伏羲は神農黃帝の間にありとなす。然れども三皇の名目其順序の如きは之を考證して何の得る所なし。畢竟北方人種の部族興廢し、盛衰したるものを連絡あるが如く說きなせしのみ。女媧が宓犧に代て立てるは部族伏羲の衰替し部族女媧の盛四隣に振ひたるを云ふなり。女媧氏沒して神農氏作ると云ふは部族女媧の敗亡し、部族神農氏の興起したるなり。伏羲の母華胥大人の迹を雷澤に踏で庖犧を成紀に生む蛇身人首とあるは帝王世紀が怪誕なれども之を一人となす、既に眞を得たる者に非ず。燧人氏は火を燧るを敎へ、此に火食の道を傳へたりと云ひ、伏羲氏は結繩の政を罷め、佃漁庖廚を傳へたりと云ひ、

神農氏は耕耘貿易を教へ、醫藥の道を傳へたりと云ふ。固より此時代に確然此等の劃まりたるに非ず、要は大古狀態を傳へたるなりと雖とも支那太古史は自然的より人事的に進む順序を略說き明せり。其叙づる處恐くは後人の業なるべし。然も自ら太古の狀態文物進歩の順序を敍述したるものあるなり。伏羲が八卦を傳へたりと云ふもの、固より信ずべからず。女媧氏が五色の石を鍊て天を補へりと云ふは淮南子覽冥訓に見ゆるも殆ど是れ一種の神話に屬せり。然れども强豪なる部族共工氏と苦戰したるの狀は以て察すべきに非ずや。共工氏或は以て帝となし、或は以て伯にして王たらずとなす、孰れにしても是れ豈當時の大部族たるを證するに非るなきか。呂氏春秋に夙沙の民自ら其君を攻めて神農に歸すと見え、劉氏外紀には諸侯夙沙氏叛して命を用ひず、神農退て德を修む、夙沙の民自ら其君を改めて來歸し、其地南交趾に至り、北幽都に至り、東暘谷に至り、西三危に至り、所從せざるなしとあり。又是れ當時强大なる部族夙沙氏なるものありたるを示すものに非ずや。神農地を拓て南の方交趾に至ると云へるは言もと虛誕に屬す。三危の地は未だ神農氏の時に服せざりしところ、

五帝

東を云へば暘谷と云ひ、北を云へば幽都と稱す。支那史家が慣手段なるを思へば唯其大となれりと云へば則ち可ならん。但し神農氏が大部族にして雄一方に覇たりしは其八代五百三十年と傳へられたるにても推知するに足らんか。黃帝の事業に至ては之を三皇に比すれば著きものあり。其境域漸く支那中原に及ばんとせり。阪泉の野には炎帝を破り、涿鹿の野には蚩尤を戮す。然れども遷徙往來常處なく、師兵を以て營衞となす、又是れ粗野なる時代の描寫に非ずや。南征北伐は未だ鞏固なる中央政府を建設するに至らざりき。然れども黃帝は支那文化の上に於て大なる影響を及ぼせり。北、河を渡りて葷粥に至り、南江に及ぼして南方人種に接觸せり。他方の文化を吸收して之を其部族に分賦したるは少々に非るなり。蒼頡沮誦の輩が文字を製したりと傳へられたるも此時代なり。宮室を造りたりと稱せらるゝも此時代なり。蓋し支那中原の大部族苗民との接觸は黃帝の時に始まり、顓頊の時に於ても衝突をなしき。墨子に昔し三苗大亂あり、天命殛の日、妖宵出で血を雨らすこと三朝、龍、廟を生み、大に市に哭し、夏冰り地拆けて泉に及び、五穀變化す、民乃ち大に振ふ、高陽乃ち玄宮禹

に命じ、親ら天の瑞を把て有苗を征せしむとあり。堯は南蠻の征服に從事し、丹水の浦に戰へり。舜や其最も力を注ぎたるは苗人種の征伐にして、呂氏春秋には舜苗民を却けて其俗を更易すとあり。荀子議兵篇には舜有苗を伐つと見ゆ。而して征途未だ半ならずして軍旅の間に英志を齎らして逝きぬ。淮南子脩務訓には曰く、南三苗を伐て道にして蒼梧に死すとあり。五帝本紀には南巡狩して蒼梧の野に崩じ、江南九疑に葬る、是を零陵となすと載せ、孟子には鳴條に卒すと記せり。呂氏春秋には舜紀市に葬とあり。註に九疑山下亦紀邑ありと見ゆ。蒼梧の野は湖南省永州府との說ありと雖とも南方に入ると深きに過ぐるが如し。鄭玄は鳴條を指して南夷の地と解す。孰れにしても地の南方に屬するや昭々たり。思ふに苗族は南方人種の最も強なる者、五帝本紀には三苗は江淮荆州にありと見え。吳起は曾て曰く、昔し三苗氏洞庭を左にし、彭蠡を右にすと。山海經に黑水の北、人あり、翼をなす、名けて苗民と曰ふとあり。其種族の分配したる區域は僅小なるものに非ず、楊子江畔沃野千里の地は彼等が蔓延し居を占めたるの處、其文化は遲々たりと雖とも猶觀るべきものなからざりしか如し。

然れとも北方人種の強にして日に開くるか爲に壓せられて古代歷史の圈子裡に入る能はざりしなり。左傳に云ふ、古より諸侯王命を用ひず、虞に三苗あり、夏に觀扈ありと。彼等は北方漢人種と其生存を競爭したるなり。斯くの如くにして漢人種は一方に疆域の擴張を企て、他方に於ては駸々として文化の漸く觀るべきものありき。堯は九族を親ましめ、歷數を正し、五官を飾へ、衆功皆興ると傳へられ、舜の時皐陶大理となり平にし、民各伏して其實を得、伯夷禮を主りて、上下皆讓り、垂工師を主りて百工功を致し、益虞を主りて山澤辟け、弄、殺を主りて百穀時に茂く、契司徒を主りて百姓親和し、龍賓客を主りて遠人至る、十二牧行て九州敢て辟違するなし、唯禹の功を大となす、九山を披き、九澤を通じ、九河を決り、五州を定め、各其職を以て來貢して厥の宜きを失はず、方五千里荒服に至り、南は交阯、北發を撫し、西は戎、折枝、渠度氏、羌北は山戎、發、息愼、東は長、島夷、四海の內咸帝舜の功を戴く、是に於て禹乃ち九招の樂を興し、異物を致し、鳳凰來り翔る、天下德を明にする皆虞帝より始まると稱せらる。言固より誇張に失すと雖とも亦以て舜が經綸の一斑を窺ふに足るべし。淮南子脩務訓に曰く、舜室を作り牆を築く、

茨屋辟地報を樹て、民をして皆巖穴を去て各家室あるを知らしむと。或は樂を起し、或は庠序を設け、伯夷をして三禮を典らしめ、或は契をして五教を布かしむ。支那の文化は漸く觀るべきなり。是より夏となり、殷となり、終に文質彬々たる周に至りぬ。

支那文化の萌芽し、發展したる此等第一期の間に燦然として觀るべきの文學は書なり、詩なり、易なりとす。順次少しく語る所あらんか。

一、書

書の由來。今文尚書。古文尚書。尚書の價値。非文辭。

書の由來

三墳五典八索九丘の名は後世に傳りて堯舜以前既に載籍の存したるを知るべし。而して最古の書今猶傳ふるものは實に書なりとす。書一に尚書と云ふ。尚は上なり之を尊むこと天の如し、故に爾か云ふと說くは從ふべからず。王充の論衡に云ふ、尚は上なり、上の爲す所下の書する所なりとあるも從ひ難し。馬融は曰く、尚は上古の義なりと。此說最も妥當なりとす。蓋し古代に在ては左史事を記し、右史言を記す。周の宦府は多く斯くの如き書を藏して在り。孔子周に遊ひ之を見、史籍を展檢して古聖國を治むるの大經を取り、上は唐虞より下秦穆に至り、典謨訓誥誓命の文其數凡そ百篇を收む。書即ち是れなり。後世尚書と云ひ、書經と稱する者は是を云ふなり。秦皇焚書の禍あるや、書は火坑裡に一片の煙と消し去りて古帝王の道殆ど泯びんとせり。漢興て惠帝挾書の刑を除き、文帝頻に尚書の學者を求む。偶濟南の人伏生の尚書を治むるを聞て之を召す。伏生時に年九十有餘歩行甚だ艱む。乃ち人をして就て學ばしむ。蓋し伏生は秦の博士にして焚書の禍あるや、書を取て之を屋壁に藏して僅に免れたるなり。其後之を出して僅に二十八篇を得、今傳ふる所の今文尚書は即ち是れなり。其中盤庚を三篇に分ち、顧命の一部を割て康王之誥となし、又武帝の時得たる太誓を三篇に分ち、合せて三十四篇となす。伏生の學は張生歐陽生に傳り、張生の學は大夏侯小夏侯の學となり、歐陽氏の學と與に今文尚書を傳へぬ。漢の惠帝の子共王魯に封ぜられ宮室を治めんとし、孔子の舊宅を壞て尚書を壁中に得たり。篇數五十有八。文皆科斗にして讀むべからず。博士孔安國今文

今文尚書

古文尚書

に據りて文字を合せ考へ、就りて之を朝廷に上りき。是を古文尚書と云ふ。然れども當時巫蠱の事ありて學官に列すること能はずして秘府に藏するのみ。其後晉に永嘉の亂ありて全く亡びぬ。

東晉の元帝興るに及び、豫章内史梅賾、古文尚書を得たりと稱し、孔安國の序と與に之を朝廷に上る。唯舜典一篇のみ缺けて存せざりしを以て堯典を分て愼徽五典以下を舜典となす。曰若稽古帝舜曰重華協于帝濬哲文明温恭允塞玄德升聞乃命以位の二十八字は齊の明帝建武四年姚方興なるもの、王肅范甯の註より采て之を僞作したる也と云ふ、此れより古文今文と相並で行はる。皇甫謐の帝王世紀を著すや、古文を采取し、唐の陸德明は古文に據りて釋文を作り、孔穎達は勅を奉じて古文の孔安國傳疏を作り、是より又古文を疑ふ者なし。宋の吳棫出づるに及で書裨傳を著し、始めて疑義を挾み、朱子も亦疑ふ所あり。然れども朱子の門弟子蔡忱に至りては集傳を作りて更に疑ふ所なかりき。元の趙孟頫に至りて今文と古文とを別に註し、吳澄は獨り今文の釋のみを作りぬ。然れども未だ其僞書の明證を指擧する能はず。明の梅鷟出でゝ始めて能く諸書を參攷して證する所ありき。然も猶晴て詳ならざるものあり。清の閻若璩博學逮識の考證家を以て聞ゆ。古文尚書疏證八卷を著して條々分析して古文の僞なるを辨ず。考證精確にして麻姑を備て痒を搔くの概あり。古文の眞面目是に於てか露はれぬ。此他尚書を讀むに於て參攷とすべきは江聲の尚書集註音疏の如き、孫星衍の古今文註疏の如き、王鳴盛の後案の如き、段玉裁の撰異の如きものあり。然れども古文の信ずべからざるの說に至ては牢として動かすべからず。毛奇齡の徒例令へ力辨すと雖とも到底狂瀾を既倒に回す能はざるなり。

尚書の價値

尚書の中最も古きものは夏の史の筆に成れりと云ふ。三千餘年の前に在て這般雄渾正大の文辭ありしを思へば支那文學の由來も亦遠いかな。獨り文學としての價値のみならず、支那の歷史として洵に貴重すべき古書なりとなす。

二帝三王の治は道に本く、二帝三王の道は心に本く、其心を得るときは則ち道と治と固に得て言ふべし、何となれば精一にして中を執るは堯舜禹相授るの心法なり、中を建て極を建つるは商湯周武相傳ふるの心法なり、德と曰ひ、仁と曰ひ、敬と曰ひ、誠と曰ふ、言殊なれるも理は則ち一なり、此心の妙を明にする所以に非ず

と云ふことなし、天を言ふに至ては則ち其心の自ら出づる所を嚴にし、民を言ふときは其心の由て施す所を謹しむと禁忱か云へるは之を崇押して而して云ふの語のみ。然れども其天を言ひ、其民を言ふあるは以て北方人種の性格と當時の統治權の變遷し來れる狀態を察するに足るべし。北方人種が自然に對しての觀念と堯舜よりして而して夏殷周に遷り來れる統治權の變遷の如きは尚書洵に能く之を語るに非ずや。

甘誓に云はずや、

有扈氏威侮五行、怠棄三正、天用剿絕其命、今予惟恭行天之罰、左不攻于左、汝不恭命、右不攻于右、汝不恭命、御非其馬之正、汝不恭命、用命賞于祖、不用命戮于社、予則孥戮汝。

湯誓に云はずや、

夏氏有罪、予畏上帝、不敢不正、……爾尚輔予一人致天之罰。

天を恐るゝ北方人種の性格は甚だ顯著にして觀るべきなり。

王若曰爾殷遺多士弗弔、旻天大降喪于殷、我有周佑命將天明威致王罰勅殷命終于帝肆爾多士非我小國敢弋殷命、惟天不卑、允罔固亂弼我我其敢求位惟帝不卑、惟我下民秉爲惟天明畏、（多士）

殷を亡ぼして天下に君たる周は自から號令嚴肅に、其政を爲すに專制の狀前代に比して加ふるを見るべし。

若し夫れ尚書の文辭を取て各時代に於ける文林の特色を觀んか。夏殷周の間自ら相異るものなくんばあらず。夏の政は忠を尚び、殷の政は質を尚び、周の政は文を尚ぶと謂ふに非ずや。二代に監みて郁々乎たる周の文辭は自から夏殷二代の文辭に比して巧妙なるものあり。周書の婉曲にして丁寧なるは是に依れり、夏書の雄渾なる、商(殷)書の簡明なる、又是れ時代の反應ならずとせんや。

九州攸同、四隩既宅、九山刊旅、九州滌源、九澤既陂、四海會同、六府孔修、庶土交正、底愼財賦、咸則三壤、成賦中邦、錫土姓、祗台德不、距朕行、五百里甸服、百里賦納總、二百里納銍、三百里納秸服、四百里粟、五百里米、……東漸于海、西被于流沙、朔南暨聲教、於于四海、禹錫玄圭、告厥成功、

王若曰、格汝衆、予告汝訓、汝猷聿乃心、無傲從康、古我先王亦惟圖任舊人共政、王播（禹貢）

告之修不匿厥指王用丕欽罔有逸言民用丕變今汝聒聒起信險膚予弗知乃所訟
非予自荒茲德惟汝含德不惕予一人予若觀火予亦拙謀作乃逸若網在綱有條而
不紊若農服田力穡乃亦有秋　（盤庚）

王曰古人有言曰牝雞無晨牝雞之晨惟家之索今商王受惟婦言是用昏棄厥肆祀
弗答昏棄厥遺王父母弟不迪乃惟四方之多罪逋逃是崇是長是信是使是以爲大
夫卿士俾暴虐于百姓以姦宄于商邑今予發惟恭行天之罰今日之事不愆于六步
七步乃止齊焉夫子勗哉不愆于四伐五伐六伐七伐乃止齊焉勗哉夫子尚桓桓如
虎如貔如熊如羆于商郊弗迓克奔以役西土勗哉夫子爾所弗勗其于爾躬有戮
（牧誓）

禹貢は夏書にして盤庚は商書に、而して牧誓は周書なりとす。三者相較すれば多少特異の點あるを見る。然れども其莊重にして壯嚴なる、北方人種の特性を發露するに於ては與に其歸を一にするものなりとす。

二、詩

詩の起源

詩の起源。詩の變遷。詩の六義。刪詩。支那の詩。詩の句

虞書に曰く、詩は志を言ひ、歌は言を永し、聲は永きに依り、律は聲を和くと。詩の由來亦久しと云ふべきなり。蓋し帝王世紀に擊壤歌を傳へ、列子に康衢謠を載せ、禮記に伊耆氏蜡辭あり、卿雲歌は尚書大傳に錄せられ、南風歌は家語に記せられて詩の起源遠しと雖とも其最も信憑すべきは書にあり。即ち益稷の篇に於て曰く、帝舜庸て歌を作りて曰く、天の命を勑んで惟れ時惟れ箴とす、乃ち歌て曰く、股肱喜哉、元首起哉、百工熙哉と、皐陶拜手稽首颺言して曰く、念へや率ゐ作して事を興し、乃の憲を愼め、欽めや、屢乃の成れるを省みて欽やと、乃ち賡ひ歌を載して曰く、元首明哉、股肱良哉、庶事康哉、又歌て曰く、元首叢脞哉、股肱惰哉、萬事墮哉、帝拜して曰く、俞り、往けよ、欽めやと。林西仲曰く、舜と皐陶との賡歌は三百篇の權輿なりと。當代の詩が如何に單調なるかは又以て知るに足らんか。夏殷の世傳ふるものの乏し。夏后鑄鼎繇、湯盤銘、商銘、箕子の麥秀歌、夷齊の采薇歌の如き及び三百篇中の諸作の如き以て當世の詩風を察するに足るべし。周に至て天子五年一ビ巡狩す。采風の官を設けて諸國の詩を陳誦せしめ以て民の風俗を觀

る。風とは國風なり。又云ふ、風とは上は以て下を風化し、下は以て上を風化し文を主として諫諷す、之を言ふもの罪なく、之を聞くもの以て戒むるに足れり、故に風と曰ふと。是を以て一國の事は一人の本に繫かれり。又詩に雅あり。雅とは正なり、王政の由て廢興する所を言ふなり。政に小大あり。故に小雅と大雅とあり。又詩に頌あり。頌とは盛德の形容を美にし、其成功を以て神明に告ぐるものなり。文王武王の間、風に周南召南あり。雅に鹿鳴文王の屬あり。成王の奄より歸て宗周に在るや、禮樂を興正し、度制改り、民和睦し、頌聲興ると傳へらる。王道衰へ、禮義廢れ、政教失するに至て變風變雅起る。詩譜に云ふ、後王稍更も陵遲し、懿王始て譖を受け、齊哀公を亨し、身を夷げ禮を失するの後邶、賢を尊まず、是よりして下厲や幽や政教尤も衰へ、周室大に壞る。十月の交民勞れ板蕩勃爾俱に作り、衆國紛然として則怨相尋ぐ、五霸の末上に天子なく、下に方伯なし、善者誰か賞し、惡者誰か罰せん、紀綱絶ゆ、故に孔子懿王夷王の時の詩を錄し、陳靈公淫亂の事に於る、之を變風變雅と謂ふ、以爲らく民を勸め、功を恤み、上帝に昭事すれば則ち頌聲を受け弘福ある彼が如し、若し遂て用ひざれば則ち刼殺せられ大禍此の如し、吉凶の由る所憂娛の萌漸昭々として斯に在り、後王の鑒となすに足るると。詩に六義なるものあり。風賦比興雅頌是れなり。比賦興は詩の躰に就て云へるなり。比は物に因て志を喩へ、賦は言に寓して物を寫し、興は文已に盡て意餘あるなり。

詩の六義

刪詩

古へ詩は三千餘篇ありと云ふ。孔子に至て其重なるものを去り、禮義に施すべきを取り、上、契后稷を采り、中、殷周の盛を述べ、幽厲の缺に至り、衽席に始まる。故に曰く、關雎の禮以て風の始となし、鹿鳴を小雅の始と爲し、文王を大雅の始となし、清廟を頌の始となし、總べて三百五篇、孔子皆之を絃歌し、以て韶武雅頌の音に合はんを求む、禮樂此より得て述ぶべしと稱せらる。但しもと筆削して三百十一篇となすもの、六篇を亡ふ、是を以て後世三百五篇を傳ふるなり。然らば孔子三千餘篇の中禮儀に施すべきもの僅に三百餘篇を取りたる也。十に一を取て九を棄つ。其九なる者は情を發揮して詞采妙なりと雖とも禮儀に施すべきなきより遂に空しく亡佚に歸したるなるか。後人之を疑ふものなり。鄭樵其刪詩辨に先づ孔穎達の語を引て論じて曰く、按ずるに書傳引く所の詩見に在るも

の多く、亡逸するもの少しと、則ち夫子の錄する所十を容れすして九を分ち去る、夫れ詩は上、商頌祀成湯より下、株林則陳靈公に至る、上下千餘年、而して詩は纔に三百五篇、十君を更めて一篇を取るものなり、曾商周人の作る所、夫子併せて之を魯の太師に得、編して之を錄す、刪るに意あるに非るなり、夫の翹々車乘、招我以弓、豈不欲往、畏我友朋、斯等の辭の如きは亦但ならざるなり、胡爲ぞして之を刪るや、墻有茨桑中等の語は至て俚、又胡爲して之を刪らざるや、則ち知りぬ、刪詩の說は春秋の隱に始り獲麟に終るの事と皆談儒之を唱へたるなり、大抵其鄭聲を得れば則ち存し、其聲を得ざれば則ち存せざるなり、周の列國、滕薛の如き、許蔡の如き、邾莒等の國の如き夫れ豈詩莫らんや、但魯人其音を識らざれば則ち其詳を得ず、季札の魯に聘する、魯人雅頌の外得る所の十五國風を以て盡く之を歌ふ、今の三百篇を觀るに及で季札觀る所魯人の存する所と加損なきなり、若し夫れ夫子刪詩に意あらば則ち環轍の時に當て必ず大に搜めて之を備索すべし、奚ぞ十五國に止らんや、刪詩の說は夫子の本意に非ずと。思ふに孔子の刪筆したるものも亦あらん。然れども之を其大躰より觀れば我れ終に鄭の說に左袒せざるを得

ざるなり。

支那の詩とは何ぞ。詩は志を言ふとあり。序するもの云ふ、詩は志の之く所なり、心に在るを志となし、言に發するを詩となす、情中に動て言に形はる、之を言て足らず、故に之を嗟嘆す、之を嗟嘆して足らず、故に之を永歌す、之を永歌して足らず、手の之を舞ひ、足の之を踏むを知らざるなり、情聲に發し、聲、文を成す、之を音と謂ふ、治世の音は安くして以て樂しく、其政和なり、亂世の音は怨にして以て怒、其政乖けり、亡國の音は哀で以て思ふ、其民困む、故に得失を正うし、天地を動かし、鬼神を感ぜしむるは詩より近きは莫し、先王是を以て夫婦を經し、孝敬を成し、人倫を厚くし、敎化を美にし、風俗を移すと。まことや實際的傾向を有したる支那北方人種の間に起りたる詩は斯くの如き性質を有したるなり。既に治世の方便として用ひられ、得失を正うする機械となりたるもの、詩が終に支那に在て非常なる發達をなさゝりし故は洵に此に存す。雄渾なる敍事詩の類が終に支那に於て見得べからざるも亦此に因す。

然れども詩なるものは感興的なり。情の發現なり。道德的鑄型裡に發現した

る情は自から羈束せられて外に馳するの憂なく、其感興する所のものも自から情の往く所に任せず。故に孔子は詩三百一言以て之を蔽へば思邪なしと云ふに非ずや。思邪なきものは道德の以て情を羈軛すればなり。情内に熱す、猶天馬空を馳せんとするの趣あり。其發するや、激厲となり、淫猥となり、狂縱となり、憤恨となる。道德主義を以て鎔鑄したる意志は以て羈絆となるべく、情の放逸を繫縛し、之を和で色を好むも淫せざらしめ、怨むも亂せざらしめ、其激厲なるものをして調子を失はざらしめ、其狂縱なるものをして中和せしむ。三百五篇の詩が悠揚として優且美なる所以は即ち此に在り。然も是れ豈最も能く支那北方人種の性情を露はすものに非ずや。

嘒彼小星　三五在東　肅肅宵征　夙夜在公　寔命不同
嘒彼小星　維參與昴　肅肅宵征　抱衾與裯　寔命不猶
（召南小星）

夫人妬忌の行なし、恵や其下に及び、賤妾貴賤の別を知り、諷々として多妻制度の亂れざるを云ふなり。

綠衣黃裏　綠衣黃裏　心之憂矣　曷維其已
綠兮衣兮　綠衣黃裳　心之憂矣　曷維其亡
綠兮絲兮　女所治兮　我思古人　俾無訧兮
絺兮綌兮　淒其以風　我思古人　實獲我心
（邶風綠衣）

然も其亂るゝに至てや、妾上僭し、夫人位を失ふ。夫人怨嗟の情なかるべからず。然も唯古人を思ふて自ら慰めんとす。意志の强き、能く其縱放せんとする所を羈軛するものに非ざるか、否か。

若し夫れ淫奔の耻あれば國人齒せず、歌て曰く、

蝃蝀在東　莫之敢指　女子有行　遠父母兄弟
朝隮于西　崇朝其雨　女子有行　遠兄弟父母
乃如之人也　懷昏姻也　大無信也　不知命也
（鄘風蝃蝀）

其の祖功を稱するや

瞻彼旱麓　榛楛濟々　豈弟君子　干祿豈弟
瑟彼玉瓚　黃流在中　豈弟君子　福祿攸降

鳶飛戾天　魚躍于淵　豈弟君子　遐不作人
清酒既載　騂牡既備　以享以祀　以介景福
瑟彼柞棫　民所燎矣　豈弟君子　神所勞矣
莫莫葛藟　施于條枚　豈弟君子　求福不回　（大雅旱麓）

是れ皆一に北方人種が抱ける思想の反響に非るはなし。三百五篇は洵に能く北方人種を表はすものに非ずや。

三百五篇の詩に於て觀るに、多くは四言を以て一句となすと雖とも必しも之を以て其規定となすに非ざるなり。三言あり、五言あり、六言あり、七言あり、八言あり、九言の長きも亦之れあり。振々鷺、鷺于飛は三言なり。漢の郊廟歌には多く之を用ふ。誰謂雀無角、何以穿我屋は五言なり。俳諧倡樂に多く之を用ふ。我姑酌彼金罍は六言なり。樂府亦之を用ふ。交々黃鳥止于桑は七言なり。俳諧倡樂之を用ふ。胡瞻爾庭有懸貆兮、我不敢傚我友自逸は八言なり。洞酌彼行潦、挹彼注茲は九言也。後世歌謠の章に入らず。徐昌穀曰く、鹿鳴頌弁の宴好、黍離有菽の哀傷、氓蚩晨風の悔嘆、蟋蟀山樞の感慨、柏舟終風の憤懣、杕杜葛藟の惘恤、葛

詩の句

屨祈父の譏刺、黃鳥二子の痛悼、小辨何人斯の怨誹、小宛鳲鳩の戒惕、大東河草不傷の困疲、巷伯鴇羽の悪を悪む、綢繆車舝の歡慶、木瓜采葛の情念、雄々伯兮の思懷、北山陟岵の行役、伐檀七月の勤敏、棠棣蓼莪の大義曾曲に情思を盡す、婉孌たる氣辭哲匠の縱横畢く斯の間よりすと。以て詩の贊となすべし。

三、易

易の由來。連山、歸藏、周易。易の性質及其文辭。

易の物たる、天に本いて之を作ると云ふ。伏羲を以て其創祖となすの說多し。然れども鄭玄の如きは神農に始まると云ひ、孫盛は夏禹に始まると云ふ。繫辭に曰く、古へ庖犧氏の天下に王たるや、仰では則ち象を天に觀、俯しては則ち法を地に觀る、是に於て始めて八卦を作り、以て神明の德に通じ、以て万物の情を類すと。其創始を以て斷じて伏羲となすは蓋し難からん。必ずしも之を考證せずして可也。略伏羲時代に定むれば過なきに庶幾からんか。而して彙辭は文王に由て、爻辭は周公に成り、彙象四傳十翼は孔子之を作ると云ふ。周易を以て經と

易の由來

稱するは周にして上下二經に分つ。周の天下を保つ、易を以て經綸の要具とな す。蓋し易や、伏羲文王孔子の手を經て始めて大成す。故に之を三聖と稱して曰く、易道深し、人は三聖を更へ、世は三古を歷たりと。秦火ありと雖とも易の物たる筮卜の事たるを以て傳ふるもの絶えず。漢興て田何之を傳ふ。宣元二帝を訖るまで施孟梁丘京氏あり、學官に列せらる。而して民間には費高二家の說あり。劉向、中古文の易經を以て施孟梁丘經を校するも無咎悔亡の辭を脫去せり。唯費氏の經古文と同じと云ふ。田何の學は孟喜よりして虞翻に至る。東漢の末なり。王弼、何晏出づるに及び、道家者流の見解を下し、易の古義を失す。隋唐の頃獨り王注の行はゝるを見るのみ。宋に至り程傳出でゝ易を解す。是より宋儒自己の見地よりして易の解釋を試みるもの多し。

周易の外に世に連山歸藏の名を傳ふ。周禮に曰く、筮人及び太卜並に三易の法を掌る、一に曰く、連山、二に曰く、歸藏、三に曰く、周易と、其經卦皆八、其別皆六十有四と。並に何代の易たるを指言せず。杜子春曰く、連山は伏羲、歸藏は黃帝と。鄭康成又以爲らく夏商周の易と。或者又從て之を釋して曰く、夏寅を建て、人正を

連山歸藏周易

用ふ、其書重艮を以て首となして連山と曰ふものは象山雲を出して連々絶えざればなり、商、丑を建て、地正を用ふ、其書重坤を以て首となして歸藏と曰ふものは萬物中に歸藏せざる莫ければなり、周は子を建て天正を用ふ、其書重乾を以て首となして周易と曰ふものは周代を以て名く、周禮の如き是なり、鄭玄の三易を釋するや既に據るべきの文なし、故に孔穎達又杜子春の言を祖とし、世譜等の書を引て曰く、神農一に連山氏と曰ひ、亦列山氏と曰ふ、黃帝一に歸藏氏と曰ふ、易の繫辭に於て已に神農黃帝ありて益渙噬嗑の文を取る、是に於てか知る、連山歸藏周易は並に代を以て號くるや疑なしと。蓋し連山歸藏の起源は之を詳にすべからずと雖とも夏商二代の各傳へたる所なるか。鄭玄曰く、殷陰陽の書存する者歸藏ありと。歸藏や殷に行はれ、連山や夏に行はれたるなるべく、周に至て漸く衰へて後世之を徵するに由なきか。

易の性質及其文辭

易の道たるや、何の道ぞ一陰一陽之を道と謂ふ。陰陽の大なるものの日月に如くなし、故に聖人日月の二字を取て易となす、而して其義は則ち變易の易に取るなりと云へるは先づ易の性質を說きたるものに非ずや。孔子曰く、易は易なり、變

易なり、不易なり、天尊く、地卑く、乾坤定まると。又曰く、不易は其位なり、天上に在り、地下に在り、君南面し、臣北面し、父坐し、子伏す、此れ其の不易なり、故に易は天地の道なりと。觀るべし、易なるものは北方人種の產物にして最も能く其特性を發揮したるものなるを。故に易は天地を經し、人倫を理めて天道を明にする所以なりと曰ひ、易に依て父子の親、君臣の義、夫婦の道長幼の序あるを知らしむ、是に於て百官立ち王道生ずと傳へらる。易なるもの亦政道裨補の一機關なりしなり。蓋し易の本づく所は實に狎天の習俗に在り、祖先崇狎の慣習に在り。又以て北方人種の性格を顯著ならしむる者に非ずや。若し其文辭に就て之を觀る。句たる短簡なりと雖とも古奥にして北方人種の氣象は自から顯はれ、崇嚴にして凜として犯すべからざるものあり。虎と云ひ、龍と云ひ、馬の如き、羊の如き、鹿の如き、鴻の如き、隼の如き動物若くは理想的動物を配して比喩とし之を用ひ、風と云ひ、雲と云ひ、雨と云ひ、霜と云ひ、雷電と云ひ大川と云ひ、戎と云ひ、寇と云ひ、又其用ふる所の物たり。而して此等を取て其神秘的辭句を作るや莊重にして崇嚴なる調を以てし、北方的氣格と風韻とを有せしむ。且つ夫れ其思想の雄大

なるは髣髴として辭句の間に其影を示し、或は飛龍在天利見大人の如く、或は見群龍无首如く、或は龍戰于野其血玄黃の如く、或は虎視耽々其欲逐々の如く、或は突如其來如焚如死如棄の如く、之を讀む崇高の念沸如として涌くを覺ゆるなり。」

春秋以前に於て、支那上代に於て、最も價値ある書と詩と易の事は略之を論述せり。此他冠婚葬祭祭期聘饗射威儀の事を述べたる儀禮、周官政典の書にして官府掌職の禮を述べたる周禮、古經十七篇の外諸儒禮記を合して一書となせる禮記の如きは亦是れ北方人種の特質と其習俗とを示すものにして文辭亦簡古著勁、北方文學の摸本に耻ぢざるものなり。

第二期　春秋戰國時代の文學

總說

周の末。春秋戰國時代の概觀。當時の思想界。

大命を膺受し、殷を更め、天の明命を受けて君臨したりと稱したる周祚も數百載

にして漸く尾大掉はざるの勢となりぬ。槃弧謠を興し、龍漦蠱を作せるも既に周室の傾頽を示す者に非ずや。犬戎幽王を敗るに及で周乃ち東して雒邑に遷り、周鼎漸く輕く、諸侯漸く大に、疆は弱を並せ、大は小を兼ぬ。是より春秋となり、戰國となり、或は五霸を出し、或は合從連衡を說き、周室遂に全く覆へるに至りき。

春秋戰國時代の概觀

春秋戰國時代は生存競爭の甚だ熾なる時代なりき。其影響する所思想の放任となり、言論の自由となり、活潑々剌の勢を呈しき。所謂諸子橫議の世是れなり。孔子を出し、老子を出し、或は孟莊となり、或は申韓となり、蘇秦張儀の遊說となり、魯仲連鄒陽の抗直となる。洛陽負郭の田二頃なき白衣の書生も三寸不律の舌を以てすれば以て六國の相印を帶ぶるを得べく、四時の序功を成すものは去るべきを諷すれば一國の宰相、憮然として其位を去るなり。門閥制度は打破せられて人才自ら用ふべきの秋なりき。獨り邦國の生存を爭ふのみならず、人と人との競爭も亦極めて盛なりき。

當時の思想界

思想界の競爭激甚なりし當時に在て最も目覺かりしものは南北兩思想の衝突にて在りき。黃帝以後衝突したる南北兩人種は時代を經るに從て漸く接近し、南方人種も亦歷史の圈子裡に入りて其生存を爭ひき。周末に於ける南方人種の行動は又頗る盛なりしなり。獨り南方人種は肉躰的のみならず、其精神的に於ても北方人種が思想と相馳騁したりき。風俗に於て、嗜好に於て、社會心象に於て、性情に於て背離したる南北兩人種は其異なる思想に於ても衝突したりき。實際的思想は想像的思想と相爭ひたるなり。人事を重ずるものと自然を愛するものとは枘鑿相容れざるなり。日常の道を敎ふるものと詩歌的の考察をなすものとは吳越も啻ならざるなり。周末思想界の最も異彩あるは這個兩思想の衝突を起したるにあり。

春秋よりして而して七國。合ひたるもの離れ離れたるもの合はんとす。其徑路の異るに從て思想界に於ても亦異るなり。時代の必要に應じて生じたる思想は時代に伴て變移せざるべからず、春秋戰國の間長しとせず。長しとせざると雖とも人事の最も複雜し變化したる時代は思想の變移も亦著しきものあるを知らざるべからず、

此等の思想は文辭に寫されて後世に傳はりたるなり。春秋戰國時代の文學と

して稱すべきは即ち是れなり。

一、孔子と老子

孔子の傳。北數讖。論語。老子の傳。老子の書。北數讖。北文辭

周末に於て著しく發揮せられたる南北兩思想は各最も大なる思想家を出して當時の奇觀をなしぬ。其北方思想家に在ては孔子あり、南方思想家に在ては老子あり。一は儒教を開き、一は道教を創めぬ。

孔子は魯の昌平鄉の陬邑に生れぬ。魯は周公旦の封せられたる所なり。其父を叔梁紇と云ふ。孔子、名は丘、字は仲尼、孔氏は其姓なり。見たるとき、既に嬉戲するに俎豆を陳ね、禮容を設けたりと傳ふ。長じて季氏の吏となり、又司職の吏となり、轉じて司空となる、已にして魯を去り齊に斥けられ、宋衞に逐れ、既にして魯に反る。周に適て禮を問ふ、蓋し老子を見ると云ふ。周より魯に反りて弟子稍く益進む。魯亂れて齊に之き、用ひられずして魯に反る。魯の大夫季氏、公室を僭し、其臣陽虎季氏を輕じ、陪臣國命を執る是を以て魯大夫より以下皆僭して

孔子の傳

正道に離る。故に孔子仕へず、退て詩書禮樂を脩め、弟子彌衆く、遠方より至り業を受けざるなし。定公に至て孔子を以て中都宰となす。一年にして四方皆之に則る。中都宰より司空となり、司空より大司寇となる。定公の齊と成くや、孔子相の事を攝し、齊を懼れしめ、侵す所の魯の郓汶陽龜陰の田を歸して以て其過を謝せしむるに至りき。終に大司寇より相の事を行攝し、魯の大夫政を亂る者少正昶を誅し、國政を與り聞く三月、羔豚を賣くもの賈を飾らず、男女塗を別にし、塗遺るを拾はず、四方の客邑に至るもの有司を求めず、皆之に予へ以て歸す。齊人女樂を遺り、季桓子三日政を聽かず、郊して又膰俎を大夫に致さゞるに及び孔子遂に衞に適き、居ること十月にして衞を去り、匡に苦み、蒲を過ぎ、月餘衞に反り、又去て曹を過ぎ、宋に適き、宋の司馬桓魋の爲に殺されんとし、鄭に適き、陳に居ること三歲、蒲を過ぎ、衞に適く。靈公老ひ、政に怠りて孔子を用ひず。孔子喟然として歎じて曰く、苟も我を用ふるものあらば朞月のみ、三年にして成るあらんと。西の方往て趙簡子を見んとす。河に至て晉の大夫竇鳴犢舜華の死するを聞き、河に臨で歎じて曰く、美なる哉水、洋々乎たり、丘の此を濟らざるは命なるかなと。

又衛に反る。既にして陳より蔡に遷り、葉に如き、蔡に反り、居ること三歲。楚之を聘せんとす。陳蔡の大夫之を病て孔子を野に圍む。行くことを得ずして糧を絶つ。從者病で能く興るものなし。孔子講誦弦歌して衰へず。弟子心に慍るものあり。孔子曰く、詩に云ふ、兕に匪ず、虎に匪ず、彼の曠野に率ふと、吾が道非か、吾れ何爲ぞ此に至れる。弟子顏回曰く、夫子の道至大也、故に天下能く容るゝ莫し、然りと雖とも夫子推て之を行へば容れられざる何ぞ病まん、容れられず、然る後君子を見る。と。孔子欣然として意を得たりとなす。楚の昭王師を興して孔子を迎へ、然る後免るゝを得たり。昭王將に書社の地七百里を以て孔子を封せんとす。隣する者ありて事止む。遂に楚より衛にあり、魯を去りて十四歲にして魯に反る。魯、孔子を用ふる能はず、孔子も亦仕ふるを求めず。是に於て書傳を序で、禮記を修め、詩を編す。晩にして易を喜み、序彖繫象說卦文言を作る。易を讀むに韋編三び絶つに至りきと云ふ。詩書禮樂を以て敎ふ。弟子凡そ三千、身六藝に通ずるもの七十有二人。哀公十四年に至り、史記に因りて春秋を作る。上魯の隱公より下哀公十四年に訖る。哀公十六年四月己丑孔子年七十三にして卒す。或は云ふ、七十二と。魯の城北の泗上に葬る。弟子喪に服する、三年、唯子貢冢上に廬する凡そ六年。弟子及び魯人往て冢に從て家するもの百有餘室、因て命じて孔里と曰ふ。孔子、子あり、伯魚と曰ふ。伯魚子思を生む。中庸は子思の書なりと云ふ。

北敎說

周室陵替し、王道微に、道心維れ危きの時に當て孔子は出でにき。即ち一に時弊を拯ひ、王道を復さんとするに意あり。其東西に奔走し、席暖まざりしは抱く所の實際的敎義を實際的に行んとしたればなり。我を見るもの豈徒ならんや、如し我を用ふれば其れ東周を爲んかとは孔子が晩年まで抱懷したる所の經綸策なりとす。然れども霸道を喜び功を一時に收めんとしたる當時の社會は遂に容るゝと能はず。其容るゝ能はざるに及びてや、詩書禮樂易春秋を修成して萬世に傳ふべきの名敎を遺しぬ。其人たる、嚴乎として犯すべからざるか如くにして然らず、溫潤春の如きものあり。方正謹嚴己を持すと雖とも圭角の稜々たるか如きは孔子に於て之を見ざるなり。圓滑にして如才なく、敎義を說て之を施さんとして倦まざるに至ては蓋し人間最も醇なるの人か。榮枯盛衰恒なら

ざるの世に在て天下の仰ぐ所となり、流風餘韻今に在て東大陸及び其附近に光被するもの至聖に非ずんば焉ぞ能く斯の如くなるを得んや。

孔子の性を觀、其行を察すれば洵に純乎たる北方人種の性格を見る。且つ夫れ其教義たるや、北方人種の特性を發揮し、北方人種に最も適合すべきの眞理を有す。北方人種の性格は此に權化し、而して之に鎔鑄せられて其後三千載今に至て支那人民なるものを繫縛しぬ。

春秋は孔子の自ら筆刪したるもの、文辭簡古にして而も一字苟もせず。筆すべきは筆し、削るべきは削る。子夏の徒一辭を贊する能はずと稱せらる。其意深くして且遠し。然れども亦是れ北方人種が實際的傾向を歷史の上に點したるものに非ずや。春秋の義行れば則ち天下の亂臣賊子懼れんと。歷史を以て治世の方便に用ふるに在るなり。後世之に倣ふもの多く、支那に於ける史の本義は爲に失はれき。

孔門の弟子が筆記したる一部の論語は孔子の教義を明にし、孔子の面目をして躍如たらしむ。其の文辭に至ては蒼勁にして又婉曲自在。簡なりと雖とも無量の趣味を含蓄し、淵乎として深潭に臨むが如し。論語の他に孔子家語、孝經の類世に傳はる。

老子の傳

若し夫れ道教を開て南方人種の思想を代表する老子に至ては之と異れり。其思想と文辭とを略論するに先て姑く其傳記を觀んとす。

史記の列傳に據るに老子は楚の苦縣厲鄉曲仁里の人なり。姓は李氏、名は耳、字は伯陽、謚して聃と曰ふ。玄妙內篇には李の母懷胎八十一歲、李樹に道遙し、迺ち左腋を劈て生る、生れて白首、故に老子と謂ふとあれども傳說釋迦牟尼佛生誕の說と相似、固より信ずべからず。神仙傳には老子の耳漫にして輪なし、故に號して聃と云ふとあれども亦信じ難し。周の守藏室の吏なり。孔子周に適て禮を老子に問ひたることあり。周の衰ふるに及で去て關に至る。關の令尹喜曰く子將に隱れんとす、暱ひて我が爲に書を著はせと。是に於て老子迺ち書上下篇を著し、道德の意を言ふ。五千餘言。終に去て終る所を知らず。老子の出處と其終る所は甚だ茫焉として之を記するものなし。故に老子百有六十餘歲、或は二百餘歲の說あり。但し莊子に老聃死秦失弔之の文を載すれば老子の死する

老子の書

北教說

もしるきなり。

老子の書もと上下二篇に分つ。漢文帝の時河上公八十一章となし、上篇三十七章、下篇四十四章となす。楊升庵の如きは之を以て僞作となすと雖とも從ふべからず。

老子の言ふ所自然を崇び、無爲を以て政道の極意となし、謙讓を以て處世の要訣となせり。其有する所は南方人種特有の情感的性質なり。其理想とする所は朴にあり。無爲にして自ら化すは畢竟大眼目となす處。故に曰く、清淨は天下の正なり。又曰く、朴小なりと雖も天下敢て臣とせずと。所爲らく、朴を以てすれば天下治り、國太平に歸すべしと。故に云へり、無名之朴亦將不欲、不欲以靜天下將自定と。而して其欲する所は赤子の如くならんとするにあり。故に曰く含德之厚比於赤子、蜂蠆虺蛇不螫、猛獸不據、攫鳥不搏と。赤子は無爲なり、自然なり、至柔なり、老子の一日も忘れざる所なり。其主眼となす所なり。故曰天下之至柔馳騁天下之至堅、無有入無間、吾是以知無爲之有益不言之敎、無爲之益天下希及之と。畢竟老子は天下の政をして太古の域に歸らしめんとするなり。情感的の彼が理想は斯くの如し。到底非實際的なるを免かれず。其希望する所は太古に在り、伏羲神農に在り、武陵桃源的の世にあり。

嗚呼法令何ぞ紛々たる。民をして一々其規に中てゝ矩を超えざらしめんとす。法愈密にして民愈之を犯すに巧なり。終に天道の疎にして漏さゞるが如きに非るなり。民に敎ふるに惡を以てし、然も稱して爲政者と云ふ。貪て飽かず。驕て下らず。甲兵を好み、利欲に奔り、奢侈是れ事とし、徒らに繁褥の禮を行ひ、而して其本を忘る。仁と云ひ、義と云ひ、禮と云ふもの、終に其末端なるを如何せん。既に道を失て德あり。德を失て仁あり。仁を失て義。義を失て禮。其大道を離るゝこと階幾級ぞ。滔々たるもの世を擧げて溝壑に陷らんとす。老子が復古を唱へ、空想を夢みたるもの豈時勢に多少の激するものあつて然るか。

進歩し化醇するは世一日も廢すべからざるなり。世進で人智發達す。人智發達して巧譎從て行はれ、法令從て繁し。之れ自然の狀態なり。若し世の進歩に任せ他に以て之を調和制御するものなからんか。混濁入を推して邪路に彷徨せしむるに至らん。是を以て聖人敎を立て仁義を說き、諄々として善に歸せし

めんとす。智と德と相並で發達する是を眞の進歩と云ふ。故に聖人教を說くや、其說の難きを求めずして人をして躬行實踐を得せしむ。儒教の本義此に存す。然るに獨り老子世をして太古素朴の風に歸せしめんとす。百年河清を待つか如し。其言や云ひ易し。然も其事や行ふべからず。吾言易知甚易行と云へるもの余斷々乎として其然らざるを保せんとす。終に是れ南方人種たる老子の空想に過ぎざるなり。

彼が道を說くや、即ち曰く、有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行而不殆、可以爲天下母、吾不知其名、字之曰道、强爲之名曰大、大曰逝、逝曰遠、遠曰反、故道大天大地大王亦大、域中有四大而王處其一焉、人法地、地法天、天法道、道法自然と。即ち其歸する所自然にあり。而して道の躰は即ち虛に外ならず、然も之を用て窮らざるなり。

彼が政治に於ける意見も一に自然に歸するを云ひ、其倫理說も亦自然に歸するを要とし、無爲を以て本となし、朴を崇び、謙讓を旨とし、頗るストア主義と相似たり。其養生說に至ても亦自然に歸し、無心無爲を要とするなり。嗚呼自然、老子が理想は此二字を出でざるなり。

儒者か老子を紬けたるは其根本的大主義に於て既に異るあればなり。道家か太上老君とし之を仰ぐものの或は其說を怪にし却て老子の主旨を誤るなり。道を害すと稱せられ、慘覈少恩の祖と黜けらるゝは其說を異にするよりなり。唐に在ては廟に配せられ、陰陽家は三皇以前玄中法師となり世に出現したるの怪誕を傳ふ。老子に取て何の益する所なし。橫渠張子は有無に生ずるの說を詆り、朱晦庵は有無爲の非を難ず。薛道衡は贊して宣尼一たび睹て龍德の知り難きを歎じ、關尹四望して眞人の將に隱れんとするを知る、乃ち衆妙を發揮して書二篇を著はす、性に率ひ道に歸し、無を以て用となす、其辭簡にして要、其旨深くして遠し、飛龍卦を成す未だ其精微を比するに足らず、獲麟筆削其顯晦を方ぶる能はず、之を用ひて身を治むれば則ち神清み志靜に、之を用ひて國を治むれば則ち朴に反り淳に還ると稱し。高皇帝は歎賞して心淵靜にして測るなく、志極りなくして何ぞ量らん、恍惚其れ精にして密、恍惚其れ智にして良、宜なるかな千古の聖人務めて短を晦ふして長を云ふと云ふ。後二者は其好むものに阿ねるの誹

非文辭

を免かれず。

五千餘言僅々たりと雖とも老子道德の意述べ盡くして遺憾なきが如し。文辭備古にして而も含蓄多く、字々味あり、言々旨趣を有す。處々韻を押し、蕉を嚼むが如く、一讀一讀より味多く、一悟一悟より妙深きを見るなり。高皇帝序して曰く、細に其文の行用を觀るに濃雲群山の疊嶂を擁むるが若く、外虛にして內實し、視態其境に彷彿として又然らず、空谷に架して奇峰を秀づ、昔魏巍あり、倏に態幽翠に成る、若し其意を知らざれば混沌鴻蒙の中に入るか如し、方に乃ち微旨を知れば則ち又皓月の澄淵に沈むか若く、銳中の實象を觀る形躰の然るが如しと雖とも探視すれば得て捫撫すべからずと。云ひ得て善し。

非實際的傾向ある老子の道德經を以て治世敎民の具となし、以て之を儒に比せんとするは過てり。然れども老子が理想の豐富にして其宇宙觀人世觀の奇拔なるは以て觀るに足るべし。幽玄窮むべからず、渺茫際なし。有の無に生ずるを說き、太虛の以て万物の起る所なるを說き。理の氣に雜へざるもの之を道とし、氣中理あるもの之を德と云ふ。玄の又玄、之を衆妙の門となし。谷神死せず、是を玄牝と謂ひ、玄牝の門是を天地の根と謂ふ。其說や前人の未だ道破せざりし處。其言や玄妙深奥の境に到る。物外眞を求め、虛中實を含む。漢土四千載稀に見るの一大哲理家と稱す、又何の不可かあらん。故に道敎廣く漢土に布き、莊列之を襲ぎて虛無を說き、兵家も仰ぎ、養生家も之を祖とす。或は餘流權謀術策の士あり。或は末派陰陽五行の說起る。豈老子が說の幽玄にして其文の簡古なるか故に非ずや。

孟子の傳

二、孟子と莊子

孟子の傳。孟子の書。非文辭。莊子の傳。莊子の書。非敎義。非文辭。

北方人種たる孔子の遺敎は再び孟子に依て紹述せられ、南方人種たる老子の流風餘韻は莊子を出して戰國時代に双個相對して各南北兩思想を代表しぬ。

孟子の學は孔子の孫子思の門人に受く。鄒の人なり。鄒は邾なり、左傳哀公七年魯の瑕析邾に聞ゆとあり。其地たるや魯に近きなり。孟子の名軻、字は詳ならず。道既に通じて齊の宣王に遊事す。宣王用ふる能はず。梁に適く。梁惠

王言ふ所を果さず、則ち見て以て迂遠にして事情に闊りとなす。是の時に當りて秦は商君を用ひて國を富ましし、兵を强くし、楚魏は吳起を用ひ、戰ひ勝て敵を弱ましし、齊の威王宣王は孫子田忌の徒を用ひて諸侯東面齊に朝す。天下方に合從連衡を務め、攻伐を以て賢となす。而して孟軻は乃ち唐虞三代の德を述ぶ。是を以て如く所のもの合はず、退て万章の徒と詩書を序て、仲尼の意を述べて孟子七篇を作ると。彼も亦其實際的教義を實際に運用せんとしたるなり。其の多血なる質は冷やかに當世を觀過する能はず、故に天下に遊說して王霸の別を說き、時弊を拯はんと欲したるなり。其性善說と云ひ、其養氣說と云ひ、仁義を說き、堯舜を唱道したる、亦要するに時弊救濟の爲めなりしなり。然れども韓子が所謂中世は智謀に逐はれ當今は氣力に爭ふと云へる戰國紛離の世は能く孟子の說を容るゝ能はず。仲尼曾て云へるとあり、我之を空言に托せんと欲す、之を行事の深切著明なるに如かざるなりと。是に於て弟子公孫丑万章の徒と難疑答問する所を論集し、又自ら其法度の言を撰び、書七篇を著はせり。

孟子の書

孟子七篇は自作なりと云ふ說多し。自作ならざるものありと雖とも盡く孟子の手を經たりと稱せらる。外篇四篇の名見ゆと雖とも今存せず。史記、法言、鹽鐵論等に引く所のものは恐くは其斷片なるべし。

其文辭

孟子は能辯の士なり。其文辭に至ても快利云はん方なし。波瀾あり、曲折あり。雄渾にして明晰、議論文として妙を極む。比喩愷切剛氣滿々として精彩一時に燦けり。

莊子の傳

孟子は齊宣王梁惠王と時を同うす。莊子も亦此時代なりと傳へらる。然も兩者終に見るに及ばざりしか如し。蓋し老子一たび說を立てゝより文子關尹子列子等ありと雖とも名一世を空うするものなし。獨り莊子其後に出でゝ老子の統を承けて兼ねて自ら發明する所多し。莊子は純乎たる南方の地に生れたるものに非す。朱子語類等に楚人となすは從ふべからす。史記列傳には蒙人なりとあり。地理志に蒙縣は梁國に屬すと見ゆ。索隱に劉向別錄を引て云ふ、宋の蒙人なりと。漢書藝文志の注に莊子名周宋人とあり。蒙は春秋の時宋に屬せり。左傳襄公二十七年に宋公及諸侯大夫蒙門の外に盟ふとありて杜注に宋の城門とあり。河南省歸德府の東北四十里に蒙城あり。宋は戰國の時に至

て齊楚及魏の爲に滅ぼされ、蒙、魏に屬す。故に地理志等は後より追記して梁國に屬すの語あるなり。彼は純乎たる南方の地に生れたるに非ずと雖とも宋の地たる南北の間に夾まれり。若し其思想に觀其文章に察すれば彼は能く南方人種を代表したるものと云ふべきなり。

名は周、嘗て蒙の漆園の吏となる。楚の威王其賢を聞て使をして幣を厚うして之を迎へしめ、以て相となさんとす。莊子笑て楚の使者に謂て曰く、子獨り郊祭の犧牛を見ずや、之を養食する數歲、衣するに文繡を以てし、以て太廟に入る、是の時に當て孤豚たらんと欲すと雖とも豈得へけんや、子亟かに去れ、我を汚すなかれ、我れ寧ろ汚瀆の中に游戲して自ら快くし、國を有つものゝ羈する所となるなく、終身仕へすして以て吾か志を快くせんと。莊子秋水篇にも亦此と相似たるの一話を載す。莊子が本領は是を以ても知るへきに非ずや。

莊子はもと儒學を學ふ。韓愈其の送隕王序に於て云ふ、蓋し子夏の學其後田子方あり、子方の後流れに莊周となる、故に周の書喜で子方の人となりを稱すと。其說本く所を知らす。然れとも禮記檀弓に曾子子夏の失明を弔ひて曰く、吾れ女と夫子に洙泗の間に事へ、退て西河の上に老し、西河の民をして女を夫子と疑はしむと。孔子既に沒して子夏西河に居りて敎授し魏文侯の師たり。文學に

莊子の書

は子遊子夏と稱へられたる彼は西河のほとりに在て其敎を施きたるなり。田子方も亦實に其門弟子たり。西河の地たる宋に近けれは莊子亦師事せさるなきに非さるへし。其後老子の流を汲み、別に一家の見を立てゝ南方的思想を唱道したるならんか。

其敎義

莊子の書內篇七、外篇十五、雜篇十一、合せて三十三篇あり。但漢書藝文志に據るに五十二篇とありて今傳ふるものと篇數を異にす。內篇の文辭は是れ莊子の自筆なるべけれとも外雜兩書に至ては其徒の筆に成りたるなるべく、文調頗る異るものあるを見るなり。

司馬遷、莊子の言を評して洸洋自恣にして以て己に適ふと云へり。彼の行も斯くの如く、其想も斯くの如く、其文辭に至ても亦斯くの如し。これ恰も天馬空を往く如きものか。殆ど羈束する所なきなり。其言老子に本くと雖とも老子に比して更に洸洋たるなり。老子は猶時弊を拯はんとするに意ありしなり。莊

子に至ては殆ど之を擲てり。老子は其理想鄉を求めて天下自然に歸らんことを望みきと雖ども莊子に至ては這般の理想を希求せざりしなり。然れども莊子は人生なる問題に就て多く講究を試みぬ。故に

若夫乘天地之正而御六氣之辨以遊無窮者彼且惡乎待哉

と說き、

今子有大樹患其無用何不樹之於無何有之鄉廣莫之野彷徨乎無爲其側逍遙乎寢臥其下

と論じ、

如求得其情與不得無益損乎其眞一受其成形不亡以待盡與物相刃相摩其行盡如馳而莫之能止不亦然乎終身役役而不見其成功苶然疲役而不知其所歸可不哀邪人謂之不死奚益其形化其心與之然可不謂大哀乎人之生也固如是芒乎其我獨芒而人亦有不芒者乎

と嘆じ、

予惡乎知說生之非惑邪予惡乎知惡死之非弱喪而不知歸邪麗之姬艾封人之子也晉國之始得之也涕泣沾襟及其至於王所與王同筐牀食芻豢而後悔其泣也予惡乎知夫死者不悔其始之劓生乎夢飲酒者旦而哭泣夢哭泣者旦而田獵方其夢也不知其夢也夢之中又占其夢焉覺而後知其夢也且有大覺而後知此大夢也而愚者自以爲覺竊竊然知之君乎牧乎固也丘也與汝皆夢也予謂汝夢亦夢也是其言也其名爲弔詭萬世之後而一遇大聖知其解者是旦暮遇之也

と道ひ、

昔者莊周夢爲蝴蝶栩栩然蝴蝶也自喻適志與不知周也俄然覺則蘧蘧然周也不知周之夢爲蝴蝶與蝴蝶之夢爲周與周與蝴蝶則必有分矣此之謂物化

と悟る。是非を離れ死生を一にするは彼の敎義なりけり。

莊子の想の南方思想なるが如く其文も南方文辭なり。其幽玄なる人生觀を說くや、彼は理論的に之を論ずるに非ず、喩を引き、問を設け、上下縱橫、表より裏より、左より右より、寓言重言、巵言を以て其本旨を說破するにあり。彼の文は孟子の正に異りて奇なり。孟子の莊重なるに同じからずして神韻漂渺たり。所謂其字面には平易醇雅なるものあり、生割奇割なるものあり。其句讀には徑捷儁爽

なるものあり、雜澁糾纏なるものあり。其段落には斬截疎明なるものあり、曼衍錯綜なるものあり。當世の宿學をして自ら解免せしむる能はざる亦宜なるかな。是れ豈千古の奇文に非ずや。

三、屈原

賦。本傳。其作。其性質。其文體。

歌はずして誦す、之を賦と謂ふ、高に登て能く賦す、以て大夫となるべし、言物に感じ、端を造る、材知深美與に事を圖るべし、故に以て列大夫となるべきなり、古は諸侯卿大夫鄰國に交接し、微言を以て相感ず、揖讓の時に當て必ず詩を稱して以て其志を諭す、蓋して以て賢不肖を別ち、而して盛衰を觀るなり、故に孔子曰く、詩を學ばざれば以て言なきなり、春秋の後周道衰壞し、聘門の歌詠列國に行はれず、詩を學ぶの士逸して布衣に在て賢人志を失ふの賦作る、大儒孫卿及び楚臣屈原讒を離れ、國を憂へ、皆賦を作て以て風す、咸惻隱古詩の義ありと。（漢書藝文志）詩衰て賦作るとなすなり。然るも北方人種の間に起りたる古詩は自から南方人種の

作る所の賦なるものと其音を異にすると與に其性質に於て、其の起源に於て異るなり。荀卿趙人にして南音を學びて嘗て賦を作る。漢書藝文志に孫卿賦十篇とあり。然れども賦の以て傳ふべきものは屈原に始まる。南方人種なる屈原は時勢の非なるに遭ひ、志を失ふて怨悱禁ずる能はず、乃ち其錦心繡腸より發露する所二十五篇の賦となりて南方文學の爲に離騷たる光彩を添へたるなり。屈原名は平、楚の同姓なり。楚の懷王の左徒たり。博聞彊志にして治亂に明かに、辭令に嫻ふ。王甚だ之に任じぬ。上官大夫なるもの寵を爭て之を讒し、原是より疎ぜらる。乃ち王聰ならずして讒諂の明を蔽ひ、邪曲の公を害し、方正の容れられざるを疾み、憂愁幽思して離騷を作りぬ。秦の齊を伐たんとするや、楚の齊と好きを患ひ、張儀をして詐て秦を去て幣を厚うし質を委ね楚に事へしめ、利を以て懷王を陷はし之を欺く。懷王怒て大に師を興し秦を伐ちて楚の敗る所となり、漢中の地を奪はる。明年秦、漢中の地を割て楚に與へて以て和さんとす。楚王曰く、地を得るを願はず願くは張儀を得て以て甘心せんと。張儀楚に之て詭辯を懷王の寵姬鄭袖に設けて釋さる。時に屈原既に疏ぜられて復た

其作

位に在らず、齊に使し、顧みて反りて懷王を諫めて曰く、何ぞ張儀を殺さゞると。懷王悔て張儀を追ひたるも及ばざりき。其後諸侯共に楚を擯て大に之を破る。秦の昭王楚と婚し、懷王と會せんと欲す。懷王行かんとす。原諫めて用ひられず。懷王竟に秦に客死す。長子頃襄王立つ。屈原放流せらるゝと雖とも楚國を眷顧し、心を懷王に繫けて反さんと欲するを忘れず。然も又讒する所となりて江南に遷さる。乃ち懷沙の賦を作り、石を懷て遂に自ら汨羅に投じて死しぬ。其後數十年楚竟に秦の滅す所となれり。

屈原作る所の賦總て二十五篇而して離騷は其首なり。司馬遷之を評釋して曰く、離騷は猶離憂の如きなり、夫れ天は人の始なり父母は人の本なり、人窮すれば則ち本に反る、故に勞苦倦極、未だ嘗て天を呼ばざるはあらざるなり、疾痛慘怛未だ嘗て父母を呼ばざるはあらざるなり、屈平道を正うし、行を直ふし、忠を竭し、智を盡し、以て其君に事ふ、讒人之を間す、窮せりと謂ふべし、信にして疑はれ、忠にして謗らる、能く怨むる無らんか、屈平の離騷を作る、蓋し怨より生ずるなり、國風色を好で淫せず、小雅怨誹して亂せず、離騷の若きは之を兼たりと謂ふべし、上は帝

其性質

其辭

嚳を稱し、下は齊桓を道ひ、中は湯武を述べ、以て世事を刺り、道德の廣崇治亂の條貫を明にし、畢く見さゞるなし、其文は約、其辭は微、其志は潔、其行は廉、其文を稱する小にして其指は極めて大なり、類を舉ぐる邇ふして義を見はす遠し、其志潔故に其物を稱する芳、其行廉故に死して容られず、自ら疎ぜらる、渾汗泥の中に濯ひ、濁穢に蟬蛻し、以て塵埃の外に浮游し、世の滋垢を獲ず、皭然と泥して滓せざるものなり、此志を推すに日月と光を爭ふと雖とも可なりと。蓋し能く屈原を知れるものと謂ふべきなり。

屈原の多情にして多恨なる、洵に情感的なる南方人種たるに背かず。其行の廉にして其志の潔なる、君に疎ぜられて然も忘るゝ能はず。一は其同族たるの故存すと雖とも戰國の世志を得ざれば去り、國を視ること弊屣の如き時代に在て鬱々として念故國を離るゝ能はず、君に忠に國を愛すること斯くの如きは又以て彼が多感なるが故に非ずや。

二十五篇の賦は又能く南方人種たる彼が性質を現はせり。其思想に於ても、其辭句に於ても、其用ひたる材料に於ても屈原の賦は南方の生產物たるを自明

す。其天問に就て見よ、其九歌に就て見よ。是れ豈實際的傾向を有する北方人種が到底夢想し得ざる文辭に非ずや。獨り其思想に於てのみ云はず、彼が用ひたる景物を見よ、草木を見よ、其形容を見よ、其場所を見よ、皆是れ南方人種が其周邊に見、其思想に浮びたるものに非ずや。況や其文辭に至ては婉麗にして典雅然も侈靡纖微に流るゝことなきに於てをや。

屈原

湘君

君不行兮夷猶、蹇誰留兮中洲、美要眇兮宜脩、沛吾乘兮桂舟、令沅湘兮無波、使江水兮安流、望夫君兮歸來、吹參差兮誰思、飛龍兮北征、遭吾道兮洞庭、薜荔拍兮蕙綢、荪橈兮蘭旌、望涔陽兮極浦、橫大江兮揚靈、揚露兮未極、女嬋媛兮爲余太息、橫流涕兮潺湲、隱思君兮陫側、桂櫂兮蘭槳、斲冰兮積雪、采薜荔兮水中、搴芙蓉兮木末、心不同兮媒勞、恩不甚兮輕絕、石瀨兮淺淺、飛龍兮翩翩、交不忠兮怨長、期不信兮告余以不閒、朝騁鶩兮江皐、夕弭節兮北渚、鳥次兮屋上、水周兮堂下、捐余玦兮江中、遺余佩兮澧浦、采芳洲兮杜若、將以遺兮下女、時不可兮再得、聊以逍遙兮容與

北方の詩に對して南方に賦起れり。猶儒教に對して道教の起りたるが如し。

而して楚文に於ける南北の調和は實に漢代に於て行はれき。

屈原の風流れて其後楚に宋玉唐勒景瑳の徒あり。皆辭を好で賦を以て稱せらる。漢書藝文志に據れば唐勒に賦四篇、宋玉に賦十六篇あり。然れども遂に屈原の多感にして想像豐富に辭藻巧妙なるに追及する能はざるなり

四、韓非子

荀卿。韓非の傳。其書。其文辭

世降て天下の形勢漸次一變す。從て思想界の一轉化を免れざるなり。戰國の末に韓非を出したるもの豈それ偶然ならんや。

今や韓非を叙せんとするに先て姑らく荀卿に就て述ぶるを要す。齊の稷下は學士雲集の所にして獨り孟子の之きたるのみならず、淳于髡、慎到、環淵、接子、田駢、騶奭の徒皆之く。齊の襄王に至て荀卿亦齊にあり。荀卿は趙の人なり。一に孫卿と稱す。荀孫同音。或は漢宣帝の諱くるとするは非なり。年五十始て齊に游學す。時に田駢の屬皆已に死し、荀卿最も老師たり。齊尙列大夫の缺を脩

めて荀卿三ぴ祭酒たり。齊人或は荀卿を讒す。荀卿乃ち楚に適く。春申君以て蘭陵の令となす。春申君死して荀卿廢せらる。因て蘭陵に家す。李斯嘗て弟子となる、已にして秦に相たり。荀卿淵世の政亡國亂君相屬して大道を遂げずして巫祝に營し、禨祥を信し、鄙儒の小拘莊周等の如き又滑稽俗を亂るを嫉み、是に於て儒墨道德の行事興廢を推し序列して數万言を著して卒す、因て蘭陵に葬る。劉向敘錄を按ずるに荀子齊に遊ふの時を以て威宣の間と云へり。宋の唐仲友、史記年表に據りて其年數を推算して曰く、若し荀子年五十宣王の末年に齊に遊學せりとすれば春申君の死する頃には年百三十七歲なるべしと。晁公武も亦云ふ、春申君の楚に相たりしは考烈王の時にあり、宣王より考烈元年に至るまで凡そ八十一年にて荀子の齡百歲程なるべしと。宋濂も之を疑ひ、年數の合はざるを難ぜり。風俗通窮通篇には齊威宣の時孫卿秀才あり、年十五始めて來り游學すとあり。晁公武此說に據りて史記の五十は十五の誤なるべしと云ひ、梁王綱は若し五十齊に遊べば襄王の世に當りて荀子百二十餘尚復た楚に適き趙に適くは何ぞ其壽考なるやと云へり。獨り注中諸說を非なりとし、顏之推家訓中に荀卿五十始て來り遊學すの語を引て五十說を辨解せり。思ふに孟子の齊に遊ぶや宣王の初年にあり。荀子の出づるや遙に其後にありとすれば威宣の間に遊學したりとの說信ずべからず。

荀子の學は是を孔門弟子の流に受く。荀子の書中子弓を以て孔子と並稱するを以て見れば子弓なるものは其師なるべし。但し韓愈か馯臂子弓なりと稱し、吳萊が仲弓なるべしと推するは俱に非なり。時代に於て相異ればなり。陸德明經典釋文敘錄に詩子夏より四傳して根牟子となり、五傳して孫卿に至ると云ひ、漢書顏師古注に穀梁子經を子夏に受て孫卿に傳ふとあれば荀子が子夏の流を汲みたるや亦知るべきなり。子夏の學風たる最も實際的に傾き、重ずる所形式にあり。其人を敎ふるや、洒掃應對進退に始まる。荀子は其學風を繼承して禮の最も重ずべきを唱道す。蓋し北方思想の實際的傾向は時勢の變動と相伴ひ、此に荀子を出して禮の重きを天下に鼓吹せしめぬ。

荀子の弟子其世に著名なるものを扳ければそれ李斯と韓非との二人者か。李斯は秦皇を輔けて六國合一の偉功を樹て、韓非は荀子の學を承けて之に混ずるに

韓非の傳

刑名の學を以てして、鎔鑠して戰國の末に一個奇峭なる說を出しき。是を南北兩思潮の會流と稱するも何の不可あらんや。

非は韓の諸公子なり。申不害商鞅等の刑名法術の學を喜ぶ。其人となりや、口吃して道說する能はず、善く書を著はす。李斯と俱に荀卿に事ふ。斯自ら以て非に如ずとなす。非、韓の削弱せらるゝを見て數ば書を以て韓王を諫む。韓王用ふる能はず。後秦に使して李斯の爲に讒せられて秦に自殺す。

非書

韓非の著漢書藝文志に五十五篇とあり。今本篇と其數を同うす。但し初見秦、存韓の二篇は古人往々之を疑へり。即ち初見秦篇は戰國策には張儀說秦王に作る。高誘注に秦惠王也とあり。然れども書中張儀以後の事を記する處あるを以て吳師道は張儀誤當作韓非と云へり。四庫全書提要に韓非秦に使し居ると須臾にして殺す所となりたれば其間著書の暇あるべからず、初見秦存韓の二篇は後人の僞作なるべしとあり。史記秦本記には韓非、秦に使したるは秦王十四年なれども吳師道戰國策補正の說に據れば秦王十三年のことにして中間一年を經たり。著書の暇なしとする說終に妄たるに歸せざるを得ず。二篇亦韓非の手に成れるや疑なし。但し五十五篇中忠孝、人主、飾令等の篇は文氣弱くして自ら韓子の筆に異るものあり。それ恐くは其徒の作ならんか。

非文辭

時勢は常て孟子を出して仁義を說かしめぬ。時勢は荀子をして禮を唱道せしめぬ。時勢は又竟に韓非をして法を唱へしむるに至りき。天下の亂離已に久し。中央集權の必要は起りき。君權の增大は刻下の大問題に非ずや。韓非か腦髓の明晰にして其觀察の苛刻なる、時勢の必要に依て起り、時勢の弱點を道破し、時弊の救拯に其全力を用ひき。若し戰國の時勢を觀んとすれば韓子五十五篇は好個の畫圖と謂ふべきなり。

彼が思想に於るか如く、其觀察に於るが如く、其文辭も明晰にして苛刻に、銳利にして奇峭に、人の肺腑に入り其云ひ難き所を道破して又餘蘊なきなり。獨り議論文に其長所を現はしたるのみならず、敍事の巧にして譬喩の恰好なる、加ふるに多く押韻を用ひて更に澁滯する所なかりしなり。彼か文辭は最も變化に富めり。雲裂け霧出で、霧窮りて橋來るの趣あり。波瀾万重、曲折嵯峨、百態千狀目殆ど眩せんとするものあり。細墨を引て事情に切に是非を明にするもの是れ

韓非が文の獨得の長所に非ずや。

第三期　兩漢文學

總說

秦始皇。秦代文學。四漢文學。東漢文學。東漢の末

秦始皇

六王畢て四海一なり。周室東遷以後亂離を極めたる支那帝國は秦始皇が累世の餘威と天資の英傑なるとを以て統一せられぬ。號して始皇帝と云ひ、後世以て計數し、二世三世万世に至り之れを無窮に傳へんとし、自ら稱して朕と云ひ、命を制となし、令を詔となし、天下を分て以て三十六郡となし、天下の兵を咸陽に聚めて銷して鍾鐻金人十二を爲くり、天下の豪富を咸陽に徙す十二万戸、中央集權の實を擧げ、君權の高大なるを示せり。三十四年酒を咸陽宮に設く、博士七十人前で壽をなす。時に僕射周青臣頌す。齊人淳于越坐に侍し、進で曰く、臣聞く、殷周の王たる千餘歲、子弟功臣を封じて自ら枝輔となす、今陛下海内を有て子弟匹

夫たり、卒かに田常六卿の臣有て輔弼なくんは何を以て相救はんや、事古を師とせずして、能く長久なるものは聞く所に非るなり、今青臣又面諛以て陛下の過を重ぬ、忠臣に非ずと。始皇其議を下す。丞相李斯曰く、五帝相復せず、三代相襲らず、各以て治まる、其相反するに非ず、時變異なればなり、今陛下大業を創め、万世の功を建つ、固より愚儒の知る所に非ず、且つ越の言は乃ち三代の事、何ぞ法るに足らん、異時諸侯竝び爭ひ、厚く游學を招く、今天下已に定り、法令一に出づ、百姓家に當れば則ち農工を力め、士は則ち法令を學習し、禁を聴く、今諸生今を師とせずして古を學び以て當世を非り、黔首を惑亂す、丞相臣斯昧死して言ふ、古は天下散亂し、之を能く一にするなし、是を以て諸侯竝び作る、語皆古を道ひ以て今を害し、虛言を飾り、以て實を亂る、人其私學する所を善とし、以て上の建立する所を非る、今皇帝天下を幷有し、黑白を別て一を定む、私學を尊び相與に法教の人を非り、令下るを聞けば則ち各其學を以て之を議す、入れば則ち心に非り、出れば則ち巷に議し、主に夸りて以て名となし、異取して以て高しとなし、群下を率ゐて以て謗を造す、此の如く禁ぜざれば則ち主勢上に降り、黨與下に成らん、之を禁ずる便なり、臣

請ふ史臣秦記に非れば皆之を燒かん、博士官の職とする所に非ずして天下敢て詩書百家の語を藏むる者あらば悉く守尉に詣り、雜て之を燒かん、故に詩書を偶語するあらば弃市せん、古を以て今を非るものは族し、吏見知して舉げざるものは與に罪を同うし、令下り三十日に燒かざれば黥して城旦となさん、去らざる所の、もの醫藥卜筮種樹の書、若し法令を學ぶあらんと欲せば吏を以て師となさんと。奏可せられて焚書の令は下りぬ。既にして侯生盧生等始皇の暴を憤て亡げ去る。始皇聞て乃ち大に怒て曰く、吾れ前に天下の書を收め、用に中らざるものは盡く之を去り、悉く文學方術の士を召す、甚だ衆し以て太平を興さんと欲す、方士練して以て奇藥を求めんと欲す、今聞く韓衆去て報ぜず、徐市等費すに巨萬を以て計ふて終に藥を得ず、徒らに姦利相告ぐる日に聞ゆ、盧生等吾れ之を尊賜する甚だ厚し、今乃ち我を誹謗し、以て吾が不德を重ぬるなり、諸生咸陽に在るもの吾れ人をして廉問せしむるに或は妖言を爲して以て黔首を亂ると。是に於て御史をして悉く諸生を案問せしむ。諸生傳て相告引すれば乃ち自ら除す、禁を犯すもの四百六十餘人、皆之を咸陽に坑にし、天下をして之を知らしめ、以て後を懲らさんとせり。秦皇か威武は斯くの如くにして太古以後發達し來りたる思想を杜絶し、文學の大部を取て之を一炬に附しぬ。抑も李斯をして焚書の奏言をなさしめ、始皇をして之を執行せしめたるの故は要するに君權擴張の一手段に出づるなり。周末思想界の高潮は六國合一となりたりと雖とも依然舊の如し。諸子の橫議は更に減せざるなり。漸もすれば高論放言し、時事を誹り、天下の政を議さんとす。今や君權擴大に力を盡くせる秦皇李斯の如きは心之を快とせざるなり。唯一策か、思想の鎭壓にあり、橫議の杜絶にあり、天下の民を愚にするにあり。三代を說き、今を非るの弊を罷めしめんとするは三代の遺書を焚くにあり。是に於てか一たび焚書の令となり、再び坑儒の律となり天下をして慴服せしむるに至りぬ。

書を焚き儒を坑にしたる秦は未だ全く文學を禁じたるに非ざるなり。史職猶廢せられずして秦記あり。山に登り、臺を作るや、石に勒し銘を作り、其功德を敘でしむ。文辭華采なしと雖とも質直にして自から秦時の文辭たるを現ぜり。且つ焚書の令ありと雖とも博士官の書を讀むを禁ぜず。三十六年墜星あり、東

郡に下り、地に至り、石となる。黔首或は其石に刻して曰く、始皇帝死して地分ると。始皇之を聞て御史を遣はし逐問して服するなし。乃ち盡く石旁の居人を取りて之を誅し、因て其石を燔銷せしむ。然れども始皇猶樂まざるなり。博士をして仙眞人の詩を作らしめて以て自ら慰むと云ふ。文學は非常なる激變を受けたりと雖とも斯文未だ全く地に墜ちざりしなり。李斯の如きは韓非に及はずと雖とも猶若勁なる文辭を作りぬ。蓋し秦は西方の山國、風氣自から南北に異るものあり。從て其思潮及び其文學も亦他に同じからざる者ありて存す。蓋し秦代文學の標本を見んと欲すれば刻石の辭に若くはなし。始皇三十七年、會稽に上り、大禹を祭り、南海を望で石を立て刻して秦の德を頌す。三句韻をなして凡そ二十四韻あり。其文に曰く、

皇帝休烈平一宇內、德惠修長、三十有七年親巡天下、周覽遠方、遂登會稽、宣省習俗、黔首齋莊、羣臣誦功、本原事迹、追首高明、秦聖臨國、始定刑名、顯陳舊章、初平法式、審別職任、以立恒常、六王專倍、貪戾傲猛、率衆自彊、暴虐恣行、負力而驕、數動甲兵、陰遲間使、以事合從、行爲辟方、內飾詐謀、外來侵邊、遂起禍殃、義威誅之、殄熄暴悖、亂賊滅亡、聖德廣密、六合之中、被澤無疆、皇帝幷宇、兼聽万事、遠近畢清、運理羣物、考驗事實、各戴其名、貴賤並通、善否陳前、靡有隱情、飾省宣義、有子而嫁、倍死不貞、防隔內外、禁止淫佚、男女絜誡、夫爲寄豭、殺之無罪、男秉義程、妻爲逃嫁、子不得母、咸化廉清、大治濕俗、天下承風、蒙被休經、皆遵度軌、和安敦勉、莫不順令、黔首脩潔、人樂同則、嘉保太平、後敬奉法、常治無極、與舟不傾、從臣誦烈、請刻此石、光垂休銘、

文辭質直にして西方の風氣を現じ、秦皇の尊嚴と冒すべからざるの威光を示し、六國一統の餘烈は自から辭句の間に溢るゝを見るなり。

漢興て秦の敗を改め、惠帝の四年挾書の律を廢し、大に簡籍を收め廣く獻書の路を開きぬ。孝武の世に至る迄書缺け、簡脫し、禮壞れ樂崩る。是に於て藏書の策を建て、寫書の官を置き、下諸子傳說に及び、皆秘府に充さしむ。成帝の時に至り、書頗る散亡するを以て謁者陳農をして遺書を天下に求めしめ、光祿大夫劉向に詔し經傳諸子詩賦を校せしめ、步兵校尉任宏をして兵書を校せしめ、太史令尹咸をして數術を校せしめ、侍醫李柱國をして方技を校せしむ。向卒して其子歆其業を紹ぎ、群書を總べて其七略を奏す。斯くの如く西漢の世は焚餘の書を索め

東漢文學

て力を聚拾に致しき。故に易には施孟梁丘京の諸氏あり。濟南の伏生、孔安國は尚書を傳へ、魯の申公、齊の轅固、燕の韓生は詩の訓故及び傳を作り、禮は魯の高堂生に依て士禮十七篇を傳へられ、樂は武帝の時好學河間獻王の如きを出し、毛生等と與に樂記を作り、魯の論語は常山都尉龔奮等傳へて名あり。孝經は安昌侯張禹等の傳ふる所たり。嘗て竇太后道教を好で黄老を鼓吹したりと雖ども董仲舒奏じて儒道の流行となり、北方人種の教義は主として人心を繫縛したりき。然れども戰國末に於ける南北兩思潮の會流は流れ〳〵て漢代に在ては漸く調和の傾向を現じき。

西漢亡び光武中興するに及び、已に文治に志あり。首として太學を起して古典を發式し、禮樂を修明し、晩歲に明堂靈臺辟雍を起つ。故に東漢には訓詁家馬融鄭玄の徒を出すに至りき。桓帝の時大學の諸生三万有餘人と云ふ。靈帝も亦文學を好で諸生の文賦を能くするものを引き並に鴻都門外に待制し、大學を併立す。然れども其學風に至ては憐むべき者ありき。若し夫れ東漢を以て西漢に配すれば西漢文學の活氣あるに若ざるなり。西漢は前朝亡逸の遺書を聚拾

東漢の末

するを以て能事となせりと雖ども流石に戰國思想界の高潮時代を去る事遠からず、且つ孝文の富有と孝武の英豪を以てし、天下に鼓吹するに新鮮なる活氣を以てせり。故に賈誼董仲舒の如き論文家を出し、司馬遷絶代の史筆を以て史記を敍で、司馬相如一枝の彩管に花の如き辭賦を詠じ、楊雄の法言大玄となり、四言の詩は韋孟に起り、五言は李陵蘇武に起り、七言は漢武の柏梁に起ると傳へられ、一代の文運燦として甚だ觀るべきものありき。東漢に至ては之に異り、三代既に亡びてより風化の美なる、未だ東漢の盛なる若きものあらずと云ふ。然れども西漢の氣格は終に之を見る能はざるなり。班固の史筆は東漢に重きをなせりと雖ども遷が燃犀の靈筆と比すべくもあらず。若し東西兩漢の文氣を較せんとすれば固と遷の歷史は其最も恰好なる證例に非すや。

東漢の末世は紛亂麻の如き時代なりき。然れども春秋戰國に諸子横議したるが如きは此時代に見るを得ざりき。君權の猶鞏固ならざりし周の末は自から活氣を鼓吹したり。且つ春秋戰國に於ける割據は三國對峙の世と其の形勢を異にす。三國時代に在て僅に諸葛亮の出師表が當時の名篇と唱へられたるは

洵に是が爲めなり。

一　賈誼と楊雄

賈誼傳。其思想及文章。　楊雄の傳。其著書　其文章。

賈誼の傳

漢興て二十餘年。文學の士として傳ふべきもの、洛陽の人賈誼あり。年十八能く詩を誦し、書を屬するを以て郡中に聞ゆ。河南の守吳廷尉の愛する所たり。吳廷尉用ひらるゝに及で誼を推擇す。文帝召して以て博士となす。誼時に年二十餘最も年少たり。詔令議下る每に諸老先生言ふ能はず。賈生盡く之が對をなす、人々各其意の出さんと欲する所の如し。諸生是に於て乃ち以爲らく、能く及ばずと。孝文帝之を說ひ超遷し、一歲中に太中大夫に至る。賈生以爲らく、漢興て孝文に至り、二十餘年、天下和洽す、而してもと當に正朔を改め、服色を易へ、制度を法し、官名を定め、禮樂を興すべしと。乃ち悉く其事の儀法を草具し、色は黃を尙び、數は五を用ひ、官名を爲くり、悉く秦の法を更む。孝文帝初て位に即き、謙讓して未だ遑あらざるなり。諸律令更定する所及び列侯をして悉く國に就かしむる、其說皆賈生より之を發す。是に於て天子議して以て賈生公卿の位に任せしむべしとなす。絳、灌、東陽侯、馮敬の屬盡く之を害す。乃ち賈生を短して曰く、洛陽の人年少にして初て學び專ら權を擅にし、諸子を紛亂せんと欲すと。是に於て天子も亦後に之を疏んじ其議を用ひず。乃ち賈生を以て長沙王の太傅となす。賈生既に辭して往々行き、長沙の卑溼なるを聞き、自ら以て壽長きを得ずとなし、且其謫せられたるを以て鬱々樂まず。湘水を渡るに及で賦を爲て屈原を吊す。文意俱に悲婉なり。長沙に在て三年、鵩あり、飛で賈生の舍に入り、坐隅に止る。賈生心之を傷悼し、賦を爲て自ら慰む。野鳥入處分主人將去、辭洵に悲きものあり。後歲餘にして再び徵され、文帝之と語て夜半に至り、爲に席を前むるに至る。既にして罷で曰く、吾れ久く賈生を見ず、自ら以て之に過ぐとなす、今及ばざるなりと。居る頃らくにして誼を拜して梁の懷王の太傅となす。懷王は文帝の少子にして愛せられて書を好む。故に賈生をして之に傅たらしむ。文帝復た淮南厲王の子四人を封じて皆列侯となす。賈生諫めて以爲らく、忠之より起らんと。數ば上疏して削弱の說を上りて用ひられず。居ること數

年、懷王騎して馬より墮ちて死す、後なし。賈生自ら傅となり無狀なるを傷で哭泣する歳餘にして亦死せり、時に年三十三、

賈誼に於ても既に南北兩思潮を混じたるを見る。即ち其學は申韓を祖述すと雖とも又儒流を汲めり。春秋左氏傳の如きは其精通する所にして嘗て左氏傳訓故を爲くり趙人貫公に傳へき。著はす所の新論中觀るべきの文は治安策と過秦論とにあり。後人稱して西漢文章の傑然たるものとなす。申韓は彼の奉じたるところ、老莊の如き亦彼が窺ひたる所、百家の說殆ど通ぜざるなし。

然れども孔孟の說も亦實に彼が思想を支配したりき。故に過秦論に於て秦の敗を論ずるや、即ち曰く、仁義不施而攻守勢異也と。其文辭たる、雄渾にして高古、賦は屈原の悲婉相如の弘麗に比しては遜色ありと雖とも亦西漢の賦として傳ふべきものあるなり。

若し夫れ西漢に於ける論策の士を論ずれば鼂錯董仲舒の如きものあるも亦皆前代の思潮を受けて之を政治上に施したるなり。漢一代を擧げて思想家の大なるものは之を觀ざるなり。唯それ先秦に於ける思想家が單に思索したるに止りたると異り、漢代に於ける此等承繼者は皆是れ之を政治の上に實行し、其蹟を擧げたるものなりとす。

賈誼以後最も傳ふべきは西漢の終に出でたる楊雄なるか。楊雄字は子雲、蜀郡成都の人也。少ふして學を好み、章句訓詁を爲さずして通ずるのみ。博覽見ざる所なし。人となり簡易佚蕩、口吃して劇談する能はず、默して深湛の思を好む。清靜亡爲、耆欲少く、富貴に汲々たらず、貧賤に戚々たらず、靡隅を修めて以て名を當世に徼めず。家産十金に過ぎず、乏しくして儋石の富なく、晏如也。自ら大度たり。嘗て屈原を弔て反離騷、廣騷、畔牢愁等の賦を作る。成帝の時召されて帝に甘泉に從ひ、還て甘泉賦を奏す。又河東賦、長楊賦の作あり。王莽位を簒ふの時太玄を草す。自ら泊如を守る所以なり。人之を嘲て玄の尙ほ白きを以てす。乃ち解嘲を作て以て辨ず。彼が說に依れば賦なる者は將に以て風せんとする也、必ず類を推して言ひ、麗靡の辭を極め、閎侈鉅衍、人をして加ふる能はざらしむるを競ふなり、既に迺ち之を正きに歸す、然れども覽る者已に過てり、武帝神仙を好む、故に相如、大人賦を上りて以て帝を風せんと欲し、反て縹々凌雲の志を生ぜ

しめぬ、是に繇て之を言へば賦糊して止まざるは明けし、又頗る俳優淳于髡優孟の徒に相似たり、法度の存する所賢人君子詩賦の正とする所に非ずと。乃ち賦を廢し、易に倣て太玄を作りたる也。又論語に倣て法言を作り、倉頡に倣て訓纂を作り、虞箴に倣て州箴を作る。符命の獻ありて既豐父子の禍あるや、雄書を天祿閣上に校す。禍將に及ばんとするを見て閣上より自ら投じて幾ど死せり。

世人其情を知らざるを以て之を問ふ勿らしむ。劉歆嘗て其太玄を觀て曰く、空く自ら苦む、今の學者は祿利あり、然も尚ほ易を明にする能はず、又玄を如何、吾れ恐くは後人の用ひて醬瓿を覆さんとをと。雄笑て應ぜず、年七十一にして卒す。」

劉新美新の文を作て莽を頌したるを以て天下之を醜なりとするも、雄なるものは漢代第一の思想家なりしなり。又實に南北兩思潮の合流に棹せる思想家なりしなり。彼が常に摸擬を力めたるは事實なり。然れども太玄の如き、其言の難きや、之を觀るものは知り難く、之を學ぶものは成り難しと稱せらる。故に彼の言に云はずや、大味は必ず淡、大音は必ず希に、大語は叫々たり、大道は低回す、是を以て聲の眇たるものは衆人の耳に同すべからず、形の美なるものは世俗の目に根すべからず、辭の衍なるものは庸人の聽に齊すべからず、今夫れ弦は高く張て徽を急にし、趨を追ひ、醫を逐ひ、則ち坐者期せずして附く、試に之を爲して咸池に施し、六經に揄き、簫韶に發し、九成を詠ずれば則ち和するあるなし、是の故に鍾期死して百牙弦を絶ち琴を破り敢て衆と鼓せず、獲人亡ぶれば則ち匠石斤を輟めて敢て妄に斲らず、師曠の鐘を調ふる、音を知るものゝ後に在るを誤てばなり、孔子の春秋を作る、君子の前睹を冀へばなり、老聃遺言あり、我を知るものゝ希れなるを貴めばなり、此れ其操に非ずやと。然れども雄の死後四十餘年、法言は大に行はれたるも大玄終に顯れざりきと云ふ。

揚雄博覽見ざる所なしと云ふ。但其說は多く折衷を旨とし、極めて摸擬したりと雖とも之を當時の諸儒に比すれば識見の超拔したるものあり。司馬君實嘗て言あり、揚子雲は眞に大儒なり、孔子沒後聖人の道を知るものは雄に非ずして誰ぞと。後の儒者か之を譏詆するか如きは以て子雲の價値を沒するに足らざるなり。

彼か文章、彼か賦、又多く摸擬に出づと雖とも能く他の長所を採り、蒼勁にして觀

るべし。但其奇字を好むや、賦中に難字最も多し。故に文飾多くして正大雅頌の義を失ふの誹あるもの、亦酷評に非るなり。

楊雄以後漢代又論策の士見るべきものなし。楊雄は西漢に於ける最後の文章家なりしのみならず、其漢世を終るまで後を絶ちたるの文章家なりしなり。

二、司馬遷と班固

歴史の由來。司馬遷の傳。其著書。史に對する見解。司馬遷の晩年。史記の價値。其文辭。班固の傳。史記と漢書。

歴史の由來

唐虞三代の世、動けば則ち左史之を書し、言へば則ち右史之を書す。其名存するもの夏に太史終古、殷に太史向摯、周に太史儋あり。春秋以後諸侯の國には自ら史あり。左傳魯の季孫外史を召し惡臣を掌らしむ。衞史龍滑曰く、我は太史なり。楚に左史倚相あり。孟子曰く楚の檮杌、晉の乘、魯の春秋其事一なりと。皆各國の史たり。周室既に微にして載籍殘缺す。孔子乃ち前聖の業を存せんことを思ひて曾て曰く、夏の禮は吾れ能く之を言ふ杞徵するに足らざるなり、殷の禮は吾れ能く之を言ふ宋徵するに足らざるなり、文獻足らざるか故なり、足らば則ち吾れ能く之を徵せんと。魯は周公の國にして禮文備はり、史官法あるを以て魯の人左丘明と、魯の史を觀、行事に據り、人道に仍り、興に因て以て功を立て、敗に就て以て罰を成し、日月を假て以て歴數を定め、朝聘に繇て以て禮樂を正うし、褒諱貶損する所あり、但し書見すべからず、弟子に口授したるを以て弟子退て各見る所を異にす。是に於て丘明弟子の各其意を安じ以て其眞を失ふを恐れ、故に本事を論じて傳を作り、夫子の空言を以て經を說かざるを明にす。左氏傳三十篇是れなり。其後公羊、穀梁、鄒氏、夾氏の傳あり。公羊、穀梁は學官を立て、鄒氏は師なく、夾氏には書なし。左丘明又異同を撰び號して國語と曰ふ、總て二十篇。是よりして楚の檮杌、晉の乘は泯滅して終に存せず。而して左氏國語獨り章はれき。又黃帝以後春秋の時に至るまでの帝王公侯卿大夫祖世の出づるを錄したる世本なるものあり、十五篇。春秋の後七國竝び爭ひ、秦諸侯を幷するに至る間を記したるもの戰國策三十三篇あり。漢興て天下を定むるや、太中大夫陸賈時功を錄して楚漢春秋九篇を作りぬ。支那に於ける三代以後漢初に於ける歴

史の成りたるものは概ね斯くの如し。然れども實際的傾向を有する北方人種の間に成り、然も北方人種の最も醇乎たる孔子に依て筆削せられたる春秋なるものは其名史なりと雖とも實は一個褒貶の宣告書なり。故に亂臣賊子是か爲に懼ると傳へらるゝに非ずや。儒教的見地より打算せられたる宣告書は史として何の價値をか存すべき。唯それ左氏の筆か渾厚にして簡古、壯嚴にして勁健、洵に先秦時代の生産物として精彩ありと雖とも史としては未た稱するに足らざるなり。西漢司馬遷を出して矯健なる筆力と燃犀の史眼を以て事實を捨捨して紀事本末体の史を草するに至て支那の史なるもの始めて觀るべし。若し夫れ漢代の文學後世に於て最も誇るべきものありと云へばそれ獨り遷の史なるかな。

司馬遷の傳

遷は孝武の世の人なり。字は子長、龍門に生る。其父を談と云ふ。太史令たり。談、天官を方士唐都に學び、易を楊河に受け、道論を黄子に習ひ、建元元封の間に仕ふ。遷の生るゝ頃河山の陽に耕牧す。遷年十歲にして古文を誦す。二十にして南、江淮に遊び、會稽に上り、禹穴を探り、九疑を窺ひ、北の方汶泗を涉り、梁を齊魯の都に講じ、鄒嶧に鄉射し、薛彭城に阨困し、梁楚を過ぎて歸る。歸て仕て郎中となり、使を奉じて西巴蜀を征し、功徠昆明を略し、還り報命す。是歲泰山の封あり。遷の父談事に從ふを得ず、其憤を發して將に死せんとするや、遷往て父を河洛の間に見る。父、遷の手を執りて泣て曰く、予が先は周室の太史なりき、上世より嘗て功名を顯す、虞夏、天官の事を典り、後世中衰す、予に絶えんや、汝復た太史となれば則ち吾か祖を繼げ、今天子千載の統を接ぎ、泰山に封じて予行に從ふを得ず是れ命なるかな、命なるかな、予死せば爾ち必ず太史となれ、太史となりて吾が論著せんと欲する所を忘るゝ勿れ、獲麟よりして以來四百有餘歲にして諸侯相兼ね、史記放絶す、今漢興て海内一統し、明主賢君忠臣義士、予太史となりて論載せず、天下の文を廢するは予甚だ懼る、爾ぢそれ念へよやと。遷首を俯れ流涕して曰く、小子不敏謂ふ悉く先人の次する所の舊聞を論じて敢て闕かじと。其後三歲にして遷太史令となり、史記石室金匱の書を紬む。十年にして偶李陵の禍に遭ひて縲紲に幽せらる。迺ち喟然として嘆じて曰く、是れ余の罪なり、夫れ身殘て用あらず。退て深く思ふて曰く、夫れ詩書隱約なるものは其志の思を遂げん

と欲すればなりと。乃ち左氏國語を採り、世本戰國策を刪り、楚漢春秋に據て國の時事を列ね、上黃帝より筆を起し、下武帝の紀に至り、天下の遺文古事殆ど之を網羅して叙次す。史記是れなり。彼が序に於て曰く、於戲余維れ先人嘗て斯の事を掌り、唐虞に顯れ、周に至て復之を典る、故に司馬氏世天官を主る、余に至てや、欽で念へや、天下の放失せる舊聞を網羅し、王迹の興る所、始を原ね、終を察し、盛を見、衰を觀、之が行事を論考し、三代を略にし、秦漢を錄し、上軒轅を記し、下茲に至り、十二本紀を著して既に之を科條す、時を竝べ、世を異にし、年差明ならず、十表を作る、禮樂損益し、律歷改易す、兵權山川鬼神天人の際敝を承け、變に通じ八書を作る、二十八宿北辰を環り、三十輻、一轂を共にし、運行窮なし、輔弼股肱の臣配せられ、忠信道を行ひて以て主上に奉ず、三十世家を作る、義に扶て倜儻し、己れ時を失はしめず、功名を天下に立つるもの、七十列傳を作る、凡そ百三十篇、五十二万六千五百字、太史公の書となす、序略以て遺を拾ひ、藁を補ひ、一家言を成し、六經の異傳を協へ、百家の雜語を齊へ、之を名山に藏す、副は京師にあり、以て後聖の君子を俟つと。遷既に刑せられて後中書令となりて沒しき。

北著書

史記百三十篇ありきと雖とも遷沒するの後孝景記、孝武記、禮書、樂書、兵書、漢興以來將相年表、日者列傳、三王世家、龜策列傳、傅靳列傳を失ふ。但し顏師古の說に依れは序目本と兵書なし、故に之を亡失すとなすの說は非なりと。其後褚先生缺を補ひ、武帝記、三王世家、龜策日者傳を作る。然れとも終に狗尾續貂の誚を免れざるなり。

史に對する見解

司馬遷は既に遺傳的史家なり。況や之を激勵する、其父談あるに於てをや。彼が學は獨り儒教のみならず、又老莊の學を窺へり。彼は北方人種の思想を受けたるのみならず、又南方人種の思潮を汲めり。姑らく彼が史に對する意見を窺はんとするに上大夫壺遂との問答に若くものは莫し。遷曰く、先人言へるあり周公卒してより五百歲にして孔子あり、孔子より今に至る五百歲にして能く紹て之を明にするあり、易傳を正うし、春秋を繼ぎ、詩書禮樂の際に本くと、意斯にあるか、小子何ぞ敢て攘らんと。上大夫壺曰く、昔し孔子何の爲に春秋を作るか。遷曰く、余之を董生に聞く、周道廢れ、孔子魯の司寇たり、諸侯之を害とし、大夫之を壅す、孔子時の用ひす道の行はれさるを知るや二百四十二年の中を是非し、以て

天下の儀表となし、諸侯を貶し、大夫を討し、以て王事を達するのみ、子曰く、我之を空言に載せんと欲す、之を行事に見はすの深切著明たるに如かざるなりと、春秋は上、三王の道を明にし、下人事の經紀を辨し、嫌疑を別ち是非を明にし、猶與を定め、善を善とし、惡を惡とし、賢を賢とし、不肖を賤み、亡國を存し、絶世を繼ぎ、敝を補ひ、廢を起す、王道の大なるものなり、易は天地陰陽四時五行を著はす、故に變に長す、禮は人倫を綱紀す、故に行に長す、書は先王の事を記す、故に政に長す、詩は山川谿谷禽獸草木牝牡雌雄を記す、故に風に長ず、樂は立つ所以を樂む、故に私に長ず、春秋は是非を辨す、故に人を治むるに長ず、是故に禮は以て人を節し、樂は以て和を發し、書は以て事を道ひ、詩は以て意を達し、易は以て化を道ひ、春秋は以て義を言ふ、亂世を撥して之を正に反すは春秋より近きはなし、春秋の文たる數万を存し、其指數千、万物の散聚皆春秋に在り、春秋の中君を弑する三十六、國を亡す五十二、諸侯奔走して社稷を保つを得さるもの勝て數ふべからず、其所以を察するに皆其本を失へるのみ、故に易に曰く、差毫釐を以てし謬は千里を以てすと、故に臣君を弑し、子父を弑す、一朝一夕の故に非す、其漸久し、國を有つものは以て春秋を

知らざるべからず、前に誣あつて見えず、後に賊あつて知らず、人臣たるものは以て春秋を知らざるべからず、經事を守て其宜を知らず、變事に遭ふて其權を知らず、人の君父たるものにして春秋の義に通ぜざるものは必ず簒弑誅死の罪に陷る、其實皆善の臣子となつて春秋の義に通ぜざるものは必ず首惡の名を蒙り、人を以て之を爲して其義を知らず、之を空言に被らして敢て辭せず、失れ禮義の指に通ぜざれば君々たらず臣々たらず父々たらず子々たらざるに至る、それ君々たらざれば則ち犯され、臣臣たらざれば則ち誅せられ、父父たらざれば則ち道なく、子子たらざれば則ち孝ならず、此四行は天下の大過なり、天下の大過を以て之に予ふ、受けて敢て辭せず、故に春秋は禮義の大宗なり、失れ禮は未然の前を禁じ、法は已然の後に施す、法の用をなす所のものは見易くして禮の禁をなす所のものは知り難しと。靈遂曰く、孔子の時上に明君なく、下任するを得ず、故に春秋を作り、空文を垂れて以て禮儀を斷じ、一王の法に當る、今夫子上は明天子に過ひ、下は職を守るを得たり、萬事既に具はり、威各其宜を序す、夫子の論ずる所何を以てか明かさんと欲すと。遷曰く、然らず、余之を先人に聞く、曰く、宓戲至て純厚、易の

八卦を作る、堯舜の盛なる尚書之を載し、禮樂作る、湯武の隆なる詩人之を歌ふ、春秋善を采り惡を貶し、三代の德を推し、周室を褒む、獨り刺譏のみに非るなり、漢興て已來明天子に至て符瑞を獲て封禪し、正朔を改め、服色を易へ、命を受く、於穆にして清し、澤罔極に流れ、海外殊俗譯を重ね、塞を款き、來獻見るを請ふもの勝て道ふべからず、臣下百官力聖德を誦して、猶其意を宣べ盡す能はず、且つ士賢能にして用ひられざるは國を有つものゝ過なり、主上明聖にして德の布き聞えざるは有司の過なり、且つ余其官を掌り、明聖盛德を廢して載せず、功臣賢大夫の業を滅して述べず、先人の言ふ所を墮つ、罪焉より大なるは莫し、余の所謂故事を述べ其世傳を整齊するは所謂作るに非るなり、而して君の之を春秋に比するは謬てりと。史記を以て春秋に比す、固より過てり。其所謂作るに非るなりとは能く彼が史なるものを說明するに非るなきか。春秋は史に非ず、呂氏春秋の如き、楚漢春秋の如き皆名之に假り、多く經に倣ふ。司馬遷獨り能く史なるものゝ本分を知り、故事を述べ、世傳を整齊し、以て黃帝以後の事蹟を確にせんとす。史記の價値は先づ此に存せり。

其系統に於て世々史家たる彼は又深く父の遺言を守り、父の遺業を紹かんとせり。書未だ就らずして罪に遭ふ。彼が悲憤思ふべきなり。其友益州刺史任安に報ずるの書に於て曰く、夫れ僕と李陵とは俱に門下に居る、素と相善きに非るなり、趣舍路を異にす、未だ嘗て杯酒を衒で殷勤の歡に接せず、然れども僕其の人となりを觀るに自ら奇士、親に事へて孝、士に信に、財に臨で廉、取予義に、分別讓るあり、恭儉人に下り、常に憤て身を顧みず以て國家の急に殉せんとを思ふ、其れもとより蓄積する所なり、僕以て國士の風ありとなす、云々、陵の未だ沒せざる時使來り報ずるあり、漢の公卿王侯皆觴を奉り、壽を上る、後數日にして陵の敗書聞ゆ、主上之が爲に食味を甘しとせず、朝を聽て怡ばず、大臣憂懼出づる所を知らず、僕竊に自ら其卑賤を料らず、主上の慘悽怛悼を見、誠に其款々の愚を効さんと欲し、以爲らく李陵もと士大夫と甘を絕ち、少を分ち、能く人の死力を得、古名將と雖とも過ぎざるなり、身陷敗すと雖とも彼れ其意を觀るに且に其當を得て漢に報ぜんと欲す、事已に奈何ともすべきなし、其摧敗する所の功亦以て天下に暴らすに足る、僕懷之を陳せんと欲して未だ路あらず、適ま召問に會す、即ち此指を以て推

して陵が功を言ひ、以て主上の意を廣め、唯唯の辭を塞んと欲し、未だ盡明する能はず、明主深く曉らず、以爲らく僕貳師を沮して李陵の爲に遊說すと、遂に理に下す、拳々の忠終に自ら列ぬる能はず、因て上を眄ひたるか爲に卒に吏に從て譏せらる、家貧にして財賂以て自ら贖ふに足らず、交遊救ふなし、左右親近爲に一言せず、身木石に非ず、獨り法吏と伍をなし、深く囹圄の中に幽せらる、誰か告愬すべきものぞ、此れ正に少卿が親く見る所、僕の行事豈然らざらんや、李陵既に生て降り、其家聲を隤し、重ねて天下の觀笑となる、悲かな悲かな、事未だ一二俗人の爲に言ひ易からざるなり、云々僕怯奚尚も活きんと欲すと雖とも亦頗る去就の分を識る何ぞ自ら累紲の辱に湛溺するに至らんや、且つ夫れ臧獲婢妾猶能く引決す、況や僕の已むを得ざる若きをや、隱忍尚も活き糞中の土に囚して辭せざる所以のものは私心盡きざる所あるを恨み、世を沒して文采後に表れざるを鄙むなり、古は富貴にして名磨滅するは勝て記すべからず、唯倜黨非常の人稱せらる、蓋し西伯拘へられて周易を演じ、仲尼戹尼で春秋を作り、屈原放逐せられて乃ち離騷を賦し、左丘明を失て厥に國語あり、孫子脚を刖せられて兵法修列し、不韋蜀に遷され

て世呂覽を傳へ、韓非秦に囚へられて說難孤憤あり、詩三百篇大抵聖賢發憤して爲に作る所なり、此れ人皆意に鬱結する所あり、其道を通ずるを得ず、故に往事を述べて來者を思ふ、左丘明目なく孫子足を斷たるゝ如きに及ては終に用ふべからず、退て書策を論じて以て其憤思を舒べ、空文を垂れて以て自ら見めす、僕竊に不遜、近く自ら無能の辭に託し、天下の放失舊聞を網羅し、之を行事に考へ、其成敗興壞の理を稽へ、凡そ百三十篇、亦以て天人の際を究め古今の變に通じ一家の言を成さんと欲す、草創未だ就らず、適此禍に會ひ、其成らざるを惜む、是を以て極刑に就て慍色なし、僕誠に已に此書を著し、之を名山に藏し、之を其人の通邑大都に傳へば則ち僕前辱の責を償ふ、方に戮せらるゝと雖とも豈悔あらんや、然れども此れ智者の爲に道ふべくして俗人の爲に言ひ難きなりと。司馬遷任俠の人となりは李陵の爲に辨ずる所ありて、此奇禍を買へり。痛憤骨髓に徹す、自ら決する能はざるは書未だ就らざればなり。史記は斯くの如く悲憤慷慨の秋に於て成れり。彼れ曰く死する日然る後是非酒ち定まると。彼は知己を千載に待たんとす。史記か文辭千古の名篇と稱せらるゝは因斯くの如ければなり。

史記の價値

史家として司馬遷は識見超絶の士なり。黄帝以前は之を闕て敢て筆を著けず、項羽を以て本紀に列するか如き、孔子を配して世家に加へたるか如き、自ら眼識の卓異なるものなくんはならず。史家としては公平に、褒貶の筆を以て人の興敗を論ぜず、極めて心を虚うし、洽く材料を採り、其信ずべきに據て一部の史記を成せり。儒教的見地に依て史を觀るか如きは彼の敢て爲さざる所、實際的傾向の思潮に傾倒せらるゝが如きは彼の史に於て之を見ざるなり。且つ其論贊の如き、史論家として識見の群を拔きんずるものなり。史記が史としての價値あるは洵に此故なればなり。

其文辭

其文辭に至ては遷か筆力の勁拔なるに加え、痛憤の發する所、文情火の如く錦の如きものあり。其悲哀の處を述ぶれば凄絶哭せんとするものあり。其慷慨の處を說けば壯絶起て舞はんとする所あり。文の能事殆ど至れり盡せるものなるを見る。一篇の項羽本紀を取り、若くは刺客列傳を取て之を讀めば天下の文此に盡きるの觀あるに非ずや。

荆軻入秦刺客列傳　司馬遷

於是太子豫求天下之利匕首得趙人徐夫人匕首取之百金使工以藥焠之以試人血濡縷人無不立死者乃裝爲遣荆軻燕國有勇士秦舞陽年十三殺人人不敢忤視乃令秦舞陽爲副荆軻有所待欲與俱其人居遠未來而爲治行頃之未發太子遲之疑其改悔乃復請曰日已盡矣荆卿豈有意哉丹請得先遣秦舞陽荆軻怒叱太子曰何太子之遣往而不反者豎子也且提一匕首入不測之彊秦僕所以留者待吾客與俱今太子遲之請辭決矣遂發太子及賓客知其事者皆白衣冠以送之至易水之上既祖取道高漸離擊筑荆軻和而歌爲變徵之聲士皆垂淚涕泣又前而歌曰風蕭々兮易水寒壯士一去兮不復還復爲羽聲忼慨士皆瞋目髮盡上指冠於是荆軻就車而去終已不顧遂至秦持千金之資幣物厚遺秦王寵臣中庶子蒙嘉嘉爲先言於秦王曰燕王誠振怖大王之威不敢舉兵以逆軍吏願舉國爲內臣比諸侯之列給貢職如郡縣而得奉守先王之宗廟恐懼不敢自陳謹斬樊於期之頭及獻燕督亢之地圖函封燕王拜送于庭使使以聞大王唯大王命之秦王聞之大喜乃朝服設九賓見燕使者咸陽宮荆軻奉樊於期頭函而秦舞陽奉地圖匣以次進至陛秦舞陽色變振恐羣臣怪之荆軻顧笑舞陽進謝曰北蕃蠻夷之鄙人未嘗見天子故振慴願大王少假

借之使得畢使於前秦王謂軻曰取舞陽所持地圖軻既取圖奏之秦王發圖圖窮而匕首見因左手把秦王之袖而右手持匕首揕之未至身秦王驚自引而起袖絕拔劍劍長操其室時惶急劍堅故不可立拔荊軻逐秦王秦王環柱而走羣臣皆愕卒起不意盡失其度而秦法羣臣侍殿上者不得持尺寸之兵諸郎中執兵皆陳殿下非有詔召不得上方急時不及召下兵以故荊軻乃逐秦王而卒惶急無以擊軻而以手共搏之是時侍醫夏無且以其所奉藥囊提荊軻也秦王方環柱走卒惶急不知所爲左右乃曰王負劍負劍遂拔以擊荊軻斷其左股荊軻廢乃引其匕首以擿秦王不中中銅柱秦王復擊軻軻被八創軻自知事不就倚柱而笑箕倨以罵曰事所以不成者以欲生劫之必得約契以報太子也於是左右既前殺軻秦王不怡者良久

司馬遷の文は情感的文辭なり。發する所精彩一世に絕す。若し歷史の上より之を觀れば情感的史筆は多少の弊なくんばあらず。然れども遷が史記は甚しく其弊に陷らず。筆勢の逃るところ往々支那文學の特性なる誇張に失したるところは則ち是あり。感慨を寄せたる所は則ち是あり。然れども依怙偏頗の筆致は終に之を見ざるなり。其憤の發する所或は遊俠貨値二傳となれりと雖とも

班固の傳

是又司馬遷が性格を窺ふべき好材料に外ならざるなり。

遷や系統的史家にして父業を紹ぎ、其末終に奇禍を獲たり。是を東漢の班固に見るに何ぞ其一生の能く相似たるや。固の父を班彪と云ふ。光武の世の人なり。彪の人たる、才高うして述作を好み、遂に心を史籍の間に專らにす。司馬遷史記を著はし、太初より以後闕て錄せず。後の好事者頗る或は時事を綴集す。然れども多く鄙俗にして以て其書を埋ぐに足らず。彪乃ち前史の遺事を繼採し、傍ら異聞を貫き、後傳數十篇を作り、前史を斟酌して得失を覈正せり。彼が史記を批評したるの言を觀るに之を遷に比して眼識の頗る劣れるものあり。固や彪の子にして父既に編史の業を親らにす、素既にあり。固字は孟堅、九流百家の言窮究せざるはなしと云ふ。其學ぶ所常師なく、章句を事とせず、學ぶ所其大義に通ずるにあり。父卒して鄉里に歸る。彪の編史や猶未だ成らずして詳ならざる所あり。乃ち潛精研思、其業を就さんと欲す。既にして人の上書するものあり、固國史を私作すと。詔して郡に下し、固を收め京兆の獄に繫ぎ、盡く其家の書を取る。固の弟超上書して具に固の著述する所の意を言ふ。而して郡亦

其書を上る。帝顧宗甚だ之を奇とし、召して校書部に詣らしめ、蘭臺令史に除し、前の睢陽令陳宗、長陵令尹司隷從事孟異と共に世祖本紀を成し、遷て郎となり、秘書を典校す。固又功臣平林新市公孫述の事を撰みて列傳載記二十八篇を作て之を奏す。帝乃ち復前の著す所の書を成さしむ。固以爲く、漢、堯運を紹ぎ以て帝業を建つ、六世に至て史臣乃ち功德を追述して私に本紀を作り百王の末刪を秦項の列に編し、太初以後闕て錄せずと。即ち司馬遷の史記を以て猶足らず、備はらずとなし、前記を採撰し、所聞を綴集し、漢書と名け、元を高祖に起し、孝平王莽の誅に終る、十有二世二百三十年、其行事を綜べ、傍ら五經を貫き、上下洽く通じて春秋考紀表志傳を爲くる、凡そ百篇固、永平中始めて詔を受けてより潛精積思二十餘年、建初中に至て乃ち成る。肅宗の位に即くや、性文章を好む、固愈幸を得たり。數ば書を禁中に讀み、或は連日夜に繼ぎ、巡狩每に輒ち賦頌を獻上す。朝廷大議あれば使して前に辯論せしめ、賞賜恩寵甚だ渥し。固自ら二世の才術を以て位郎に過ぎざるを以て心平ならず。乃ち賓戲を作て以て自ら通ず。後遷て玄武司馬となる。永元の初大將軍竇憲出でゝ匈奴を征す。固を以て中護軍となし、

與に參議せしむ。北單于漢軍の出づるを聞て使をして欵を居延塞に通ぜしめ、呼韓邪の故事を脩め天子に朝見せんと欲し大使を請ふ。憲、固をして中郎將の事を行はしめ、數百騎を將て虜使と俱に出づ。居延塞之を迎へ、匈奴掩破の北庭に會す。固、私渠海に至り、虜中の亂を聞て引て還る。竇憲敗するに及で固先づ坐して官を免す。固諸子を敎學せず、諸子多く法度に遵はず、吏人之を苦む。初め洛陽の令种競嘗て行く、固の奴其車騎を干す。吏之を推呼す。奴醉ふて罵る。競大に怒ると雖とも憲を恐れて敢て發せず、心之を銜む。竇憲の賓客皆逃考せらるゝに及で競此に因て固を捕繫す。固遂に獄中に死す。時に年六十一。詔して以て競を讁責し、主者の吏を罪に抵す。固著はす所典引賓戲應讓詩賦銘誄頌書文記論議六言等凡そ四十一篇と云ふ。

固を以て遷に比す。記事の確實にして躰裁の具備せるは固や優れり。然れども史論家として之を觀るに固や到底遷の敵手に非ず。前漢書は殆ど是れ剽竊糊塗の書篇のみ。唯其偏頗なく確實に公平なるに至ては固より能く史家たるの本分を知る。然れども其文辭に至ては豈歲を同うして語るべけんや。遷の

筆は盡く活く、固に至ては木偶人のみ。遷か文辭の含蓄多くして趣味津々たるに似ずして固の筆や盡く是れ露骨なり、沒趣味なり。然れども前漢の史として史記以後の事蹟を觀んと欲すれば固の漢書を他にして之を索むべきなし。固の功豈沒すべけんや。

遷固の史有てより後代之に紹ぐもの多く、支那歷朝を通じて殆んど史を有せざるなし。後代陳壽の三國志、歐陽脩の五代史の如きは名篇として世多く之を推重す。

漢代の辭賦

三、司馬相如

漢代の辭賦。本傳。其文辭。屈原と相如。漢代の作賦家。

屈原先づ唱へ、宋玉唐勒の徒之に和したる賦は漢興て又盛んなりき。莊忌賈誼、枚乘の輩作賦の人として嘖々たりき。然れども武帝前代の餘烈に依り、長策を振て宇內を御するに當てや文物の隆盛亦一時並びなかりき。是時に當て司馬相如を出して以て漢代の賦を代表せしむるに至りたるもの洵に偶然に非るなり。

本傳

彼が自敍傳に據るに、司馬相如字は長卿、蜀郡成都の人なり。少時好で書を讀み、擊劍を學ぶ。既に學ぶ所ありて、藺相如の人となりを慕ひ、名を相如と更め、財多きを以て郎に拜せられ、孝景帝に事へて武騎常侍となりぬ。然れども其好む所に非るなり。景帝はもと辭賦を好まざるの人。偶ま梁孝王來朝し、遊說の士齊人鄒陽淮南の枚乘、吳の嚴忌夫子(莊忌)の徒を從ふ。相如見て之を說び、病に因て自ら免じ、梁に客遊し、諸侯の遊士と居ることを得たり。數歲にして子虛賦を著す。既にして梁孝王薨ず。相如歸て家貧に、以て自ら業とするなし。もと臨邛令王吉と相善し。吉曰く、長卿久く官遊し遂げずして困み來て我を過ぐと。是に於て相如往て都亭に舍す。臨邛の令詐て恭敬をなし日に往て相如に朝す。相如初は倘て之を見る。後病と稱し、從者をして吉を謝せしむ。吉愈々益々謹肅す。臨邛に富人多し。卓王孫なるものあり、僮客八百人、程鄭も亦數百人、乃ち相謂て曰く、令に貴客ありと。具を爲て之を召し、幷に令を召す。令既に至り、卓氏の客は百を以て數ふ。日中に至て司馬相如を請ふ。相如病で臨む能はざるを

以て謝す。臨邛の令敢て食を嘗めず、身自ら相如を迎ふ。相如已むを得ざるまねして強て往く。一坐盡く傾く。酒酣にして臨邛の令前で琴を奏して曰く、竊に聞く長卿之を好むと、願くば以て自ら娛めと。相如再辭し、爲に鼓する一再行。是時に卓王孫に女あり、文君と云ふ。新に寡にして音を好む。故に相如詐て令と相重じ、琴心を以て之を挑む。相如時に車騎を從へて雍容閒雅甚だ都なり。卓氏に飲み琴を弄するに及で文君竊に戶より窺ひ、心說て之を好む、而して其對偶を得ざるを恐る。既に罷む、相如乃ち侍人をして重く文君の侍者に賜ふて殷勤を通ぜしむ。文君夜亡げて相如に奔る。相如與に馳せて成都に歸れば家空しく徒らに四壁の立つのみ。卓王孫大に怒て曰く、女不材我れ殺すに忍びず、然れども一錢だも分たざるなりと。人或は王孫に謂ふものあり、王孫終に聽かず。文君之を久うして樂まず。相如に謂て曰く、たゞ俱に臨邛に如き、昆弟に從て假貸すれば猶以て生を爲すに足らん、何ぞ自ら苦で此の如きに至らんと。相如與に俱に臨邛に之き、盡く車騎を賣て酒舍を買ひ、文君をして壚に當らしめ、身自ら犢鼻褌を着けて庸保と雜作し、器を市中に滌く。卓王孫之を耻ぢ、爲に門を杜ぢて出でず。昆弟諸公更々王孫に謂て曰く、一男兩女あり、足らざる所のものは財に非るなり、今文君既に身を司馬長卿に失ず、長卿游に倦む、貧なりと雖とも、其人材依るに足るなり、且又令の各、奈何ぞ相辱むる此の如きやと。卓王孫已むことを得ずして文君に僮百人錢百万及び其嫁時の衣被財物を分與す。文君乃ち相如と成都に歸り、田宅を買て富人となる。居ること久うして蜀人楊得意なるもの狗監にして武帝に侍す。帝子虛賦を讀で之を善として曰く、朕獨り此人と時を同うするを得ざるを恨むと。得意曰く、臣の邑人司馬相如自ら言ふ此賦を爲くると。帝驚き乃ち相如を召し問ふ。相如曰く、是あり、然れども此れ乃ち諸侯の事、未だ觀るに足らず、請ふ天子遊獵の賦を爲らんと。帝尙書をして筆札を給せしむ、相如子虛烏有先生、亡是公の三人を設りて辭となし、因て天子諸侯の苑囿を推し、其卒章は之を節儉に歸し、因て以て風諫し、之を天子に奏す。天子大に說ぶ。相如是に於て郎となり、居ること數歲、唐蒙西南の夷夜郎僰中を略通せんとし巴蜀の吏卒千人を發す。郡又多く爲に轉漕万餘人を發し、軍興法を用ひて其渠率を誅す。巴蜀の民大に驚き恐る。帝聞て相如を遣はして唐蒙等を責めし

め、因て巴蜀の民に諭告する所あり。上意に非ざるを以てす。相如の巴蜀檄とは是れなり。相如還り報ず。唐蒙已に夜郎を略通し、因て西南夷の道を通じ、巴蜀廣漢の卒を發し、數万人を役して道を治むる二歳にして成らず。士卒多く死し、費は億萬を以て計る。蜀の民及び漢の事を用ふるもの多く其不便を言ふ。是時功莋の君長、南夷の漢と通じ賞賜を得る多々なるを聞き自ら内臣妾となり吏を請ふて南夷の如くならんことを欲す。帝相如に問ふ。相如曰く、功莋冉駹は蜀に近くして道通じ易し、異時嘗て通じて郡縣となる、漢興るに至て罷む今誠に通じて爲に縣を置けば南夷に愈れりと。帝相如を拜して中郎將となす。往て蜀に至る。太守以下郊迎し、縣令弩矢を負ふ先驅す。是に於て卓王孫臨邛諸公皆門下に因て牛酒を献じて以て驩を結ぶ。卓王孫喟然として歎じて自ら女をして司馬長卿に尚せしむるを以て晩きとなし、厚く其女に分與し、財、男と等からしむ。相如功を奏して歸る。其後人上書して言ふものあり。相如使する時金を受くと。居ること歳餘にして復召されて郎となる。相如人となり口吃にして善く書を著はす。常に消渴病あり。卓氏と婚して財に饒かなり。故に其

官に事ふるも未だ嘗て肯て公卿國家の事に與らず。常に病と稱し閒居して官爵を慕はず。其後屢賦を上る。相如死するや、帝遺書を索めて封禪文を獲たり。其後五歳にして帝始めて后土を祭り、八年にして遂に中岳に禮し、太山に封じ、梁甫に至り、肅然に禪すと云ふ。

漢書藝文志に依れば司馬相如の賦二十九篇とあり。蓋し相如は屈原の餘流を汲むと雖とも其用ふる所の辭句原に過ぎて頗る侈麗にして險怪、屹崒聱牙、殆ど讀むに苦むものあり。云ふ所や浮漫にして誇大、其山澤を形容するが如きに至ては殆どあらゆる辭句を用ひて之を誇張す。彼の雲夢や楚の七澤中特に小々たるものと云ふ。然れども方九百里、其中に山あり、其山則巆紆鄋鬱、隆崇律崒、岑崟參差、日月蔽虧、交錯糾紛、上干青雲、罷池陂陁、下屬江河、其土則丹青赭堊、雌黃白坿、錫、碧金銀、衆色炫燿、照爛龍鱗、其石則赤玉玫瑰、琳珉昆吾、碱玏玄厲、礪石武夫と稱する子虛あり。烏有先生に至ては之に異り、且齊東陼鉅海、南有瑯琊、觀乎成山、射乎之罘、浮勃海、遊孟諸、邪與肅愼爲鄰、右以渤谷爲界、秋田乎青丘、彷徨乎海内、吞若雲夢者八九、其於胷中曾不芥蔕と大言す。然れども猶未だ大ならず、彼の亡是公の言

を聽け。君未觀夫巨麗也、獨不聞天子之上林乎、左蒼梧、右西極、丹水更其南、紫淵徑其北、終始鮦滻出入涇渭、酆鎬潦潏、紆餘委蛇、經營其內、蕩々乎八川分流、相背異態、東西南北馳騖往來、出乎椒丘之闕、行乎洲淤之浦、徑乎桂林之中、過乎泱莽之野、汩乎混流、順阿而下、赴隘陿之口、觸穹石、激堆埼、沸乎暴怒、洶涌彭湃、滂乎沛然、偪側泌瀄、橫流逆折、轉騰澈冽、澎濞沆漭、穹隆雲橈、宛潭膠盭、蹉跎趨浥、涖々下瀨、批巖衝擁、奔揚滯沛、臨坻注壑、瀺灂瀄瀉、沉々隱々、砰礚訇磕、潏々淵々、洑潏鼎沸、馳波跳沫、汩濫漂疾、而浮弱水兮、抗絕浮渚、涉流沙、奄息恝極、汜濫水嵕兮、使靈媧鼓琴而舞馮夷、時若曖々將混濁兮、召屏翳、誅風伯、刑雨師、西望崑崙之軋沕荒忽兮、直徑馳乎三危、排閶闔而入帝宮兮、載玉女而與之歸、登閬風而遙集兮、亢烏騰而壹止、低徊陰山翔以紆曲兮、壯觀壯觀。

何ぞ其辭句の豐富にして結構の壯大なるや。然れども屈原の冷艶にして悲凄、怨悱して亂せざるが如きに至ては、遂に司馬相如に於て之を見ざるなり。屈原は能く思想界激烈なりし先秦に於ける南方文學中の賦家を代表す。相如は自から訓詁聚拾を務めたる漢代の賦家たるに愧ぢず。且つ屈原と相如を取て其人物を比せんか、其人物の異るか如く二者の賦又異れり。君に忠に國を愛して

屈原と相如

徐らざる屈原は文君を偷で奔りたる司馬相如と固より其性格を異にす。獨り其性格を異にするのみに非ず、時勢異に境遇均しからず。賦の質に於て相同じからざるは固より論を待たざるなり。後人相如を評して曰く、相如、虛辭濫說多しと雖とも然も其歸を要するに之を節儉に引く此れ亦詩の風諫と何ぞ異らんと。彼の賦は誇張斯くの如く浮漫斯くの如しと雖とも末段諷する所あり。然れども楊雄が所謂却て天子をして飄々雲氣を凌ぐの意あらしむるもの、終に諷諫の本旨を達し得ざるなり。靡麗の賦、百を勸めて一を風す、猶鄭衛の聲を聽せ曲終て雅を奏するが如し、已に諷ならずやと云へるものは豈信ならずや。

賦の質に於て原と相如と相異るのみならず、其辭を用ふるに於ても兩者異れり。意よりは文を主とし、內容より外形を尙みたる相如の辭の侈麗にして原に過ぎたるは既に是を云へり。屈原の清楚にして玲瓏なるは相如に於て之を見ず。相如は南方思潮を承くと雖とも又獨人たる性格を有す。純乎たる南人種たる屈原の詞調は獨人たる性格を混ずる相如の詞采と遙に其觀を異にす。情感的なる屈原の意長く奥盡きざるが如きは豈險怪なる相如の意短くして言浮濫な

るものと其類を同うすべきならんや。唯それ辭句に富み、多く草木禽獸の名を列ぬるに至ては原や相如や俱に豐なりとす。

然れども相如の賦を作る、縱横自在にして筆端雲涌き巖撰くが如きものあり。作賦の技倆に至ては後世殆ど追及するものなしと云ふも虛誕ならんや。唯後の之を倣ふもの終に流れて六朝の靡麗となり、其末掉はざるに至るもの洵に已むを得ざるなり。方孝孺曰く、屈原の離騷は世を憂ひ、成を憤り、天地を呼び鬼神を目す、其語長短舒縱抑揚闔闢、辨說詭異、雜錯して章を成す、皆至性の忠厚介潔、風人の義を得たるに出で、拘々筆を執り思を凝して之を爲すに非るなり、其徒に至てやゝ師意を失ひ淫靡に流る、而して相如雄また雄て之を校し、窮幽極遠、艱深の字を搜輯し、積累して以て句を成す、其意數十言に過ぎずして衍して浮漫瑰怪の辭を爲くり、多きは數千言に至る、然れども其道に合ふものを求むるに至ては片言を欲するも而も得べからざるなり、後の學者相襲倣してより特り辭賦の然るのみならず、文に於ても亦然り、晉宋以後に迨ては萎弱淺陋また論ずべからず、人皆以て六朝の過となす、而も安ぞ實は相如の徒其禍を首むるなるを知らんやと。

漢代の作賦家

相如はそれ始めて賦を作るものなるか。此評やゝ酷に失すと雖とも亦庶幾いかな。

藝文志載する所に依れば相如と前後して賦は莊忌に二十四篇あり、枚乘に九篇あり、淮南王に八十二篇あり、淮南王羣臣に四十四篇あり、太常蓼侯孔臧に二十篇あり、陽丘侯劉隘に十九篇あり、吾丘壽王に十五篇あり、枚臣に百二十篇あり、常侍郎莊怨奇奇に十一篇あり、嚴助に三十五篇あり、宗正劉辟彊に八篇あり、司馬遷に八篇あり、郎中臣嬰齊に十篇あり、臣說に九篇あり、臣吾に十八篇あり、給事黃門侍郎李息に九篇あり、楊雄に十二篇あり、待詔馮商に九篇あり。其餘載するもの尠からず。東漢に至ては班彪、杜篤、班固、禰衡、張衡、蔡邕の徒皆辭賦の作を以て聞ゆ。漢代に於ける辭賦の盛行以て見るべきなり。反言すれば南方文學は北方文學と相並び相混して行はれたるなり。

四、詩と樂府

武帝時代の文學。四百。五百。七百。樂府

武帝時代の文學

詩三百篇既に遠し。春秋戰國以降後代に傳はるもの荆軻に易水歌あり、項羽に虞美人歌あり、漢高祖に大風歌あり。武帝一代の英主を以て天下に君臨し、太倉の粟紅腐して食ふべからざるに至れる前代の富厚を承け、四方を經略して領域を擴大す。漢代の盛なる是に至て其絶頂に達しき。帝又好で文學を奬勵し、厚く文學の士を遇す。司馬遷出で、司馬相如出で、董仲舒出で、枚乘の出たるも固より偶然に非ず。武帝も亦自ら文學を修め、其求賢良詔の如き、其瓠子歌の如き、其秋風辭の如き後世傳へて妙品と稱す。漢代に於て詩運の此に開けたるもの亦要するに時代の然らしめたるなり。然れども更に遡て漢代に於ける詩の質を觀るに又是れ南北兩文學の調和したるものに外ならず。北方の詩は南方の賦と相合して漢代の詩なるものを作り出しぬ。

四言

三百五篇の詩は三言五言以下句に長短の規なしと雖とも多くは此れ四言のみ、漢初に至り、楚元王の傳韋孟之に倣て四言の詩を作る（諷諫詩）

肅々我祖　國自豕韋　鋪衣朱紱　四牡龍旂　形弓斯征　撫寧遐荒　總齊群邦
以翼大商　迭彼大彭　勵賊維光　至于有周　歷世會同　王赧聽譖　寔絶我邦
我邦既絶　厥政斯逸　賞罰之行　非由王室　庶尹羣后　靡扶靡衛　五服崩離
宗周以墜（下略）

五言

五言に至ては古詩三百の中なきに非ずと雖とも甚だ乏し。夏歌の鬱陶乎予心、より出づとなすは未だ可ならず。蓋し楚辭の名予曰正則とあるを以て五言の濫觴となすべきなり。又以て南方文學の影響を知るべきに非ずや。武帝の世に至て始て五言の躰あり。李陵蘇武との贈答是れなり。五言是より盛なり。

與蘇武詩三首　李陵

良時不再至　離別在須臾　屏營衢路側　執手野踟躕　仰視浮雲馳　俄忽互相除　風波一失所　各在天一隅　長當從此別　且復立斯須　欲因晨風發　送子以腹軀

嘉會難再遇　三載爲千秋　臨河濯長纓　念子悵悠々　遠望悲風至　對酒不能酬　行人懷往路　何以慰我愁　獨有盈觴酒　與子結綢繆

攜手上河梁　游子暮何之　徘徊蹊路側　悵々不能辭　行人難久留　各言長相思　安知非日月　陛望自有時　努力崇明德　皓首以爲期

詩四首

蘇武

骨肉緣枝葉　結交亦相因　四海皆兄弟　誰爲行路人　況我連枝樹　與子同一身　昔爲鴛與鴦　今爲參與辰　昔者常相近　邈若胡與秦　惟念當離別　恩情日以新　鹿鳴思野草　可以喻嘉賓　我有一罇酒　欲以贈遠人　願子留斟酌　叙此平生親

黃鵠一遠別　千里顧徘徊　胡馬失其群　思心常依依　何況双飛龍　羽翼臨當乖　幸有絃歌曲　可以喻中懷　請爲游子吟　泠泠一何悲　絲竹厲清聲　慷慨有餘哀　長歌正激烈　中心愴以摧　欲展清商曲　念子不能歸　俛仰內傷心　淚下不可揮　願爲双黃鵠　送子俱遠飛

結髮爲夫妻　恩愛兩不疑　歡娛在今夕　燕婉及良時　征夫懷往路　起視夜何其　參辰皆已沒　去々從此辭　行役在戰場　相見未有期　握手一長歎淚爲生別滋　努力愛春花　莫忘歡樂時　生當復來歸　死當長相思

燭々晨明月　馥馥我蘭芳　芬馨良夜發　隨風聞我堂　征夫懷遠路　遊子戀故鄉　寒冬十二月　晨起踐殿霜　俯觀江漢流　仰視浮雲翔　良友遠離別各在天一方　山海隔中州　相去悠且長　嘉會難兩遇　歡樂殊未央　願君崇令德　隨時愛景光

何ぞ其情の痛切にして辭の眞摯なるや。蘇李贈酬詩を他にして古詩十九首なるもの亦漢代の產と稱せらる。蓋し一人一時の作に非ざるべしと雖とも未だ其作者を詳にせず。但し第一首は枚乘の作とも稱せられ、又玉臺新咏には中幾章を以て枚乘の作る所となせり。

古詩十九(餘三)

行々重行々　與君生別離　相去萬餘里　各在天一涯　道路阻且長　會面安可知　胡馬依北風　越鳥巢南枝　相去日已遠　衣帶日已緩　浮雲蔽白日游子不顧返　思君令人老　歲月忽已晚　棄捐勿復道　努力加餐飯

青々河畔草　鬱々園中柳　盈々樓上女　皎々當窗牖　娥々紅粉妝　纖々出素手　昔爲娼家女　今爲蕩子婦　蕩子行不歸　空牀難獨守

青々陵上柏　磊々澗中石　人生天地間　忽如遠行客　斗酒相娛樂　聊厚不爲薄　驅車策駑馬　遊戲宛與洛　洛中何鬱々　冠帶自相索　長衢羅夾巷

七言

樂府

王侯多第宅　兩宮遙相望　双闕百餘尺　極宴娛心意　戚々何所迫

洵に國風の餘韻ありと謂ふべきなり。故に評者以て五言の詩經と云ふ。

武帝の元封三年柏梁臺成る。群臣の詩を能くするものをして侍坐せしめ、武帝首句を賦して曰く日月星辰和四時と。梁王襄之に繼で曰く駿觀四馬從梁來と襄よりして下作るもの二十四人、東方朔に至て止む。柏梁体なるものは即ち是にして後世七言の始と稱せらる。聯句の体も亦此に始まる。

樂府はもと詩と同じ。詩は皆以て樂に協はすべし。所謂樂は聖人の天地を感じ神明に通じ万民を安じ性類を成す所以のものなり。雅頌の興りてよりも衰亂を承くる所の音猶在り。是を淫過凶嫚の聲と謂ふ。爲に禁を設く。世衰へ、民散じ、正聲を變亂す、是に於て樂官師瞽其器を抱て奔り、或は諸侯に適き、或は河海に入る。春秋の時陳公子完齊に奔る。故に陳舜の後招樂存せり。孔子の齊に適て韶を聞き三月肉の味を知らざりしは是が爲なり。漢興て樂家に魯の人制氏あり。高祖の時叔孫通、秦の樂人に因て宗廟樂を制す。高祖楚聲を樂む。故に房中祠樂(安世房中歌)あり。唐山夫人の作る所なり。後人稱して雅に近く古與中和平の音を帶ぶとなす。

大孝備矣　休德昭明　高張四縣　樂充宮庭　芬樹羽林　雲景杳冥　金支秀華　鹿施翠旌

七始華始　肅倡和聲　神來晏娭　庶幾是聽　嗣々音送　細齊人情　忽乘青玄　祀事備成　清思翊々　經緯冥々

の如きは其一例なりとす。高祖の沛を過ぐる、故人父老と相樂み、酒に醉ふて歌哀し、大風の詩を作り、沛中の僮兒百二十人をして習て之を歌はしむ。文景の間は禮官樂を習ふのみ。其始めて樂府を置きたるもの實に武帝となす。即ち郊祀の禮を定め、太一を甘泉に祠り、后土を汾陰澤中方丘に祭り、乃ち樂府を立て、詩を采り夜誦せしむ。趙代秦楚の謳あり。李延年を以て協律都尉となし、司馬相如等數十人を舉げて詩賦を造爲し、略律呂を論じ、行て八音の調に合し、十九章の歌を作り正月上辛を以て事を甘泉圜丘に用ふ。即ち樂府は宗廟郊祀の禮に用ひられたるなり。唯其詩と異るは樂府の尙ぶ所は節奏にあり。耳に和し易きにあり。然れども其詩なるものは所謂北方人種の間に生產したる三百五篇の

詩に非ず。房中祠樂は既に楚聲なりと云ふ。南方文學の辭賦は時と混和して當時の賦家の手に依りて樂府を作られたるなり。其郊祀歌十九章は練時日、帝臨、青陽、朱明、西顥、玄冥、惟泰元、天地、日出入、天馬、天門、景星、皇后、華爗々、五神、朝隴首、象載瑜、赤蛟等の目あり。詩譜に所謂煅意刻酷煉字神奇なるもの。

日出入

肅若舊典　日出入安窮　時世不與人同　故春非我春　夏非我夏　秋非我秋　冬非我冬　泊如四海之池徧觀　是邪謂何　吾知所樂　獨樂六龍　六龍之闕　使我心若　鬱黃其何不徠下

天門

天門開　狄鼓々　穆並騁　以臨饗　光夜燭　德信著　鎮寖平而鴻　長生豫　大朱涂廣　夷石爲堂　飾玉棺以鮮歌　體招搖若永望　星留徐塞隕光　昭紫幄珠煩黃　幡比翅回集　武雙飛常羊　月穆々以金波　日華耀以宣明　假清風軋忽　激長至重觴　神駿回若留放殪　冀親以肆章　函槀祉福常若期　寂漠上天知厥時　泛々滇々從高遊　殷勤此路值所求　佩正嘉言弘以昌　休嘉

研隱溢四方　專精厲意逝九閡　紛云六藝浮大海

徐禎卿曰く、漢祚の鴻朗、文章新を作こす、安世房中樂は楚聲にして溫純厚雅、孝武の樂府は壯麗宏奇なり、縉紳先生みな從て附き作る、古風に規迹すと雖とも各制度を懷く、美なるかな歌詠、漢德雍々たり、雅頌の嗣となすべし、夫の懷を興し感に觸れ、民各情あり、賢人逸士下里に呻吟し、棄妻思婦中閨に歎詠し、鼓吹軍曲を奏し、童謠閭巷に發するに及では亦十五國風の次なり、東京軌を繼ぎ大に五言を演て歌詩の聲微なり氣を含み、詞を布き質にして采ならず、七情襍遝して並に自ら悠圓なるに至ては或は間々微疵あるも終に玉を毀り難し、兩京の詩法之を伯仲の塤篪に譬ふ、其音調を成す所以なりと。郊祀歌ありてより樂府の體行はれ、五言の詩と與に盛に詠發せられ、神工の妙品を出しき。

古樂府　四首

伏馬長城窟行

青々河畔草　緜々思遠道　遠道不可思　夙昔夢見之　夢見在我傍　忽覺在他鄉　他鄉各異縣　展轉不可見　枯桑知天風　海水知天寒　入門各自媚

離肯相爲言　客從遠方來　遺我双鯉魚　呼童烹鯉魚　中有尺素書　長跪讀素書　書中意何如　上有加餐食　下有長相憶

君子行

君子防未然　不處嫌疑間　瓜田不納履　李下不整冠　姨叔不親授　長幼不比肩　勞謙得其極　和光甚獨難　周公下白屋　吐哺不及餐　一沐三握髮　後世稱聖賢

傷歌行

昭々素明月　晖光燭我牀　憂人不能寐　耿々夜何長　微風次閨闥　羅幃自飄颻　攬衣曳長帶　屢屢下高堂　東西安所之　徘徊以彷徨　春鳥翻南飛　翩々獨翺翔　悲聲命儔匹　哀鳴傷我腸　感物懷所思　泣涕忽霑裳　佇立吐高吟　舒憤訴蒼穹

長歌行

青々園中葵　朝露待日晞　陽春布德澤　萬物生光輝　常恐秋節至　焜黃華葉衰　百川東到海　何時復西歸　少壯不努力　老大徒傷悲

怨歌行一篇、辭旨清凄、怨深く文綺なりと稱せらる。或は以て顏延年の作となすものあれども自ら漢代の古音あり。寧ろ文選云ふ所に從て班婕妤の所詠となすに從ふを優れりとせんか。

怨歌行　班婕妤

新製齊紈素　皎潔如霜雪　裁成合歡扇　團々似明月　出入君懷袖　動搖微風發　常恐秋節至　涼飈奪炎熱　弃損篋笥中　恩情中道絕

四愁詩四首　張衡

一思曰　我所思兮在太山　欲往從之梁父艱　側身東望涕霑翰　美人贈我金錯刀　何以報之英瓊瑤　路遠莫致倚逍遙　何爲懷憂心煩勞

二思曰　我所思兮在桂林　欲往從之湘水深　側身南望涕霑襟　美人贈我金琅玕　何以報之双玉盤　路遠莫致倚惆悵　何爲懷憂心煩傷

三思曰　我所思兮在漢陽　欲往從之隴坂長　側身西望涕霑裳　美人贈我翡翠蘭　何以報之明月珠　路遠莫致倚踟躕　何爲懷憂心煩紆

四思曰　我所思兮在雁門　欲往從之雪紛々　側身北望涕霑巾　美人贈我錦

繡段　何以報之青玉案　路遠莫致倚增歎　何爲懷憂心煩惋

爲焦仲卿妻作は支那に於て珍とすへき第一の長篇なり。其序に依れは漢末建安中廬江府の小吏焦仲卿の妻劉氏仲卿の母の忌む所となりて放たる。劉氏自ら誓て嫁せす、其家之に逼るに及で乃ち水に投して死す。仲卿之を聞て亦自ら庭樹に縊る。時人之を傷で作る所なりと云ふ。或は後世の作と稱するあるも未た首肯すへからす。

爲焦仲卿妻作

無名氏

孔雀東南飛　五里一徘徊　十三能織素　十四學裁衣　十五彈箜篌　十六誦詩書　十七爲君婦　心中常苦悲　君既爲府吏　守節情不移　賤妾留空房　相見常日稀　鷄鳴入機織　夜夜不得息　三日斷五疋　大人故嫌遲　非爲織作遲　君家婦難爲　妾不堪驅使　徒留無所施　便可白公姥　及時相遣歸　府吏得聞之　堂上啓阿母　兒已薄祿相　幸復得此婦　結髮同枕席　黃泉共爲友　共事三二年　始爾未爲久　女行無偏斜　何意致不厚　阿母謂府吏　何乃太區區　此婦無禮節　舉動自專由　吾意久懷忿　汝豈得自由　東家有賢女　自名秦羅敷　可憐體無比　阿母爲汝求　便可速遣之　遣去慎莫留　府吏長跪告　伏惟啓阿母　今若遣此婦　終老不復取　阿母得聞之　槌床便大怒　小子無所畏　何敢助婦語　吾已失恩義　會不相從許　府吏默無聲　再拜還入戶　舉言謂新婦　愜還家　吾今且報府　不久當歸還　還必相迎取　以此下心意　愼勿違我語　新婦謂府吏　勿復重紛紜　往昔初陽歲　謝家來貴門　奉時循公姥　進止敢自專　晝夜勤作息　伶仃苦辛　謂言無罪過　供養卒大恩　仍更被驅遣　何言復來還　妾有繡腰襦　葳蕤自生光　紅羅復斗帳　四角垂香囊　箱籠六七十　綠碧青絲繩　物物各自異　種種在其中　人賤物亦鄙　不足迎後人　留待作遺施　於今無會因　時時爲安慰　久久莫相忘　鷄鳴外欲曙　新婦起嚴粧　著我繡袷裙　事事四五通　足下蹈絲履　頭上玳瑁光　腰若流紈素　耳著明月璫　指如削葱根　口如含珠丹　纖纖作細步　精妙世無雙　上堂拜阿母　阿母怒不止　昔作女兒時　生小出野里　本自無教訓　愧煞貴家子　愛母錢帛多　不堪母驅使　今日還家去　念母勞家裏　劫與小姑別　淚落連

珠子　新婦初來時　小姑始扶牀　今日被驅遣　小姑如我長　勤心養公姥
好自相扶持　初七及下九　嬉戲莫相忘　出門登車去　涕落百餘行　府吏馬
在前　新婦車在後　隱隱何甸甸　俱會大道口　下馬入車中　低頭共耳語
誓不相隔卿　且暫還家去　吾今且赴府　不久當還歸　誓天不相負　新婦謂
府吏　感君區區懷　君既若見錄　不久望君來　君當作磐石　妾當作蒲葦
蒲葦紉如絲　磐石無轉移　我有親父兄　性行暴如雷　恐不任我意　逆以煎
我懷　舉手長勞勞　二情同依依　入門上家堂　進退無顏儀　阿母大摠掌
不圖子自歸　十三教汝織　十四能裁衣　十五彈箜篌　十六知禮儀　十七遣
汝嫁　謂言無誓違　汝今何罪過　不迎而自歸　蘭芝慚阿母　兒實無罪過
阿母大悲摧　還家十餘日　縣令遣媒來　云有第三郎　窈窕世無双　年始十
八九　便言多令才　阿母謂阿女　汝可去應之　阿女含淚答　蘭芝初還時
府吏見丁寧　結誓不別離　今日違情義　恐此事非奇　自可斷來信　徐徐更
謂之　阿母白媒人　貧賤有此女　始適還家門　不堪吏人婦　豈合令郎君
幸可廣問訊　不得便相許　媒人去數日　尋遣丞請還　說有蘭家女　承籍有

官宦　云有第五郎　嬌逸未有婚　遣丞爲媒人　主簿通語言　直說太守家
有此令郎君　既欲結大義　故遣來貴門　阿母謝媒人　女子先有誓　老姥豈
敢言　阿兄得聞之　悵然心中煩　舉言謂阿妹　作計何不量　先嫁得府吏
否泰如天地　足以榮汝身　不嫁義郎體　其往欲何去　蘭芝仰頭荅　理實如
兄言　謝家事夫婿　中道還兄門　處分適兄意　即得自任專　雖與附吏要
渠會永無緣　登即相許和　便可作婚姻　媒人下牀去　諾諾復爾爾　還部白
府君　下官奉使命　言談大有緣　府君得聞之　心中大歡喜　視麻復開書
便利此月內　六合正相應　良吉三十日　今已二十七　卿可去成婚　交語速
裝束　絡繹如浮雲　青雀白鵠舫　四角龍子幡　婀娜隨風轉　金車玉作輪
躑躅青驄馬　流蘇金縷鞍　齎錢三百万　皆用青絲穿　雜綵二百匹　交廣市
雜珍　從人四五百　鬱鬱登郡門　阿母謂阿女　適得府君書　明日來迎汝
何不作衣裳　莫令事不舉　阿女默無聲　手巾抆口啼　淚落便如瀉　移我琉
璃榻　出置前窓下　左手持刀尺　右手執綾羅　朝成繡裙袂　晚成單羅衫
晻晻日欲暝　愁思出門啼　府吏聞此變　因求假暫歸　未至二三里　摧藏馬

悲哀　新婦識馬聲　蹢躅相逢迎　悵然遙相望　知是故人來　舉手拍馬鞍
嗟歎使心傷　自君別我後　人事不可量　果不如先願　又非君所詳　我有親
父母　逼迫令弟兄　以我應他人　君還何所望　府吏謂新婦　賀卿得高遷
萖石方且厚　可以卒千年　蒲葦一時紉　便作旦夕間　卿當日勝貴　吾獨向
黃泉　新婦謂府吏　何意出此言　同是被逼迫　君爾妾亦然　黃泉下相見
勿違今日言　執手分道去　各入還家門　生人作死別　恨恨那可論　念與世
間辭　千萬不復全　府吏還家去　上堂拜阿母　今日大風寒　寒風摧樹木
嚴霜結庭蘭　兄今日冥冥　令母在後單　故作不良計　勿復思鬼神　命如南
山石　四體康且直　阿母得聞之　零落應聲落　汝是大家子　仕宦於臺閣
慎勿爲婦死　貴賤情何薄　東家有賢女　窈窕艷城郭　阿母爲汝求　但復在
旦夕　府吏再拜還　長歎空房中　作計乃爾立　轉頭向戶裏　漸見愁煎迫
其日牛馬嘶　新婦入青廬　奄奄黃昏後　寂寂人定初　我命絕今日　魂去尸
長留　攬裙脫絲履　舉身赴清池　府吏聞此事　心知長別離　徘徊庭樹下
自掛東南枝　兩家求合葬　合葬華山傍　東西植松柏　左右種梧桐　枝枝相

覆蓋　葉葉相交通　中有雙飛鳥　自名爲鴛鴦　仰頭相向鳴　夜夜達五更
行人駐足聽　寡婦起徬徨　多謝後世人　戒之慎勿忘

第四期　魏晉及南北朝の文學

總說

六朝。魏晉以後思想に及ぼしたる勢力。北影響。

漢室傾覆して三國となり、蜀吳魏相對峙す。魏の臣司馬氏僭して西晉となり、西晉亡びて東晉興り、之を宋に傳へ、宋より齊に傳へ、梁に傳へ、陳に傳ふ。晉南渡してより之を南朝と稱す。而して魏の後分れて東西兩魏となり、東魏、北齊に傳へ、西魏、後周に傳ふ。後周、北齊を併せて之を隋に傳ふ。是を北朝と稱す。隋、陳を滅して然して後南北混して一となる。世に六朝文學と稱するは此間に起りたるものを云へるなり。

魏、漢の後を承けて一代の文運斐然として章をなす。魏武帝一世の雄を以て兵

馬悒惚の間槊を横へて詩を賦す、其音鏗鏘たり。文帝纘で又藻思あり。其弟曹子建出でゝ魏朝文學是に依て亜く、建安の風氣開く。蓋し時代の騒亂と英風の颯爽は自から遒壯の作を出せるなり。晉代、三張二陸兩潘一左を出して文運再び開け、其間に辭典婉愜逸趣に富むもの陶潛を出して、晉朝の巨擘と稱せらる。宋の謝靈運、潛に及ばずとするも猶大家たるを失はざりき。然れども宋代以後に在ては文運衰替の世と稱せらるゝもの。尚ぶ所は巧緻纖麗に在り。風調漸く墜ち、氣韻高からず。所謂四六駢麗躰なるものも此時代に起りき。

魏晉以後思想に及ぼしたる勢力

魏晉以後に在て當時の思潮に影響したるもの、一を南方思想の產物たる道教となし、一を佛教となし、一を社會浮華の風となす。道教は權力競爭の激甚なりし當時に反抗して盛に或一派の爲に唱道せられ、所謂清談と稱し、禮を蔑し、酒を縱にし、高談放言以て自ら韜晦せしむるの徒を出しき。佛教は漢の明帝以後支那に入り、漸く之が信徒を出し、印度の僧來遊するもの少からず。佛經の翻譯も魏晉以後に行はれ、鳩摩羅什等の譯經あり。道安慧遠の如き高僧を出し、蓮社の結社となり、佛教愈盛に、南に梁武帝あり、北に宣武孝明ありて信仰の念頗る篤く、大通年間に至りては達摩の來遊となり、南北朝を通じて其間に多少の沮害ありきと雖とも代一代を經て隆盛の運に向ひき。而して魏晉南北朝の間は一方に清談虛無の風をなし、厭世の俗をなせりと雖とも他方に於ては主治者の驕奢を好むもの多く、一般に浮華侈靡の風俗を養成したりき。嘗て即位の初に在ては雉頭裘を太極殿前に焚て以て儉素を示したる西晉の武帝も世遷て侵縱となり、後宮數千常に羊車に乘り、宮人竹葉を門に挿み鹽を酒で以て之を待ち、羊車の至る所即ち留て酣宴するに至れり。東晉の孝武は酒杯を舉て長星に向ひ、長星汝に一杯の酒を勸む、世豈万年の天子あらんやと稱したるに非ずや。齊の廢帝東昏

侯は其幸する所の潘妃の爲に金を以て蓮花を爲くり地上に帖して之を步ましめて曰く、此れ步々蓮花を生ずるなりと戲れたるに非ずや。陳の後主は太子たりし時より長夜の飲をなし、位に即て未だ幾ならず、既に臨春結綺望仙閣を起す。各々高さ數十丈、連延數十間、皆沉檀を以て之を爲くり、金玉珠翠之が飾をなし、珠簾寶帳服玩瑰麗、近古未だ有らざる所と云ふ。其下には石を積で山を爲くり、水を引て池となし、花卉を雜種し、陳主臨春閣に居り、貴妃張麗華、結綺に居り、龔孔二貴嬪、望仙に居りて複道より往來す。宰相も政を親らにせず、日に文士等と後庭に侍宴す。之を狎客と謂ひ、諸貴嬪をして客と唱和せしむ。後世永く亡國の音として傳はりたる玉樹後庭花等は此曲を云へるなり。其亡ふるに至るも猶知らず。王氣は此に在り、彼れ何爲れものぞと。伎を奏し、酒を縱にし、詩を賦して輟まず。隋兵至るに及で守るもの皆醉ふ。荒淫度なきこと斯くの如し。隋の煬帝に至ては土木を好み、首として洛陽の顯仁宮を營み、江都の奇材異石を發し、又海內の嘉木異草珍禽奇獸を求めて以て苑囿に實たしめ、又濟渠を開通し、汴渠を開き、長安より江都に至るまで離宮を置くこと四十餘所、龍舟及び雜船數万艘を造りて以て遊幸の用に備ふ。西苑の周二百里、其內海を爲くる、周十餘里蓬萊方丈瀛州の諸山を爲くる、高さ百餘丈、臺觀宮殿、山上に羅絡す。海の北に渠あり。渠に臨で華麗を窮極す。宮樹凋落すれば翦綵して花葉を爲て之を綴り、沼內にも亦翦綵して荷芰菱芡を爲くり、色渝れば則ち新きものに易ふ。好で月夜を以て宮女數千騎を從へて西苑に遊び、清夜遊曲を作て馬上に之を奏す。營造巡遊虛歲なく、天下の騷師を徵し、天下の散樂を徵し、諸蕃來朝すれば百戲を端門に陳ず、絲竹を執るもの万八千人、月を終て罷む、費巨万、歲を以て常となすと云ふ。

此等の現象は當時の思想に影響して文學に多少の反應なしとせず。晉代清談を唱へたる山濤、嵇康、阮籍、阮咸、向秀、王戎、劉伶等竹林の七賢を見よ。皆老莊虛無の學を崇尙し、禮法を輕蔑し、酒を縱にし、昏酣して世事を遺落し、放達と謂ふに非ずや。劉伶に酒德頌あり、嵇康に絕交書、養生論あり。酒德頌に云はずや、

先生於是方捧瓮承槽銜杯漱醪奮箕踞枕麴藉糟無思無慮其樂陶陶兀然而醉、豁爾而醒、靜聽不聞雷霆之聲、熟視不覩泰山之形、不覺寒暑之切肌利欲之感情俯

觀万物擾々焉如江漢之戲浮萍二豪侍側焉如螺蚌之與螟蛉

又絶交書に云はずや、

吾頃學養生之術方外榮華去滋味遊心於寂寞以無爲爲貴縱無九患尚不願足下所好者又有心悶疾頃轉增篤私意自試不能堪其所不樂自卜已審若道盡途窮則已耳

と。是を六朝文學の名家に見る。其感染の又少からざる者あり。陶潛が義眞衡茅下焉以善自名と詠じたるも張華が自予及有識志不在功名盧恬竊所好文學少所經と吟じたるも皆要するに南方思想の繼承者に屬すればなり。佛教の影響は獨り淨住子の著ありしのみならず盛に思想の上に影響し文辭の上に感染する所ありき。即ち梁の沈約の四聲譜の如きは實に印度聲韻の學より起りたるものに非ずや。且つ夫れ沈約の懺悔文の如き王巾の頭陀寺碑文の如きは洵に佛教の崇信著しきものあるを見るなり。弟子沈約稽首上白諸佛衆聖の文辭を見れば何人か佛教の勢力ありしを疑はん。頭陀寺碑文には曰く、

夫幽谷無私有至斯響洪鐘虛受無來不應況法身周對規矩冥立一音稱物宮商潛運是以如來利見迦維託生王室憑五衛之軾拯溺逝川開八正之門大庇交喪於是玄關幽鍵咸而遂通遙源濬波酌而不竭行不捨之檀而施治群有唱無緣之慈而澤周萬物演勿照之明而鑒窮沙界導亡機之權而功濟塵劫時義遠矣能事畢矣然後拂衣双樹脫屣金沙惟恍惟惚不皦不昧莫擊於來復歸於無物因斯而談則捿遠大千無爲之寂不攪煩燎堅林不盡五蘊無歌大矣哉

盧山東林寺主慧遠の山西巖下般若臺精舍に設けたる白蓮社は緇素百二十有三人を集めたるものにして其間聲譽高きもの十八賢の稱あり。謝靈運一時の才學を以て江左の冠となり才を負ひ物に傲りたるも猶慧遠を見れば容を改め敬を致し白蓮社中の人たらんとして得ざりしと云ふ。虎溪三笑は世の傳ふる所、其交る所の文士は一時の精撰にして陶潛の如き亦鄭重招致せられたるも竟に反應して之を謝せりと云ふ。佛教の影響する所豈それ少々ならんや。若し夫れ六朝の華奢に至ては文辭の侈靡に與て力あり。六朝の文物は後代詩人をして今昔の感に堪えざらしめしところ、華奢侈靡の時代は自ら其文辭も流れて、絨麗となり、侈靡の風に陷らざるなし。名教廢して徒らに詞賦の流行したるも是

が爲めなり。此時に當ては文學は一種の裝飾品のみ。謝朓が鼓吹曲に云はずや、

江南佳麗地　金陵帝王州　逶迤帶綠水　迢遞起朱樓　飛甍夾馳道　垂楊蔭御溝　凝笳翼高蓋　疊鼓送華軸　獻納雲臺表　功名良可收

宋以後詩の婉麗なるものは愈纖巧となり、齊を經て梁に至て極微となりぬ。其文辭に至ても四六駢麗の調を喜び、文士之を作れり。畢竟するに漢代の辭賦流れて文弊を釀すに至りたるなりと雖とも亦時代の影響する所なかるべからず。」

權力の競爭に於て南北兩朝を分ちたると同じく、其風氣に於ても江左、河北全く異れり。而して其異るや實に北方思想か南方思想と同じからざるが如く異れり。是を畫に於て見、是を書に於て見る。兩者の趣同じからず。是を經術に見る、兩者異れり。其文學に於て之を見る。北方は雄勁にして南方は清婉なり。然れども若し夫れ是を詳に論ずれば六朝の文學は寧ろ江左の文學にして河北に至ては殆どあるなし。魏晉以後宋に在ては謝靈運、顏延之、鮑照の徒を出し、齊に在ては二百年來此時なしと稱せられたる謝朓、北山移文の作者なる孔德璋を出し、梁に在ては武帝主として文學の唱道者たり、昭明太子は文選を著し、沈約は四聲譜を作り、陳に在ては徐陵、玉臺新咏の作あり。北朝に至ては庾信、一代の文宗を以て目せらるゝと雖とも實は南人にして南方思想の承受者たるなり。

昭明太子統、其文選に序して曰く、姬漢より以來眇焉悠邈たり、時七代を更へ、數千祀を逾ゆ、詞人才子は則ち名標襲に溢れ、飛文染翰は則ち卷軸に盈つと。漢以後に於ける文士は洵に濟々たり。然れども後の學者東漢以後を稱して文八代の衰と云ふ。漢魏の間は氣韻の猶崇高なるものありきと雖とも晉以後南北朝の間は徒らに詞章の華藻を競ふて氣韻の如何を問ふに至らざりしが故なり。

六朝文學の弊は即ち此に在り。

是を要するに漢代に於て南方文學の北方文學に影響して勢力ありたるは延て六朝に至て文壇を席卷し、殆ど北方文學を傾倒して所謂六朝文學なるものを作り出したるなり。

一、建安の詞人

魏武帝。文帝。曹子建。鄭下の七子。

魏武帝

治世の能臣亂世の姦雄と評せられたる魏武帝は洵に三國第一の英雄なりけり。否寧ろ支那史上稀有の豪傑なるべし。今天下の英雄唯使君と操のみとは一片の儀式的諛辭に過ぎず。蜀主の如きはもと其敵手に非るなり。百万の衆を擁して天子を挾み諸侯に令す。誰か能く其鋒を挫くを得ん。周瑜が爲に赤壁の一敗を取りしと雖ども既に袁州の牧より入て丞相となり、冀州の牧を領して魏公に封ぜられ、銅雀臺を鄴に作り、爵を進めて王となり、天子の車服を用ひ、出入警蹕し、殆ど天子の實權を掌握せり。其感興して作る所の詩に至ては雄勁にして英氣自ら溢る。短歌行は赤壁の役月下槊を横へて賦せしと傳らるゝもの。

短歌行　魏武帝

對酒當歌　人生幾何　譬如朝露　去日苦多　慨當以慷　憂思難忘　何以解憂　唯有杜康　青々子衿　悠々我心　但爲君故　沈吟至今　呦々鹿鳴　食野之苹　我有嘉賓　鼓瑟吹笙　明々如月　何時可掇　憂從中來　不可斷絶　越陌度阡　枉用相存　契闊談讌　心念舊恩　月明星稀　烏鵲南飛　繞樹三匝　何枝可依　山不厭高　海不厭深　周公吐哺　天下歸心

文帝

苦寒行　同

北上太行山　艱哉何巍々　羊腸阪詰屈　車輪爲之摧　樹木何蕭索　北風聲正悲　熊羆對我蹲　虎豹夾路啼　谿谷少人民　雪落何霏々　延頸長歎息遠行多所懷　我心何怫鬱　思欲一東歸　水深橋梁堪　中道正徘徊　迷惑失故路　薄暮無宿棲　行々日已遠　人馬同時餓　擔囊行取薪　斧冰持作糜悲彼東山詩　悠々使我哀

其子丕、父に繼で立て丞相冀州の牧となり、遂に漢帝に迫りて其禪を受く。是を魏文帝となす。帝亦文を好み、作る所の詩文温裕美贍を以て聞ゆ。嘗て典論を著はして曰く、

蓋文章經國之大業、不朽之盛事、年壽有時而盡、榮樂止乎其身二者必至之常期、未若文章之無窮、是以古之作者寄身於翰墨、見意於篇籍、不假良史之辭、不託飛馳之勢、而聲名自傳於後、故西伯幽而演易、周旦顯而制禮、不以隱約而弗務、不以康樂而加思、夫然則古人賤尺璧而重寸陰、懼乎時之過已、而人多不強力、貧賤則懼於饑寒、富貴則流於逸樂、遂營目前之務、而遺千歲之功、日月逝於上、體貌衰乎下、忽然與万

物遷化、斯亦志士之大痛也、

と。好文の士と謂つべきなり。

魏文帝

善哉行

上山采薇　游暮苦飢　谿谷多風　霜露沾衣　野雉羣雊　猴猿相追　遠望故鄉　鬱何盈々　高山有崖　林木有枝　憂來無方　人莫之知　人生如寄　多憂何爲　今我不樂　日月如馳　湯々川流　中有行舟　隨波轉海　有似客遊　策我良馬　被我輕裘　戚馳戚驅　聊以忘憂

同

芙蓉池作

乘輦夜行遊　逍遙步西園　双渠相溉灌　嘉木繞通川　卑枝拂羽蓋　修條摩蒼天　馨風扶輪轂　飛鳥翔我前　丹霞夾明月　華星出雲間　上天垂光采　五色一何鮮　壽命非松喬　誰能得神仙　遨遊快心意　保己終百年

同

雜詩篇一

西北有浮雲　亭々如車蓋　惜哉時不遇　適與飄風會　吹我東南行　行々至吳會　吳會非我鄉　安能久留滯　棄置勿復陳　客子常畏人

曹子建

文帝の弟陳思王植に至ては一代の文宗たるに愧ぢず。梁の鍾嶸之を評して曰く、骨氣奇高、詞彩華茂、情は雅怨を兼ね、體は文質を被り、今古に桑溢し卓爾として不羣なり、嗟乎陳思の文章に於けるや人倫の周孔あり鱗羽の龍鳳あり音樂の琴笙あり女工の黼黻あるに譬ふべしと。其評や過たりと雖とも植や三曹の第一たるのみならず、建安諸子を拔きん出たるのみならず、上漢代に接して六朝文學を代表する唯一の高材なりけり。既に七步吟に其才を顯はし、又銅雀臺上に才藻の煥發せるを示せり。徐禎卿、文帝兄弟を較して曰く、曹丕の質は美媛に近く、遠く植に逮ばず、然れとも植の才整栗に堪えざるも亦憾ありと。植か詩の稱すべきは其風骨の高きにあり。其氣象の淵きにあり。是れ豈六朝文學に於て建安體の最も重ぜらるゝ故に非ずや。而して其氣格の高き所以は又實に時代の影響を受けたるなり。

曹植

公讌詩

公子敬愛客　終宴不知疲　清夜遊西園　飛蓋相追隨　明月澄清景　列宿正參差　秋蘭被長坂　朱華冒綠池　潛魚躍清波　好鳥鳴高枝　神飈接丹轂

輕輦隨風移　飄颻放志意　千秋長若斯

雜詩　同

高臺多悲風　朝日照北林　之子在万里　江湖迥且深　方舟安可極　離思故難任　孤鴈飛南遊　過庭長哀吟　翹思慕遠人　願欲託遺音　形影忽不見　惆々傷我心

轉蓬離本根　飄颻隨長風　何意迴飈擧　吹我入雲中　高々上無極　天路安可窮　類此遊客子　捐軀遠從戎　毛褐不掩形　薇藿常不充　去々莫復道　沈憂令人老

七哀詩　同

明月照高樓　流光正徘徊　上有愁思婦　悲歎有餘哀　借問歎者誰　言是宕子妻　君行踰十年　孤妾常獨棲　君若清路塵　妾若濁水泥　浮沈各異勢　會合何時諧　願爲西南風　長逝入君懷　君懷良不開　賤妾當何依

武帝父子兄弟文學を好む。從て鄴都に文士の雲集したるは自然の趨向なり。當時鄴下の七子の目あるもの孔融、陳琳、王粲、徐幹、阮瑀、應瑒、劉楨是れなり。文帝

鄴下の七子

の典論に曰く、今の文人魯國の孔融、文舉、廣陵の陳琳、孔璋、山陽の王粲、仲宣、北海の徐幹、偉長、陳留の阮瑀、元瑜、汝南の應瑒、德璉、東平の劉楨、公幹、斯の七子なるものは學に於て遺す所なく、辭に於て假る所なし、咸以爲く自ら驥騄を千里に騁せ、仰で足を齊ふして並馳す、王粲は辭賦に長じ、徐幹は時に齋氣あり、然れども粲の匹なり、粲の初征登樓槐賦征思、幹の玄猿漏巵圓扇橘賦の如き、張蔡と雖も過ぎざるなり、然れども他の文に於ては是に稱ふ能はず、琳、瑀の章表書記は今の雋なり、應瑒は和にして壯ならず、劉楨は壯にして密ならず、孔融は體氣高妙人に過ぐるものあり、然れども持論する能はず、理辭に勝たず、雜るに嘲戲を以てするに至る、其善くする所に及では揚班が備なりと。蔚蹙運、又此等諸子を評して曰く、王粲は家もと秦川貴公の子孫、亂に遭ふて流寓し、自ら傷み情多し、陳琳は袁本初が書記の故に喪亂の事を述ぶる多し、徐幹は少ふして官情なし、箕潁の心事あり、故に世に仕へて素辭多し、劉楨は卓犖たる偏人、而して文最も氣あり、得る所頗る經奇、應瑒は汝潁の士、世故に流離す、頗る飄海の歎あり、阮瑀は書記の任を管す故に優渥の言ありと。若し此等諸子の尤なるものを拔けばそれ王粲と劉楨か。談藝錄に

云ふ、漢魏の交、文人特に茂し、然れども衰世叔運終に粹才鮮し、孔融懸名高く諸子に列す、臨終の詩を視るに大に銘箴の語に類するのみ、應瑒巧思逶迤たり、之を靡々に失す、休璉、百一微にして能く自ら振ふ、然れども媚に傷らる、仲宣は流客慷慨西京を懷ふあるの餘は爾すべきもの鮮し、陳琳は意氣鏗鏘たり、風人の度に非ず、阮生、優緩餘あり、劉楨、雄角亜隅、割曳綴懸すれば並に稱すべしと。又參考するに足れり。蓋建安の作は全く氣象にあり尋枝摘葉すべからずと後人の云へるは評し得て甚だ宜し。建安は漢の年號にして此等鄴下の詞士の體を稱するの語なり。

雜詩　王粲

日暮游西園　冀寫憂思情　曲池揚素波　列樹敷丹榮　上有特棲鳥　懷春向我鳴　褰裳欲從之　路險不得征　徘徊不能去　佇立望爾形　風飈揚塵起　白日忽已冥　迴身入空房　託夢通精誠　人欲天不違　何懼不合并

贈從弟詩一　劉楨

汎々東流水　磷々水中石　蘋藻生其涯　華葉紛擾溺　采之薦宗廟　可以羞嘉客　豈無園中葵　懿此出深澤

侍五官中郎將建章臺集詩　應瑒

朝鴈鳴雲中　音響一何哀　問子遊何鄉　哉翼正徘徊　言我塞門來　將就衡陽棲　往春翔北土　今冬客南涯　遠行裳霜雪　毛羽日摧頹　常恐傷肌骨　身隕沈黃泥　簡珠墮沙石　何能中自諧　欲因雲雨會　湿翼陵高梯　良遇不可值　仲眉路何階　公子敬愛客　樂飲不知疲　和顏既以暢　乃肯顧細微　贈詩見存慰　小子非所宜　爲且極歡情　不醉其無歸　凡百敬爾位　以副飢渴懷

二、陶淵明

阮籍。太康體。淵明の傳。其性格。其詩。其文章

建安の風力は晉代に至て阮籍を出して之を繼承せしめ、其詠懷の作は極めて高古の稱あり。阮籍は清談の徒、老莊虛無の說は深く其詩文に影響する所あり。雕蟲の功なくして性靈を陶し幽思を發す。建安後の高手と云ふべきなり。

詠懷詩　阮籍

夜中不能寐　起坐彈鳴琴　薄帷鑒明月　清風吹我襟　孤鴻號外野　翔鳥鳴北林　徘徊將何見　憂思獨傷心

天馬出西北　由來從東道　春秋非有託　富貴焉常保　清露被皐蘭　凝霜霑野草　朝爲媚少年　夕暮成醜老　自非王子晉　誰能常美好

籍と相並で嵇康あり。籍に比して遜色ありと雖ども清遠の骨あり。又清談の徒なり。籍の大人先生傳、康の養生論の如きは能く清談者流の意を表白するものにして文辭亦之に適へり。

太康體

雜詩　嵇康

微風清扇　雲氣四除　皎々亮月　麗于高隅　興命公子　携手同車　龍驥翼々　揚鑣踟躕　肅々宵征　造我友廬　光燈吐輝　華幔長舒　懽觴酌醴　神鼎烹魚　絃超子野　歌過綿駒　流詠太素　俯讚玄虛　孰克英賢　與爾剖符

太康中に至て傅玄及び三張二陸兩潘一左あり。張華、張載、張協、陸機、陸雲、潘岳、潘尼、左思を云へるなり。陸機は太康中の英と稱せらる。而して機と相伍すべきものはそれ左思なるべきか。嵇羽は晉人陶淵明阮嗣宗籍を舍くの外惟左太沖(思)一時に高出す、陸士衡(機)は獨り諸公の下に在りと評し、鍾嶸は左思、陸機より野なれども潘岳より深しと稱す。其觀る所に於て兩者異れりと雖ども相比肩すべきか。蓋し太康の體は詩風一變したる處。時勢與て力あり。亦一觀を要すべきなり。

招隱詩　陸機

明發心不寐　振衣聊躑躅　躑躅欲安之　幽人在浚谷　朝采南澗藻　夕息西山足　輕條象雲擕　密葉成翠幄　激楚佇蘭林　回芳薄秀木　山溜何冷冷　飛泉漱鳴玉　哀音附靈波　頹巒赴曾曲　至樂非有假　安事澆淳樸　富貴苟難圖　稅駕從所欲

雜詩　左思

秋風何冽々　白露爲朝霜　柔條旦夕勁　綠葉日夜黃　明月出雲崖　皦々流素光　披軒臨前庭　嘆々晨鴈翔　商志局四海　塊然守獨空堂　壯齒不恒居　歲暮常慨慷

淵明の傳

建安の風骨漸く微ならんとし、六朝排偶の弊は既に漸く成れり。渡江後に在ては劉琨に感恨の詞多く、張協に風流暢達の稱あり。然れども是を要するに建安以後詩運日に漸く微なるの歎を免れず。獨り晉末に至て、冲澹の格調を以て清高の氣韻を歌ひ、都て性情に適するの神品を出せる陶淵明あり。詩風を既に倒れんとするに回せり。是れ豈六朝文學中に在て最も精彩ある奇觀に非ずや。

陶潛字は淵明、潯陽柴桑の人なり。淵明少ふして高趣あり。博學能く文を屬す。閑靜にして言少く、榮利を慕はず、好で書を讀み、甚だ解するを求めず。會意ある毎に欣然として食を忘る。性酒を嗜む。而して家貧にして恒に得ることを能はず。親舊酒を置て之れを招けば造り飲して輒ち盡す。期する處必醉にあり。既に醉ふて退く、曾て去留に懦情ならず。環堵蕭然風日を蔽はず。短褐穿結簞瓢屢空し、而も晏如たり。親老て家貧なるを以て起て州の祭酒たり。吏職に堪へずして僅にして自ら解き歸る。後鎮軍建威參軍となり、又た彭澤令となる。歲終に郡督郵を遣はして縣に至らしむ。吏請ふて曰く、應に束帶して之を見るべしと。潛歎じて曰く、我豈能く五斗米の爲に腰を折て鄉里の小兒に向はんやと。即日綬を解て職を去り、歸去來を賦す。人となり音律を解せず。而して無絃琴一張を蓄へ、酒適する毎に輒ち撫弄して以て其意を寄す。貴賤造れる時酒あれば輒ち設け、淵明若し先づ醉へば便ち客に語て曰く、我れ醉て眠らんと欲す、卿去るべしと。其眞率此の如し。時に周續之、廬山に入て釋惠遠に事へ、彭城の劉遺民亦迹を匡山に遁る。淵明又徵命に應せず。之れを潯陽の三隱と稱ふ。宋代王業漸く隆とならんとするを見、復肯て仕へず。元嘉四年、六十三にして卒す。世に靖節先生と號す。其作る所の五柳先生傳に贊して曰く、黔婁有言、不戚戚於貧賤、不汲汲於富貴、極其言茲若人之儔乎、酬觴賦詩以樂其志、無懷氏之民歟、葛天氏之民歟と。五柳先生は宅邊五柳樹あるを以て自から名くる所の稱なり。陶淵明集八卷あり、世に行はる。

其性格

晉宋の間老莊虛無の道を奉じ、標持して自ら高しとなせし徒多かりしと雖とも淵明か閑曠高遠なるに及ぶものなし。縱酒放逸世を厭ひ、人を罵るの屬少からざりしと雖とも淵明か質直にして天眞爛漫たるに並ぶもの稀れなり。然れども彼が性情は枯淡なるに非ず。韜晦して靜に性情を養ひ、天命の樂むべきに安

したるなり。其晩節を守て處士として一生を終りたるを見るも彼が性の忠眞にして眞摯なるを知るべきに非ずや。其眞摯なるは枯淡なるに非ず、情内に熱せんとしたる眞摯なりしなり。疑もなく淵明は南方思想の承繼者なり。彼の性は感情的なり。然れども老莊虛無の說は彼が性を鎔鑄して沖澹とならしめぬ。同じく是れ南方思想なり。屈原が情火炎々として物に觸れ事に應じ、故鄉を懷ひ衞を憶ひ、君を思ひて感情の絕頂を歌ひたるとは其の類を異にす。淵明は能く世界を達觀し、人間を達觀し、天命を知了せり。故に其自祭文に於ては云ふ、

惟此百年、夫人愛之、懼彼無成、惕日惜時、存爲世珍、沒亦見思、嗟我獨遘、曾是異茲、寵非己榮、涅豈吾緇、捽兀窮廬、酣飲賦詩、識運知命、疇能罔眷、余今斯化可以無恨、壽涉百齡、身蓋肥遁、從老得終、奚所復戀、寒暑逾邁、亡既異存、外姻晨來、良友宵奔、葬之中野、以安其魂、窀々我行、蕭々墓門、奢侈宋臣、儉笑王孫、廓分已滅、慨焉已遐、不封不樹、日月逾過、匪貴前譽、孰重後歌、人生寔難、死如之何、嗚呼哀哉、

淵明は外枯なるが如しと雖とも內は即ち熱せり。唯能く彼は抑へて自ら悟達したるなり。感士不過賦に云はずや、

著晏遐紬、人事無已有、感有味、嚼測其理、窮固窮以濟意、不委曲而累己、既甫見之非、榮豈緼袍之爲恥、誠謬會以取拙、且欣然而歸止、擁孤襟以畢歲、謝良賈於朝市、

又焉んぞ時勢の彼を感ぜしめしものあるなからんや。其作る所の詩は洵に能く彼が性情を表白し、內熱して外虛淡なるを示せり。飄然として孤鶴九皐に鳴くの趣あり。到底六朝綺麗を尙べる詩人か比すべき所に非ず。

問來使　陶潛

爾從山中來　早晩發天目　我屋南窓下　今生幾叢菊　藹藹葉已抽　秋闌氣當馥　歸去來山中　山中酒應熟

飲酒錄一　同

結廬在人境　而無車馬喧　問君何能爾　心遠地自偏　採菊東籬下　悠然見南山　山氣日夕佳　飛鳥相與還　此中有其意　欲辨已忘言

雜詩錄一　同

白日淪西河　素月出東嶺　遙々万里輝　蕩々空中景　風來入房戶　夜中枕

其文章

庸冷　氣變悟時易　不眠知夕永　欲言無予和　揮杯勸孤影　日月擲人去
有志不獲騁　念此懷悲悽　終曉不能辨

獨り詩に於てのみならず、其文辭に至ては當時の文弊を被らずして氣韻甚だ高く、歸去來分辭の如きに至ては歐陽修評して晉に文章なし惟陶淵明の歸去來分辭一篇のみと評す。蓋し晉宋以下六朝の間又た斯く如き清楚なる文辭なきなり。

陶潛

歸去來辭

歸去來分田園將蕪胡不歸既自以心爲形役奚惆悵而獨悲悟已往之不諫知來者之可追實迷途其未遠覺今是而昨非舟遙遙以輕颺風飄飄而吹衣問征夫以前路恨晨光之熹微乃瞻衡宇載欣載奔僮僕歡迎稚子候門三徑就荒松菊猶存携幼入室有酒盈罇引壺觴以自酌眄庭柯以怡顏倚南窓以寄傲審容膝之易安園日涉以成趣門雖設而常關策扶老而流憩時矯首而遐觀雲無心以出岫鳥倦飛而知還景翳翳以將入撫孤松而盤桓歸去來分請息交以絶遊世與我而相遺復駕言分焉求悅親戚之情話樂琴書以消憂農人告余以春及將有事乎西疇或命巾車或棹孤舟既窈窕以尋壑亦崎嶇而經丘木欣欣以向榮泉涓涓而始流善萬物之得時感吾生之行休已矣乎寓形宇內復幾時曷不委心任去留胡爲遑遑欲何之富貴非吾願帝鄉不可期懷良辰以孤往或植杖而耘耔登東皐以舒嘯臨清流而賦詩聊乘化以歸盡樂夫天命復奚疑

梁昭明太子、淵明を評して曰く、其文章は不群にして辭彩精拔、跌宕昭彰、獨り衆類を超え、抑揚爽朗之と與京するなし、素波を横へて彷彿し、青雲を干して直上し、時事を語れば則ち指して想ふべく、懷抱を論ずれば則ち曠にして且眞なり、貞志休まず道に安し節に苦むを以てして躬耕を以て恥となさず財無きを以て病となさざるが如きは大賢篤志道と汙隆するよりは孰ぞ能く此の如くならんやと云へるは知言と謂ふべきなり。

三　南北朝

謝靈運　顏延之　永明の體　梁　陳隋

王世懋曰く、古詩兩漢以來曹子建出でゝ始めて宏肆をなし、多く情態を生ず、此れ

謝靈運

一變なり、此より作者多く史語を入る、然れども經語を入るゝこと能はず、謝靈運出でゝ易辭莊語用を爲さゞる所なし、剪裁の妙千古宗となす、又一變なり、中間何庾工を加へ、沈宋麗を增して變態未だ極らず、七言猶間雅を以て致となすと。宋代謝靈運出でゝ建安以後の文運に又一變を起しぬ。

謝靈運は陳郡陽夏の人なり。少ふして學を好み、博く群書を覽、文章の美、江左逮ぶなし、康樂公に襲封せられ、邑二千戶を食む。性豪奢を喜び、車服鮮麗、衣裘器物多く舊制を改む。世之を目して謝康樂と云ふ。人となり偏激にして多く禮度を愆る。朝廷唯文義を以て之に處し、應實を以て相許さず。自ら謂へらく、才能權要に參する宜しと。既にして知られざるを以て常に憤々を懷く。晉氏一代始より終に至るまで竟に一家の史なきを以て靈運をして晉書を撰ばしむ。粗條流を立つ、而して書竟に就らず。韓で侍中に遷され、日夕引見賞遇甚だ厚し。靈運の詩書皆兼絶、文手を竟る每に自ら之を寫す。文帝稱して二寶となす。自ら以爲らく、名望才能、時政に應ずべしと。初めて召され便ち此を以て自から許す。既に至れば文帝唯文義を以て之に接す。上宴に侍する每に談賞するのみ。王曇首、王華、段景仁等の名位素より之に踰えずして並に任遇せらる。靈運意平ならず、多く病と稱して朝せず。終に族を以て東歸し、遊娛宴集、夜を以て晝に繼ぐ。族弟惠運何長瑜、潁川の荀雍、太山の羊璿之と文章を以て賞會し、共に山澤の遊をなす。時人之を四友と謂ふ。其山澤の遊をなすや、從者數百人、木を伐り、徑を開く、百姓驚擾す。或人其異志あるを表す。臨川の內史たるや、有司之を糾し、收へらる。靈運兵を興して逃遁し、詩を作て曰く、韓亡子房猶、秦帝魯連耻と。追討して擒にせられ、廣州に徙され、已にして棄市となりき。

鍾嶸、靈運の詩を評して曰く、興多く才高く、寓目輒ち書す、內に乏思なく、外に遺物なし其繁富宜なるかな、然れども名章迥句處々に間起し、麗典新聲絡繹として奔會す、譬へば青松の灌木を拔き白玉の座沙に映ずるが如し、未だ其高潔を貶すに足らざるなりと。蓋し宋什に至て詩に琢句雕辭の風創りしもの實に靈運等の致すところ。故に謝の詩句自ら佳麗なるものあり。所謂康樂の詩は精工、淵明の詩は質にして自然なるもの。謝が陶に及ばざる所は此にあり。建安の作は氣象にあり、靈運の詩は已に是れ首尾を徹して對句をなすもの。謝か建安諸子

に及ばざる所亦此に在り。

石壁精舍還湖中作　謝靈運

昏旦變氣候　山水含清暉　清暉能娛人　游子憺忘歸　出谷日尚早　入舟陽已微　林壑斂暝色　雲霞收夕霏　芰荷迭映蔚　蒲稗相因依　披拂趨南徑　愉悅偃東扉　慮澹物自輕　意愜理無違　寄言攝生客　試用此道推

同

南樓中望所遲客　登樓爲誰思　臨江遲來客　與我別所期　期在三五夕　圓景早已滿　佳人殊未適　即事怨睽攜　感物方悽戚　孟夏非長夜　晦明如歲隔　塔華未甚折　蘭苕已屢摘　路阻莫贈問　云何慰離析　搔首訪行人　引領冀良覿

顏延之

謝と名聲相並ぶもの是を顏延之となす。當時顏謝の稱あり。然れども顏や謝に及ばず。謝を以て元嘉の雄となし、顏は之が輔たりと云ふは適評なり。湯惠休曰く、謝の詩は芙蓉の水を出づるが如く、顏は錯彩鏤金の如しと。體裁綺密、情喻淵深、却て虛散なく、一句一字皆意を致す、又喜で古事を用ひて彌々拘束せらるるとは詩品顏を評したるの語となす。又以て其詩風を知るに足るべし。

夏夜呈從兄散騎車長沙

炎天方埃鬱　暑晏閑塵紛　獨靜瞑偶坐　臨堂對星分　側聽風薄木　遙睇月開雲　夜蟬當夏急　陰蟲先秋聞　歲候初過半　荃蕙豈久芬　屏居惻物變　暮頻抱情段　九逝非空思　七襄無成文

顏は鮑に如かず、鮑は謝に如かず。謝と顏の間に位するもの是を鮑昭となす。筆力矯健なりと雖とも徒に巧を尙で險俗の弊に陷る。

還都道中作　鮑昭

昨夜宿南陵　今旦入蘆洲　客行惜日月　崩波不可留　侵星赴早路　曉景逐前僧　鱗々夕雲起　獵々晚風遒　騰沙鬱黃霧　翻浪揚白鷗　登艦眺淮甸　拖泣望荆流　絕目盡平原　時見遠煙浮　倏悲坐還合　俄思昔兼秋　未嘗遊戶庭　安能千里遊　雖令乏古節　貽此越鄉憂

永明體

齊代永明の體は是を米の元嘉躰に比すれば其纖麗なるもの愈纖麗となれり。然れども其最も傳ふべきは謝朓にあるか。後人評して謝朓の詩全篇唐人に似

たるものありと云ふ。

京路夜發　謝朓

擾々整夜裝　肅々戒徂兩　曉星正寥落　晨光復泱漭　猶霑餘露團　稍見朝霞上　故鄉邈已負　山川修且廣　文奏方盈前　懷人去心賞　躬躬每跼蹐

贈思唯震蕩　行矣倦路長　無由稅歸鞅

謝朓の詩に對して齊代文章を以て傳ふべきは孔稚圭の北山移文なり。奇思逸趣洵に一世を靡倒すべきものありと、雖とも其文辭の頗る彫琢したるは六朝文辭の眞面目を備へてあり。

梁は南北朝間最も文運盛なるの朝。上に武帝文帝元帝あり。昭明太子は文選を撰み、劉勰は文心雕龍を著し、鍾嶸は詩品を作り、詩は艶麗を以て六朝の精華を煥發す。備文の宮體の如きは輕靡に傷られ、殊に其弊を極む。梁書文學傳に云ふ、高祖聰明にして文思區屬に光宅す、旁ら儒雅を求め、詔して異人を採る、文章の盛なる煥乎として俱に集る、御幸する所ある毎に輒ち羣臣に命じて詩を賦せしむ、其文善きものは賜ふに金帛を以てし、明庭に詣て詩頌を獻ずるもの或は引見す、其位に在るものは則ち沈約、江淹、任昉竝に文采妙絶を以てす、云々と。沈約、江淹、任昉の徒出づるに及で鏤刻愈甚しく渾厚の意全く乏しく、況や沈や聲韻に拘り、江や又摸擬に過ぐるもの、詩の變極れり。李白云ふ、梁陳以來豔藻斯に極り、沈休文(約)又尙ぶに聲律を以てすと。律格の風重ぜられて風趣終に失はる。

沈約

咏湖中鴈

白水湛春塘　旅鴈每廻翔　唼流率弱藻　斂翮帶餘霜　羣浮動輕浪　單泛逐孤光　憑飛竟不下　亂起米成行　刷羽同搖漾　一舉遙故鄉

望荆山

江淹

奉義至江漢　始知楚塞長　南關繞桐柏　西岳出魯陽　寒郊無留影　秋日懸清光　悲風搖重林　雲霞肅川張　歲晏君如何　零淚霑衣裳　玉柱空挑鬱　金樽坐含霜　一聞苦寒奏　再使豔歌傷

唯當時の樂府即ち軍中、馬上用ふる所の橫吹曲は武人の詞多きに居りて音に經鏘なるもの多く、能く北方文學の衣鉢を傳へぬ。鉦鐃鼓奏、企喩歌、折楊柳歌詞、木蘭詩等の篇の如き是れなり。北齊の敕勒歌も亦相似たり。(古詩源の說に依

隋

る)

輕靡の風は梁より陳に入る。後主文詞を雅尚し、自ら作る所のもの纖微極れり。徐陵出でて玉臺新咏の編あり。漢魏六朝の詩を集む。其序文は侈麗にして、六朝文辭の眞髓を得たり。

北朝は多少勁幹の風尚ありきと雖とも其見るべきものは周の庾信なるも亦實に梁の庾肩吾の子なりとす。

隋の煬帝復古の意あり。其作る所の豔情篇、飲馬長城窟行、白馬篇等當時に超然たり。又楊素の詩格清遠なるものあり。所謂風氣將に一轉するの時なりしと雖とも未だ之を果たすに至らず。故に纖麗輕靡の調は其滅亡に至て已まざりき。然れとも機運は既に漸く熟し始めたるなり。

春江花月夜　　煬帝

暮江平不動　春光滿正開　流波將月去　潮水帶星來

是を要するに南方文學の勢力は最も當時に現れ、漢魏より降て彫鏤の弊生じ、纖工侈麗風をなしたりと雖も文運は甚だ盛にして後世の爲に生面を開きたるもの多かりき。晉代に樂府の制定せられたるが如き亦其一例に非ずや。然れとも風骨乏しく氣韻寂寥にして徒らに末に奔りたる六朝文學は獨り讀で趣味索然たるのみに非ず、活氣なく、殆ど抑絵に對するの感あるなり。所謂文八代の衰の萌ある又洵に已むを得ざるなり。

第五期　唐朝文學

總說

文學の盛運

文學の盛運。唐朝の詩。詩の發達せる因。

唐朝はそれ支那に於ける文學極盛の時代なるかな。文學一道の流は此に至りて高潮となり、前後に觀るべからざるの盛運を致しき。太宗武功を以て天下を致したるも文德を以て海內を綏んず。天下の名儒を徵して學官となし、數ば國子監に幸して之をして講論せしむ。學生の能く一經已上に明なる者は官に補するを得、學舍を增築すること千二百間、學生を增し、三千二百六十員に滿ち。屯

唐朝の詩

營飛營よりしてまた博士を給して經を授け、能く經に通ずるものあれば貢舉を得ることを聽す。是に於て四方の學者京師に雲集す。乃ち高麗百濟新羅高昌、吐蕃の諸酋長に至るまで亦子弟を遣して請ふて國學に入る。講筵に升るもの八千餘人に至る。師說の多門にして章句の繁雜なるを以て孔穎達に命じて諸儒と五經疏を定めしむ。之を正義と云ふ。杜如晦、房玄齡、虞世南、褚亮、姚志廉、李玄道、禁允恭、薛元敬、顏相時、蘇勗、于志寧、蘇世長、薛收、李守素、陸德明、孔穎達、蓋文達、許敬宗是を十八學士と云ふ。然れども唐初の文運は其經學に於てよりは寧ろ詩に於て盛なりき。即ち陳隋の餘風は靡然として唐初に及び、所謂宮掖の風を有したりき。王勃の如き、楊炯の如き、盧照隣の如き、駱賓王の如き、猶其躰の艶冶を免かれず。獨り初唐に陳子昂を出して其風を一掃せりと云ふ。王阮亭曰く魏晉の風骨を奪ひ梁陳の俳優を變ずるは陳伯玉(子昂)の力最も大、張九齡之に繼ぎ、李太白亦之に繼ぐと。沈佺期、宋之問出づるに及で近體起る。所謂沈宋麗を增して變態未だ極らず、七言猶間雅を以て致となすなり。以上を初唐の詩風となす。開元天寶の際に至ては天下靡然として奢侈の風競ひ起り、上下昏々として

詩の發達せる因

文化の光に浴するとき、文學の斐然として一時に章をなせる、怪むに足らざるなり。李杜天倫の絕才を以て文壇を席捲す。子美は太白の飄逸を爲ること能はず、太白は子美の沉鬱を爲くること能はず。皆に當代の双美なりしのみならず、實に支那文學史中の奇觀を致しき。高適岑參の徒、孟浩然王昌齡の輩殆ど李杜と時を同うして盛唐の文壇を粧飾す。中唐には韋應物、淵明の氣體を得たりと稱せられ、錢起劉長卿等皆一時の傑と目せられ、又大曆十才子の詩を以て名あるあり。韓愈、文八代の衰を起し、道天下の溺を濟はんの意あり。其詩李杜に追逐せんとして籍湜の徒走て且つ僵る。之と相並で柳子厚あり。詩は淵明の峻潔を得、文は國語穀梁左氏に出づと傳へらる。元白二家平易流暢の詞を以て長韻を作り、辭を使ふ甚だ穩かなり。晚唐に至て詩風萎靡振はずと稱せらるゝも猶杜牧、李商隱、温庭筠の徒あり。然れども其末漸く下移し、遂に韓偓の香奩體を出し、裙裙腊粉の艶詞を作るに至り、唐代の詩風復見るべからず。

漢より下、魏晉六朝の間に育養せられたる文學は唐代隆昌の餘慶を承けて彩華映發し、加ふるに前後に空き李杜二家を出して支那文學史上第一の盛運を致し

き。然れども唐朝に於て最も盛なりしものは實に詩なりとなす。韓柳二家を出して文章の粹を發せしと雖とも二家を他にして殆ど見るべきものなく、韓自ら孟子を繼ぐと稱するも經術の唐朝に觀るべからざりしは又詩の爲に傾倒せられしが故に非ずや。而して詩賦の盛行せしにも似ず、小說戲曲の類尚も歷樓を空中に架し、人情の幾微を摘發するものは之を觀るに由なく、僅に會眞記遊仙窟紅線記、霍小玉傳の如き短篇小話を出したるに過ぎざるなり。南北朝以後南方文學は盛なりきと雖とも南方道教の影響は徒に虛無縹緲となり、人生を描き人情を寫すが如き世間的のものを致す能はず。且つ唐朝に於ける詩賦の流行は總べて他をして其傾倒する所となさしめぬ。蓋し詩をして此盛運に向はしめたるは實に詩が一種の採士法となり、玩弄物となり、粧飾物となりたるが爲めなり。實學を以て人を採らずして詩を以て之を取り、天子の離宮に幸するや、詩人をして屬和せしめ、頌德せしめ、詠景せしめ、其興を助け、以て盛代を飾らしめたるなり。斯る勢は唐代の文學をして殆ど詩に於てのみ發達せしめたるもの洵に自然の已むを得ざるに出づ。

一、初唐の詩

魏徵。四傑。陳子昂。沈宋體。張若虛。

六朝纖麗の習氣は唐初に入て猶泯びざりき。其風調は歌ふべきなるも氣格は未だ高からず。魏徵、開國佐命の功臣を以て嘗て述懷の作あり。唐初纖麗の氣習ある間に在ては洵に異數の作なり。

述懷　魏徵

中原還逐鹿　投筆事戎軒　縱橫計不就　慷慨志猶存　杖策謁天子　驅馬出關門　請纓繫南越　憑軾下東藩　欝紆陟高岫　出沒望平原　古木鳴寒鳥　空山啼夜猿　既傷千里目　還驚九折魂　豈不憚艱險　深懷國士恩　季布無二諾　侯嬴重一言　人生感意氣　功名誰復論

同時に虞世南、褚遂良、王績の徒あり。然れども初唐四傑の稱あるは實に王勃、楊炯、盧照鄰、駱賓王是れなり。王勃字は子安、絳州の人、麟德の初對策して朝散郎を授けらる、年未だ冠に及ばざるなり。沛王其名を聞て署府の修撰となす。鬪鷄檄文を作りたるが爲に高宗の怒に觸れて斥けられて府を出でゝ劍南に客たり。

其後官に仕へ、又罪に當る。父福峙坐して交趾令に左遷せらる。勃往て之を省せんとし、海を渡て溺れて終に死せり。時に年僅に二十九。時人をして腹藁と稱せしめ、閻都督として天才なりと歎ぜしめたる勃は洵に初唐の奇才なりけり。然れども彼が文中子の著を以て六朝末に鳴れる王通の後たるを思へば自から文才の系統的遺傳と其教育を承受したる所あるを知るに足らんか。

滕王閣　王勃

滕王高閣臨江渚　珮玉鳴鸞罷歌舞　畫棟朝飛南浦雲　珠簾暮捲西山雨　閒雲潭影日悠々　物換星移幾度秋　閣中帝子今何在　檻外長江空自流

楊炯

楊炯は華陰の人、少ふして神童に擧げられ、弘文館學士となる。則天武后の初梓州參軍に左遷せられて盈川令に終る。

從軍行

烽火照玉京　心中自不平　牙璋辭鳳闕　鐵騎繞龍城　雪暗凋旗畫　風多雜鼓聲　寧爲百夫長　勝作一書生

盧照鄰、字は昇之、范陽の人、鄧王府典籤を授けらる。後太白山に居りて藥を餌ふ。疾甚しきに及び具茨山に徙り、而して愈へず。終に世を厭ふて潁水に投じて死す。著はす所幽憂子三卷あり。

春晚山莊率題　盧照鄰

田家無四鄰　獨坐一園春　鶯啼非選樹　魚戲不驚綸　山水彈琴盡　風花酌酒頻　年華已可樂　高興復留人

駱賓王は義烏の人、武后の時臨海丞を授けられて平ならず。官を棄てゝ去る。徐敬業兵を擧ぐるに及び駱賓王を署して府屬となし、檄を天下に傳へしむ。后檄を讀で一材之土未乾、六尺之孤安在と云ふに至て嚴然として曰く、此人を失するは是れ宰相の過なりと。徐敗るゝに及で賓王亡命して終る所を知らず。

晚泊浦類　駱賓王

二庭歸王斷　万里客心愁　山路猶南屬　河源自北流　晚風連朔氣　新月照邊秋　荒火通軍壁　烽烟上戍樓　龍庭但苦戰　燕頷會封侯　莫作蘭山下空令漢國羞

王かゝ才あつて數奇なる、揚か俗氣あつて苛酷なる、盧か厭世の情熾なる、駱か功名

の念燃ゆるが如き、各其性行を異にし、境遇を異にし、從て其詩文の才に於ても同じからず。漢代に於ける賦は初唐に入て七言古詩となり、長韻の大篇を作り出せり。即ち盧が長安古意、駱が帝京篇の如き、是れなり。然れども盧が詩才を以て駱が詩才と比せよ。長安古意と帝京篇の差は能く之を語らんか。獨り二篇は二人が才の大小を較するのみに非ずして各其性格を表現す。長安古意の結末に云はずや、節物風光不相待、桑田碧海須臾改、昔時金階白玉堂、即今惟見青松在、寂々寥々揚子居、年々歲々一牀書、獨有南山桂花發、飛來飛去襲人裾と。厭世的觀念は最も能く表白せられたるに非ずや。駱が帝京篇、其末に於て云ふ、已矣哉、歸去來、馬卿辭蜀多、文漢、楊雄仕漢乏、眞然、三冬自矜誠足用、十年不調幾除邁、汲黯薪遺積孫弘開未開、誰惜長沙傅、獨負洛陽才と、駱が功名心は描盡せられたるに非ずや。楊炯に至ては王、楊、盧、駱の稱に慊焉として曰く、我れ盧の前に在るを愧ぢ、王の後に居を恥づと。然れども彼は到底王の上に出づべきの才に非ず。盧だも或は之に勝らんか。唯王や四傑の中最も傑出したるもの。唐初詩人蓋し王を推さんか。

唐初に於ては斯くの如く詩人を出したりと雖ども未だ六朝艶冶の習氣を一洗することを能はず。陳子昂出づるに及で力俳優の躰を掃ひ、直に建安の躰を追へり。韓昌黎の詩に云はく、國朝盛文章、子昂始高蹈と。子昂の重きや知るべきなり。子昂字は伯玉、射洪の人なり。文明の初め進士に擧げらる。武后擢でゝ左拾遺となす。聖歷の初官を解て歸る。縣令段簡宿怨を以て獄に投ず。子昂終に憂憤して死す。其作る所の感遇詩首々六朝の弊を脫して唐代の詩風を一振せり。即ち是れ多く北方文學を加味して南方文學の勢焰を殺ぎしもの。

感遇詩錄二　陳子昂

白日每不歸　青陽時暮矣　茫々吾何思　林臥觀無始　衆芳委時晦　鵾鴂鳴悲耳　鴻荒古已頹　誰識巢居子

幽居觀大運　悠々念群生　終古代興沒　豪聖莫能爭　三季淪周報　七雄滅秦嬴　復聞赤精子　提劍入咸京　炎光既無象　晉虜復縱橫　堯禹道已昧　昏虐勢方行　豈無當世雄　天道與胡兵　咄々安可言　時醉而未醒　仲尼溺東夏　伯陽遁西溟　大運自古來　旅人胡歎哉

沈宋體

嘗て六朝に於て沈約度信に依て創められたる詩律は初唐に於て沈佺期、宋之問を出して又之を變ぜしめ、音韻相和し、句を約し、篇に準じ、巧を馳せ、工を競ふに至りぬ。呼で沈宋體と云ふ。蓋し詩律は詩を彫鏤し、巧に過ぎて却て細工物となさしめたるの弊なきに非ず。六朝の産物としては洵に恰好なり。而も初唐の末又沈宋を出して終に後の不振を來すに至りき。沈宋二家は從來其人物としても殆ど唾せられんとしたる小人物なりき。故に才子傳には宋之問其婿劉希夷の詩に佳句ありたるを以て之を乞ひて得す、乃ち之を壓殺しきとあり。然れども之問の詩才は劉に比して優れり。沈德潛か辨じて此れ之問の品下流に居るに因て惡を以て之に歸するなりと云へるは恐くは當を得んか。之問酷薄なりと雖ども好事者は往々斯くの如き事を作るを思へば未だ容易に信を措くに足らざるなり。

古意

盧家少婦鬱金香　海燕雙棲玳瑁梁　九月寒砧催木葉　十年征戍憶遼陽　白狼河北音書斷　丹鳳城南秋夜長　誰爲含愁獨不見　更教明月照流黃

沈佺期

嵩山石淙侍宴應制　宋之問

離宮秘苑勝瀛洲　別有仙人洞壑幽　巖邊樹色含風冷　石上泉聲帶雨秋　鳥向歌筵來度曲　雲依帳殿結爲樓　微臣昔忝方明御　今日還陪八駿遊

張若虛

是後賀知章、包佶、張旭、張若虛等吳中四士の稱ありて初唐の殿をなす。而して張若虛豐富の想と瑰麗の筆を以て遠く沈宋に超越し、初唐輕靡の調を排して最後の光を放ちき。其作る所の春江花月夜は初唐中第一品の稱あり。

春江潮水連海平　海上明月共潮生　灩々隨波千万里　何處春江無月明　江流宛轉遶芳甸　月照花林皆似霰　空裏流霜不覺飛　汀上白沙看不見　江天一色無纖塵　皎々空中孤月輪　江畔何人初見月　江月何年初照人　人生代々無窮已　江月年々祇相似　不知江月待何人　但見長江送流水　白雲一片去悠々　青楓浦上不勝愁　誰家今夜扁舟子　何處相思明月樓　可憐樓上月徘徊　應照離人妝鏡臺　玉戶簾中捲不去　搗衣砧上拂還來　此時相望不相聞　願逐月華流照君　鴻雁長飛光不度　魚龍潛躍水成文　昨夜閑潭夢落花　可憐春半不還家　江水流春去欲盡　江潭落月復西斜　斜月沉々藏海霧

碣石瀟湘無限路　不知乘月幾人歸　落月搖情滿江樹

何ぞ其句の麗にして其想の巧なるや。若虛此手腕ありて世獨り此篇を存して傳ふるのみ。然れども累々たる幾千の句中傳ふるものなきに比すれば一篇の春江花月夜の價豈啻に連城璧のみならんや。

二、李白と杜甫

李白の傳。其人物。其詩。杜甫の傳。其人物。其詩。李と杜。盛唐の詩。

唐の開元天寶の際は唐朝の隆盛極て又衰替の變を生じたるの時なりき。六朝の文學は唐の太平に煦濡せられて風氣開け、此に至て其絶頂に達したりき。而して李白と杜甫は此間に出でゝ一代の文運を左右し、唐朝文學をして前後に絶するの盛運を見るに至らしめぬ。時代は李杜を作り、李杜は又時代を作りたるなり。

李杜文章在、光焰万丈長、混々たる詩道の流は原初より曲折あり波瀾ありて千狀万態を呈したりと雖とも未だ其妙所に達せざりしもの是に至て一變して千古の奇觀となり、變幻の妙を極め、神驚き魂動くの壯觀を現じたるなり。前代の風

を一振して詩道の爲に一局面を開きたる、洵に二家の力なり。

李白、字は太白、蜀の人なり。世、山東の産と稱するは其流寓の地たりしより之を誤れるなるべし。長安元年を以て生る。青蓮居士、酒仙翁は其自ら號する所なり。人となり、倜儻にして縱横を喜び、擊劍を好み、任俠をなす。嘗て數人を手刃す。財を輕じ、施を重じ、產業を事とせず。禮部尚書蘇頲の益州長史となるや、太白路に則を投ず。頲待つに布衣の禮を以てし、群寮に謂て曰く、此の子天才英靈、筆を下して休まざれば風力未だ成らずと雖とも且く專草の骨を見る、若し之を廣むるに學を以てすれば以て相如と肩を比すべしと。時に東巖子なるもの岷山の陽に隱る。太白道氣あり、之に從て遊學し居ること數年、城市を跡せず。奇禽を養ふこと千計、功名の心を抑へて山中の霞を吸ふ。其後出でゝ襄漢に遊び、南洞庭に泛び、東金陵に至り、更に汝海に客となり、還て雲夢に憩ひ、故相許圃師の孫女を娶り、遂に安陸に留るもの十年。偶郭子儀を行伍の中に識り、主師に言て其刑責を脫せしめ、睢郡の元參軍と妓を攜へて晉祠に遊び、舟を浮べて水を弄す。已にして齊魯に之き、孔巢父、韓準、裴政、張叔明、陶沔と徂徠山に會し、酣飲縱酒、竹溪

の六逸と號す。天寶元年會稽に遊び道士吳筠と共に剡中に居る。會ま筠召を以て闕に赴き、之を朝に薦む。玄宗乃ち詔を下して之を徵す。今や一世の詩人は九重の上に知られんとするなり。太白京師に至り、太子の賓客賀知章と紫極宮に遇ふ。知章一見之を賞して曰く、此れ天上の謫仙人なりと。因て金龜を解き、酒に換へて樂となし、之を玄宗に言ふ。帝召して金鑾殿に見、當世の務を論ぜしむ。其答蕃書を草する、懸河の若くにして筆停澁せず。又宣唐鴻猷一篇を上る。帝之を嘉して七寶牀を以て食を賜ひ、手羹を調して以て之を飯せしめて謂て曰く、卿は是れ布衣、名朕の知る所となる、もと道義を蓄ふるに非れば何を以てか此命を得んと。翰林に供奉して專ら密命を掌らしむ。殊遇と謂ふべきなり。太白嘗て長安に在て賀知章、汝陽王璡、崔宗之、裴周南等と酒中八仙の遊をなす。杜甫の飲中八仙歌は之を詠じたるなり。太白翰林に在て代て王言を草す。然れども性酒を嗜みて沈飲多し。時あつて召して撰述せしむれば方に醉中に在り。左右水を以て面に沃ぎて稍解く。即ち筆を乘らしむるに頃くにして成る。帝甚だ之を才とし、數は宴飲に侍す。沈醉に因て足を引き、高力士をして靴を脫せしむ。力士之を恥ず。是より先開元中興慶池東沈香亭前に牡丹を植え、花方に開く。帝其愛する所の楊貴妃及び梨園の弟子李龜年等を從へて之に幸す。龜年等進で歌はんとす。帝曰く、名花を賞し、妃子に對す、焉ぞ雅樂詞を用ひることを爲さんと。遂に龜年に命じ、金花箋を持し李白をして清平調辭三章を進めしむ。白欣然として旨を承く、猶宿醒未だ解かざるに苦むを以て筆を授けて之を賦せしむ。其辭に曰く、

雲想衣裳花想容　春風拂檻露華濃　若非群玉山頭見　會向瑤臺月下逢

一枝濃艷露凝香　雲雨巫山枉斷腸　借問漢宮誰得似　可憐飛燕倚新粧

名花傾國兩相歡　長得君王帶笑看　解釋春風無限意　沉香亭北倚欄干

龜年辭を以て進む。帝梨園の弟子に命して絲竹を撫さしめ、遂に龜年を促して以て歌はしむ。貴妃玻璃七寶盞を持して西涼州の蒲桃酒を酌み、笑て歌意を領す。帝是より太白を顧る尤も他學士に異る。會ま高力士靴を脫するを以て深く耻となす。翼日貴妃前詞を吟ずるに當り、力士詞を以て太白の貴妃を辱むるものとなす。帝三び白を官せんと欲し、貴妃の沮む所となれるは是か爲なり。

又張垍の讒する所となる。白終に山に還らんことを求む。帝乃ち金を賜て放ち歸らしむ。是に於て從祖陳留に從て大使孟允を採訪し、北海の高天師に請ふて道籙を齊州の紫極宮に授けらる。是より四方に浮游し、北趙魏燕晉に抵り、西邠岐を陟り、商於を歷て洛陽に至り、南淮泗に遊び、再び會稽に入て剡中に家富す。齊魯の間に往來すること前後十年中惟梁宋に遊ぶこと最も久しとなす。彼が杜子美と結交歡好の日も實に此間にありたるが如し。嘗て二人、高適と汴州を過ぎ、酒酣にして吹臺に登り、慷慨古人を懷ふ。其後杜甫遣懷詩を作て曰く、昔與高李輩、論交入酒壚、兩公壯藻思、得我色敷腴、氣酣登吹臺、懷古入平蕪と。又昔遊詩に云ふ、昔者與高李、晚登單父臺、寒蕪際禍石、万里風雲來と。李白又魯郡東石門送杜二甫詩及び沙邱城下寄杜甫詩あり。

醉別復幾日　登臨徧池臺　何時石門路　重有金樽開　秋波落泗水　海色明徂來　飛蓬各自遠　且盡手中杯

我來竟何事　高臥沙丘城　城邊有古樹　日夕連秋聲　魯酒不可醉　齊歌空復情　思君若汶水　浩蕩寄南征

交情の密なる想ふべきなり。既にして廣陵に遊び、魏萬相と相遇ひ、遂に舟を同うして秦淮に入り、金陵に上り、南朝の故都を吊ひ、萬相と相別れて復宣城諸處に往來し、又剡中に之き、遂に廬山に入る。時に永王璘、江陵府都督たり。山南東路及び嶺南黔中江南西路四道の節度使を兼ぬ。白の才名を重じて辟して府僚の佐となす。璘の擅に舟師を引て東下するに及で白を脅かして以て偕に行く。既にして璘の兵敗る。太白亡て彭澤に走り、坐して尋陽の獄に繫がる。宣慰大使崔渙及び御史中丞宋若思之か爲に推覆清雪す。若思兵を率て河南に赴き、其囚を釋し、軍事に參謀せしめ、上書して白の才の用ふべきを以てす。報ぜられず。永王の事を以て夜郎に流さる。遂に洞庭に泛び、三峽に上り、巫山に至る。未だ夜郎に至らずして赦に遇て釋さるゝを得たり。還て江夏岳陽に憩ひ、復尋陽に如く。其後金陵に遊び、又宣城歷陽二郡の間を往來す。時に族李陽冰、當塗の令たり。太白往て之に依る。寶應元年十一月疾を以て卒す。時に年六十二。世に傳ふ、太白、當塗に在り、宮錦袍を着し、采石に遊び、江中傲然として自得し、旁ら人なきが若し。醉ふて水中の月影を捉へんとして水に溺れて死す。故に其地

其人物

捉月臺ありと。嗜酒太白の如き、酒落飄逸太白の如き、此事必しもなきを保せず。後人詩あり。采石月下逢謫仙、夜披錦袍坐釣船、醉中愛月江底懸、以手弄月身翻然、不應暴落飢蛟涎、便當騎鯨上青天と。之を云ふなり。舊唐書本傳には曰く、白飲酒過度を以て死すと。孰れにしても斗酒辭せざる李白は酒の爲に逝て帝の側に侍したるなり。子あり。男を伯禽と曰ひ、女を平陽と曰ふ。

李白は素功名の士なりき。嘗て安州の裴長史に上るの書に云ふ、五歲誦六甲、十歲觀百家、橫經枕籍、制作不倦、迄于今三十春矣、以爲士生則桑弧蓬矢射乎四方、故知大丈夫必有四方之志、乃杖劍去國、辭親遠遊、南窮蒼梧、東接溟海、云々と。彼が四方に遊びたるも功名を博さんが爲なり。縱橫を喜び、任俠を好みたるも之が爲なり。永王璘の帷幕に參したるも之を實行せんが爲なり。然れども彼が道家の說を喜びたるは一方の功名心を抑へ、其性をして酒落豁達に脫俗飄逸ならしめ、彼をして超絕的とならしめ、政治上の野心を棄てゝ專ら出世間的となさしめき。且つそれ李白は詩人的能力を有せり。獨は古へ司馬相如を出したるの地。相如か文學に成功したるは李白幼時より之を欽慕す。其送從姪耑遊廬山序に云

其詩

ふ、余少時大人令誦子虛賦、私心慕之、及長南遊雲夢、覽七澤之壯觀、酒隱安陸、蹉跎十年と。少時の感慨は永く其腦裏に印し、久く功名を待つ能はず。道家の影響は彼が詩人的能力と相合して酒に隱れて俗を超え、終に功名心を抑へて詩的生涯を送らしめ、功人として成功せしめたるなり。

彼れ既に功名に志を得ず。然れども霸氣や既に文學上に現はる。其詩道に於て自ら任ずる、豪氣堂々として氣宇文壇を呑めり。

大雅久不作　吾衰竟誰陳　王風委蔓草　戰國多荊榛　龍虎相啖食　兵刃逮狂秦　正聲何微茫　哀怨起騷人　楊馬激頹波　開流蕩無垠　廢興雖萬變　憲章亦已淪　自從建安來　綺麗不足珍　聖代復元古　垂衣貴淸眞　群才屬休明　乘運共躍鱗　文質相炳煥　衆星羅秋旻　我志在刪述　垂輝映千春

希聖如有立　絕筆於獲麟

豪放一世に施せりと謂ふべし。李白此抱負あり。而して天才を有す。終に文壇を席卷して支那文學史上の將星となりたるもの豈徒爾ならんや。

李白は蜀の人なり。故に其作る所自から蜀の風氣を受けて險奇なる處あり。

且つ其性の豪放なると四方に遊びたると道學の影響は豪放飄逸なる處を有す。彼が地才に非ずして天才と呼ばれ、人才に非ずして仙才と呼ばゝるは是が爲なり。彼は情の人に非ずして氣の人なり。彼は學で得たるの人に非ずして直に悟りたる人なり。其氣韻を以て勝れりと稱せられ千秋の逸調と歎せらるゝは是が故なり。彼は天馬空を行て羈勒すべからざるの勢ありと評せらる。然れども彼は法度の外に超逸するものに非ず。其法度に至ては則ち森嚴にして犯すべからず。唯それ尋常詩人が心を苦め鏤刻するが如きは彼に於て即ち莫し。彼の才は奔放にして然も法度を外れさるなり。群兒の彼に及ばざるは洵に所以あつて存す。白は仙骨の人なり。豪逸の士なり。天才なり。情の人に非ず。故に其詠ずる所多く天然に在り。風月草木にあり。神仙虛無にあり。功名の心時に或は勃然として發して人事に關したるもの違別離、蜀道難の如きもの莫きに非ずと雖ども白が得意とする所は寧ろ想を自然の間に騁するに在り。太白の古樂府は杳冥愉悅縱橫變幻才人の致を極む然れども白から太白の樂府と蕪苑巵言に云へるもの、移して以て太白の詩を舉げて以て爾か云ふを得べし。

烏夜啼　李白

黃雲城邊烏欲棲　歸飛啞々枝上啼　機中織錦秦川女　碧紗如煙隔窓語　停捉帳然憶遠人　獨宿空房淚如雨

餘韻嫋々として盡きず。是れ豈樂府の上乘なるものに非ずや。然れども李白が眞正の大手腕は之を蜀道難、遠別離、襄陽曲等の諸作に於て見ざるべからず。

襄陽曲　李白

落日欲沒峴山西　倒著接羅花下迷　襄陽小兒齊拍手　攔街爭唱白銅鞮　傍人借問笑何事　笑殺山翁醉似泥　鸕鷀杯　鸕鷀杯　百年三万六千日　一日須傾三百杯　遙看漢水鴨頭綠　恰似葡萄初釀酷　此江若變作春酒　壘麴便築糟邱臺　千金駿馬換小妾　笑坐雕鞍歌落梅　車傍側挂一壺酒　鳳笙龍管行相催　咸陽市中歎黃犬　何如月下傾金罍　君不見晉朝羊公一片石　龜頭剝落生莓苔　淚亦不能爲之墮　心亦不能爲之哀　清風朗月不用一錢買　玉山自倒非人推　舒州杓　力士鐺　李白與爾同死生　襄王雲雨今安在　江水東流猿夜聲

其鳴皐歌は沈德潛の評して學楚騷而長短疾徐橫縱馳驟又復變化其體是爲仙才と云ふもの。變幻測るべからず。以て蜀道難の險怪と相伍すべし。

鳴皐歌送岑徵君

若有人兮思鳴皐　阻積雪兮心煩勞　洪河凌競不可以徑度　氷龍鱗兮難容舠　邈仙山之峻極兮　聞天鼓之嘈々　霜厓縞皓以合沓兮　若長風扇海濤涂溟之波濤　玄猿綠熊　攀崱崒岌危　柯振石　駭膽慄魂　羣呼而相號　峰峰巒巒而路絕　桂星辰千巖皎　送君之歸兮　動鳴皐之新作　交鼓吹兮彈絲　觴清冷之池閣　君不行兮何待　若返顧之黃鶴　掃梁園之羣英振大雅於東洛　巾征軒兮歷阻折　尋幽居居越巘崎　盤白石兮坐素月　琴松風兮寂萬壑　望不見兮心氣氤　蘿冥々兮霰紛々　水橫洞以下綠波小聲而上聞　虎嘯谷而生風　韶濩溪而吐雲　寡鶴清唳　飢猿頻呻　魂獨處此幽默兮　愀空山而愁人　鷄聚族而以爭食　鳳孤飛而無鄰　蝦蟆唧龍　魚目混珍　嫫母衣錦　西施負薪　若使巢由桎梏於軒冕兮　亦奚異乎夔龍蹴蹐於風塵　哭何苦而救楚笑何誇而邵秦　吾誠不能學二子沽名矯節而以耀世兮　固將棄天地而遺身　白鷗兮飛來長與君兮相親

太白天縱逸才落筆警挺其歌行は跌宕自ら喜び整栗に閑せず唐初の規制地を掃て盡きんと欲すと云へるは斯くの如き作多ければなり。其五七律の如き亦氣象雄逸にして筆力縱橫馳騁す。

塞下曲錄一

塞虜乘秋下　天兵出漢家　將軍分虎竹　戰士臥龍沙　邊月隨弓彎　胡霜拂劍花　玉關殊未入　少婦莫長嗟

鸚鵡洲

鸚鵡來過吳江水　江上洲傳鸚鵡名　鸚鵡西飛隴山去　芳洲之樹何青々　煙開蘭葉香風暖　岸夾桃花錦浪生　遷客此時徒極目　長洲孤月向誰明

其七言絕句は六朝清商小樂府より來り氣槩揮斥颯を迴らし電を掣し人をして天際に縹緲せしむと稱せらる。餘韻遠く言外に存して神往かしむるの妙を存するが故なり。

黃鶴樓聞笛

杜甫の傳

一爲遷客去長沙　西望長安不見家　黃鶴樓中吹玉笛　江城五月落梅花

望天門山

天門中斷楚江開　碧水東流向北廻　兩岸青山相對出　孤帆一片日邊來

七言絶句は唐風の調未だ諧はざるに當て李白古詩樂府を作るの掣鯨手を以て此の情景並び至るの好絶句を詠じ以て檀場の舉を專にしたるなり。何を作てか巧ならざるものあらんや。

李白と時を同うして杜甫出づ。詩壇双星の一なり。甫字は子美、襄陽の人。少ふして貧に、自ら振はず。吳越齊趙の間に客たり。李邕其材を奇とす。乃ち先づ往て之を見る。開元の末進士に舉げられんとし、第に中らず。落第秀才長安に困む。天寶十載玄宗、太清宮に朝獻するに當り、甫、三大禮賦を奏す。帝之を奇とし、召して文章を試み、擢でゝ河西尉となす。拜せず。乃ち改めて右衞率府胄曹參軍となす。數ば賦頌を上る。彼か伏惟天子哀憐之、若令執先人故事、掃泥塗之久辱、則臣之述作雖不足鼓吹六經、先鳴諸子、至沈鬱頓挫、隨時敏給、揚雄枚皐可企及也、と自ら薦めたるも此時なり。安祿山京師を陷るに及で天子蜀に幸す。甫

避けて三川に走る。肅宗立つに及で嵐服行在に奔らんとして賊の得る所となる。至德二年亡げて鳳翔に走り、肅宗に彭原に謁し、右拾遺に拜せらる。宰相房琯は甫と布衣の交あり。琯兵を帥て陳濤斜に破られ、爲に相を罷む。甫上疏して琯の才あるを言ひ、逆鱗に觸れて琯は刺史となり、甫は出でゝ華州司功參軍となる。時に關輔亂れて穀食貴し。輙ち官を棄てゝ去て秦州に客たり。薪を負ひ、掾栗を採て自ら給し、劍南に流落し、廬を成都の西郭に結ぶ。既にして召されて京兆功曹參軍に補せらる。至らず。上元二年の冬黃門侍郎鄭國公嚴武、劍南東西川節度たり。甫乃ち往て依る。武奏して節度參謀檢校書工部員外郎となす。武、世嚴を以て甫を待すること甚だ善し。然れども甫が性褊燥にして器度なく恩を恃みて放恣なり。嘗て醉に憑て武の牀に登り、武を瞪視して曰く、嚴挺之乃ち才見ありと。武も亦急激の性なりと雖とも敢て忤はず。甫、成都の浣花里に於て竹を種え、樹を植え、廬を結び、江に枕し、酒を縱にして嘯詠し、田夫野老と相狎蕩して拘檢なし。嚴武之を過ぐるも時あつて冠せずと云ふ。其傲誕此の如し。新唐の本傳に武、甫を殺さんとすの記事を載するも信ずべからず。朱瀚も既に